

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（44）

東九州自動車道建設（志布志 I C～鹿屋串良 J C T間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

まき やま
牧山遺跡 3

（鹿屋市串良町）

縄文時代前期以降編

第2分冊

2022年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

総目次

第1分冊

巻頭図版

序文

抄録

例言・凡例

目次

第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯

第2節 一部本調査

第3節 事前調査・本調査

第4節 本調査

第5節 整理作業・報告書作成業務

第6節 志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

第2節 歴史的環境（周辺の遺跡を中心に）

第III章 調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

2 遺構の認定・分類・時期判断と検出方法

3 整理・報告書作成作業の方法及び内容

4 出土遺物の分類について

第2節 層序

第IV章 発掘調査の成果

第1節 縄文時代前期～中期の調査成果

1 調査の概要

2 遺構

3 遺物

第2節 縄文時代後期～晩期の調査成果

1 調査の概要

2 遺構

第2分冊

第IV章 発掘調査の成果

第2節 縄文時代後期～晩期の調査成果

3 遺物

第3節 弥生時代以降の調査成果

1 調査の概要

2 遺構

3 遺物

第V章 自然科学分析

第1節 自然科学分析の概要

第2節 牧山遺跡の放射性炭素年代測定 1

第3節 牧山遺跡の放射性炭素年代測定 2

第4節 牧山遺跡の炭化種実同定

第5節 牧山遺跡の炭素・窒素安定同位体比分析

第6節 牧山遺跡出土試料の自然科学分析

第7節 牧山遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）

および炭素・窒素安定同位体比分析

第8節 牧山遺跡出土遺物の蛍光 X 線分析

第9節 牧山遺跡における土器圧痕調査成果

第VI章 総括

第1節 縄文時代前期～中期

第2節 縄文時代後期～晩期

第3節 弥生時代以降

第4節 遺跡について

写真図版（遺構）

写真図版（遺物）

奥付

第2分冊本文目次

第IV章 発掘調査の成果

第2節 縄文時代後期～晩期の調査成果

3 遺物…………… 1

第3節 弥生時代以降の調査成果…………… 184

1 調査の概要…………… 184

2 遺構…………… 184

3 遺物…………… 193

第V章 自然科学分析…………… 204

第1節 自然科学分析の概要…………… 204

第2節 牧山遺跡の放射性炭素年代測定 1…………… 204

第3節 牧山遺跡の放射性炭素年代測定 2…………… 206

第4節 牧山遺跡の炭化種実同定…………… 208

第5節 牧山遺跡の炭素・窒素安定

同位体比分析…………… 210

第6節 牧山遺跡出土試料の自然科学分析…………… 212

第7節 牧山遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）

および炭素・窒素安定同位体比分析…………… 220

第8節 牧山遺跡出土遺物の蛍光 X 線分析…………… 226

第9節 牧山遺跡における土器圧痕調査成果…………… 228

第VI章 総括…………… 240

第1節 縄文時代前期～中期…………… 240

第2節 縄文時代後期～晩期…………… 240

第3節 弥生時代以降…………… 255

第4節 遺跡について…………… 255

写真図版（遺構）…………… 256

写真図版（遺物）…………… 286

奥付

挿図目次

第241図	縄文時代後期～晩期全土器分布図(1)……………	1	第287図	第IX類土器(2)……………	47
第242図	縄文時代後期～晩期全土器分布図(2)……………	2	第288図	第IX類土器(3)……………	48
第243図	第III類・第IV類土器出土状況図……………	3	第289図	第IX類土器(4)……………	49
第244図	第V類・第VI類土器出土状況図……………	4	第290図	第IX類土器(5)……………	50
第245図	第VII類・第VIII類土器出土状況図……………	5	第291図	第IX類土器(6)……………	51
第246図	第IX類・第VI～X類不明土器出土状況図……………	6	第292図	第IX類土器(7)……………	52
第247図	第X-a類・第X-b類土器出土状況図……………	7	第293図	第X-a類土器(1)……………	53
第248図	第X-c類・第X-d類土器出土状況図……………	8	第294図	第X-a類土器(2)……………	54
第249図	第XI類・第XII類土器出土状況図……………	9	第295図	第X-a類土器(3)……………	55
第250図	第XIII類・型式不明土器出土状況図……………	10	第296図	第X-a類土器(4)……………	56
第251図	縄文時代後期～晩期土器接合図(1)……………	11	第297図	第X-a類土器(5)……………	57
第252図	縄文時代後期～晩期土器接合図(2)……………	12	第298図	第X-b類土器(1)……………	57
第253図	縄文時代後期～晩期土器接合図(3)……………	13	第299図	第X-b類土器(2)……………	58
第254図	縄文時代後期～晩期土器接合図(4)……………	14	第300図	第X-b類土器(3)……………	59
第255図	縄文時代後期～晩期土器接合図(5)……………	15	第301図	第X-c類土器(1)……………	60
第256図	縄文時代後期～晩期土器接合図(6)……………	16	第302図	第X-c類土器(2)……………	61
第257図	縄文時代後期～晩期土器接合図(7)……………	17	第303図	第X-c類土器(3)……………	62
第258図	縄文時代後期～晩期土器接合図(8)……………	18	第304図	第X-c類土器(4)……………	63
第259図	縄文時代後期～晩期土器接合図(9)……………	19	第305図	第X-c類土器(5)……………	64
第260図	第III類土器……………	20	第306図	第X-d類土器(1)……………	65
第261図	第IV類土器(1)……………	21	第307図	第X-d類土器(2)……………	66
第262図	第IV類土器(2)……………	22	第308図	第X-d類土器(3)……………	67
第263図	第IV類土器(3)……………	23	第309図	無文土器【精製】(1)……………	68
第264図	第IV類土器(4)……………	24	第310図	無文土器【精製】(2)……………	69
第265図	第IV類土器(5)……………	25	第311図	無文土器【精製】(3)……………	70
第266図	第IV類土器(6)……………	26	第312図	無文土器【精製】(4)……………	71
第267図	第IV類土器(7)……………	27	第313図	無文土器【精製】(5)……………	72
第268図	第IV類土器(8)……………	28	第314図	無文土器【精製】(6)……………	73
第269図	第V類土器(1)……………	29	第315図	無文土器【粗製】(1)……………	74
第270図	第V類土器(2)……………	30	第316図	無文土器【粗製】(2)……………	75
第271図	第V類土器(3)……………	31	第317図	無文土器【粗製】(3)……………	76
第272図	第V類土器(4)……………	32	第318図	無文土器【粗製】(4)……………	77
第273図	第V類土器(5)……………	33	第319図	無文土器【粗製】(5)……………	78
第274図	第V類土器(6)……………	34	第320図	無文土器【粗製】(6)……………	79
第275図	第VI類土器(1)……………	35	第321図	無文土器【粗製】(7)……………	80
第276図	第VI類土器(2)……………	36	第322図	第XI類土器……………	81
第277図	第VI類土器(3)……………	37	第323図	第XII-a類土器……………	82
第278図	第VI類土器(4)……………	38	第324図	第XII-b類土器(1)……………	83
第279図	第VII類土器(1)……………	39	第325図	第XII-b類土器(2)・第XII類土器浅鉢……………	84
第280図	第VII類土器(2)……………	40	第326図	底部(1)……………	85
第281図	第VIII類土器(1)……………	41	第327図	底部(2)……………	86
第282図	第VIII類土器(2)……………	42	第328図	底部(3)……………	87
第283図	第VII・VIII類土器(1)……………	43	第329図	底部(4)……………	88
第284図	第VII・VIII類土器(2)……………	44	第330図	底部(5)……………	89
第285図	第VII・VIII類土器(3)……………	45	第331図	台付皿形土器(1)……………	90
第286図	第IX類土器(1)……………	46	第332図	台付皿形土器(2)……………	91

第 333 図	台付皿形土器 (3)	92	第 374 図	包含層出土石器 (20)	167
第 334 図	台付皿形土器 (4)	93	第 375 図	包含層出土石器 (21)	168
第 335 図	台付皿形土器 (5)	94	第 376 図	包含層出土石器 (22)	169
第 336 図	第Ⅷ類土器 (1)	95	第 377 図	包含層出土石器 (23)	170
第 337 図	第Ⅷ類土器 (2)	96	第 378 図	包含層出土石器 (24)	171
第 338 図	円盤状土製品・その他	97	第 379 図	包含層出土石器 (25)	172
第 339 図	縄文時代後期～晩期全石器 石材別分布図 (1)	131	第 380 図	包含層出土石器 (26)	173
第 340 図	縄文時代後期～晩期全石器 石材別分布図 (2)	132	第 381 図	包含層出土石器 (27)	174
第 341 図	縄文時代後期～晩期石器石材別分布図 (ホルンフェルス)	133	第 382 図	包含層出土石器 (28)	175
第 342 図	縄文時代後期～晩期石器石材別分布図 (頁岩)	134	第 383 図	包含層出土石器 (29)	176
第 343 図	縄文時代後期～晩期石器石材別分布図 (黒曜石)	135	第 384 図	包含層出土石器 (30)	177
第 344 図	縄文時代後期～晩期石器石材別分布図 (安山岩・凝灰岩・砂岩・花崗岩・軽石)	136	第 385 図	包含層出土石器 (31)	178
第 345 図	縄文時代後期～晩期石器石材別分布図 (水晶・石英・玉髄・チャート・滑石)	137	第 386 図	包含層出土石器 (32)	179
第 346 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (1)	138	第 387 図	土坑 1・2 号	184
第 347 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (2)	139	第 388 図	弥生時代以降の遺物分布図 (上) と 遺構配置図 (下)	185
第 348 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (3)	140	第 389 図	弥生時代以降の遺物分布図 (1)	186
第 349 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (4)	141	第 390 図	弥生時代以降の遺物分布図 (2)	187
第 350 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (5)	142	第 391 図	弥生時代以降の遺物分布図 (3)	188
第 351 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (6)	143	第 392 図	炭化物集中部・古道跡・溝状遺構配置図	189
第 352 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (7)	144	第 393 図	炭化物集中部	190
第 353 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (8)	145	第 394 図	古道跡 1・2 号	190
第 354 図	縄文時代後期～晩期石器器種別分布図 (9)	146	第 395 図	古道跡 3 号	191
第 355 図	包含層出土石器 (1)	148	第 396 図	古道跡 4～7 号	192
第 356 図	包含層出土石器 (2)	149	第 397 図	弥生時代の土器 (1)	193
第 357 図	包含層出土石器 (3)	150	第 398 図	弥生時代の土器 (2)	194
第 358 図	包含層出土石器 (4)	151	第 399 図	弥生時代の土器 (3)	195
第 359 図	包含層出土石器 (5)	152	第 400 図	弥生時代の土器 (4)	196
第 360 図	包含層出土石器 (6)	153	第 401 図	弥生時代の土器 (5)	197
第 361 図	包含層出土石器 (7)	154	第 402 図	古墳時代の土器 (1)	198
第 362 図	包含層出土石器 (8)	155	第 403 図	古墳時代の土器 (2)	199
第 363 図	包含層出土石器 (9)	156	第 404 図	陶磁器・金属製品	200
第 364 図	包含層出土石器 (10)	157	第 405 図	暦年較正結果	205
第 365 図	包含層出土石器 (11)	158	第 406 図	暦年較正結果	207
第 366 図	包含層出土石器 (12)	159	第 407 図	炭素・窒素安定同位体比 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)	211
第 367 図	包含層出土石器 (13)	160	第 408 図	炭素安定同位体と C/N 比の関係 (吉田・西田 (2009) に基づいて作製)	211
第 368 図	包含層出土石器 (14)	161	第 409 図	暦年較正結果	215
第 369 図	包含層出土石器 (15)	162	第 410 図	測定結果と食材の比較	217
第 370 図	包含層出土石器 (16)	163	第 411 図	炭素・窒素安定同位体比グラフ (参考)	223
第 371 図	包含層出土石器 (17)	164	第 412 図	暦年較正年代グラフ (参考)	224
第 372 図	包含層出土石器 (18)	165	第 413 図	炭素安定同位体比・C/N 比グラフ (参考)	225
第 373 図	包含層出土石器 (19)	166	第 414 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 1	232
			第 415 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 2	233
			第 416 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 3	234
			第 417 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 4	235
			第 418 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 5	236

第 419 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 6	237	第 431 図	第 X -a ~ X -d 類 (西平式系無文土器) 分布図 (2)	248
第 420 図	検出した土器圧痕とレプリカ SEM 画像 7	238	第 432 図	第 X -a ~ X -d 類 (西平式系無文土器) 相当期 遺構配置図 (1)	247
第 421 図	検出した土器圧痕と拡大画像	239	第 433 図	第 X -a ~ X -d 類 (西平式系無文土器) 相当期 遺構配置図 (2)	248
第 422 図	牧山遺跡掘立柱建物跡 (想定)	240	第 434 図	第 VI ~ X 類 (西平式系不明土器) 分布図及び遺構配置図	249
第 423 図	牧山遺跡落とし穴変遷案	241	第 435 図	第 XII 類土器 (中岳 II 式土器) 分布図及び遺構配置図	249
第 424 図	牧山遺跡土器変遷案	243	第 436 図	土器・石器総出土状況図	251
第 425 図	第 III ~ V 類土器分布図及び遺構配置図	244	第 437 図	打製石斧分布図	252
第 426 図	第 VI ~ IX 類 (西平式系有文土器) 分布図 (1)	245	第 438 図	石冠分類図	253
第 427 図	第 VI ~ IX 類 (西平式系有文土器) 分布図 (2)	246	第 439 図	干迫遺跡出土石冠	254
第 428 図	第 VI ~ IX 類 (西平式系有文土器) 相当期 遺構配置図 (1)	245			
第 429 図	第 VI ~ IX 類 (西平式系有文土器) 相当期 遺構配置図 (2)	246			
第 430 図	第 X -a ~ X -d 類 (西平式系無文土器) 分布図 (1)	247			

表目次

第 58 表	第 III 類土器観察表	20	第 96 表	底部観察表②	127
第 59 表	第 IV 類土器観察表①	98	第 97 表	台付皿形土器観察表①	128
第 60 表	第 IV 類土器観察表②	99	第 98 表	台付皿形土器観察表②	129
第 61 表	第 IV 類土器観察表③	100	第 99 表	第 XIII 土器観察表①	129
第 62 表	第 V 類土器観察表①	101	第 100 表	第 XIII 土器観察表②	130
第 63 表	第 V 類土器観察表②	102	第 101 表	円盤状土製品	130
第 64 表	第 V 類土器観察表③	103	第 102 表	その他	130
第 65 表	第 V 類土器観察表④	104	第 103 表	包含層出土石器観察表①	180
第 66 表	第 VI 類土器観察表①	104	第 104 表	包含層出土石器観察表②	181
第 67 表	第 VI 類土器観察表②	105	第 105 表	包含層出土石器観察表③	182
第 68 表	第 VI 類土器観察表③	106	第 106 表	包含層出土石器観察表④	183
第 69 表	第 VII 類土器観察表①	107	第 107 表	包含層出土打製石斧観察表	183
第 70 表	第 VII 類土器観察表②	108	第 108 表	古墳時代土坑出土土器観察表	201
第 71 表	第 VIII 類土器観察表①	108	第 109 表	弥生時代土器観察表①	201
第 72 表	第 VIII 類土器観察表②	109	第 110 表	弥生時代土器観察表②	202
第 73 表	第 VII 類・第 VIII 類土器胴部観察表①	109	第 111 表	古墳時代土器観察表①	202
第 74 表	第 VII 類・第 VIII 類土器胴部観察表②	110	第 112 表	古墳時代土器観察表②	203
第 75 表	第 VII 類・第 VIII 類土器胴部観察表③	111	第 113 表	陶磁器観察表	203
第 76 表	第 IX 類土器観察表①	111	第 114 表	金属製品観察表	203
第 77 表	第 IX 類土器観察表②	112	第 115 表	測定試料及び処理	205
第 78 表	第 IX 類土器観察表③	113	第 116 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	205
第 79 表	第 IX 類土器観察表④	114	第 117 表	測定試料及び処理	207
第 80 表	第 X 類土器観察表①	114	第 118 表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	207
第 81 表	第 X 類土器観察表②	115	第 119 表	牧山遺跡から出土した炭化種実	208
第 82 表	第 X 類土器観察表③	116	第 120 表	結果一覧表	210
第 83 表	第 X 類土器観察表④	117	第 121 表	分析試料一覧及び遺物の性状	212
第 84 表	第 X 類土器観察表⑤	118	第 122 表	放射性炭素年代測定結果	213
第 85 表	第 X 類土器観察表⑥	119	第 123 表	安定同位体分析結果	215
第 86 表	第 X 類土器胴部観察表①	119	第 124 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)	222
第 87 表	第 X 類土器胴部観察表②	120	第 125 表	炭素・窒素安定同位体比及び含有量	222
第 88 表	第 X 類土器胴部観察表③	121	第 126 表	放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值, 暦年較正用 ^{14}C 年代, 較正年代)	223
第 89 表	第 X 類土器胴部観察表④	122	第 127 表	牧山遺跡検出圧痕一覧表	231
第 90 表	第 X 類土器胴部観察表⑤	123	第 128 表	土器分類ごとの出土点数	244
第 91 表	第 XI 類土器観察表	124	第 129 表	牧山遺跡石器組成表	250
第 92 表	第 XII 類土器観察表①	124	第 130 表	各都府県の石冠出土数	254
第 93 表	第 XII 類土器観察表②	125			
第 94 表	第 XII 類土器観察表③	126			
第 95 表	底部観察表①	126			

図版目次

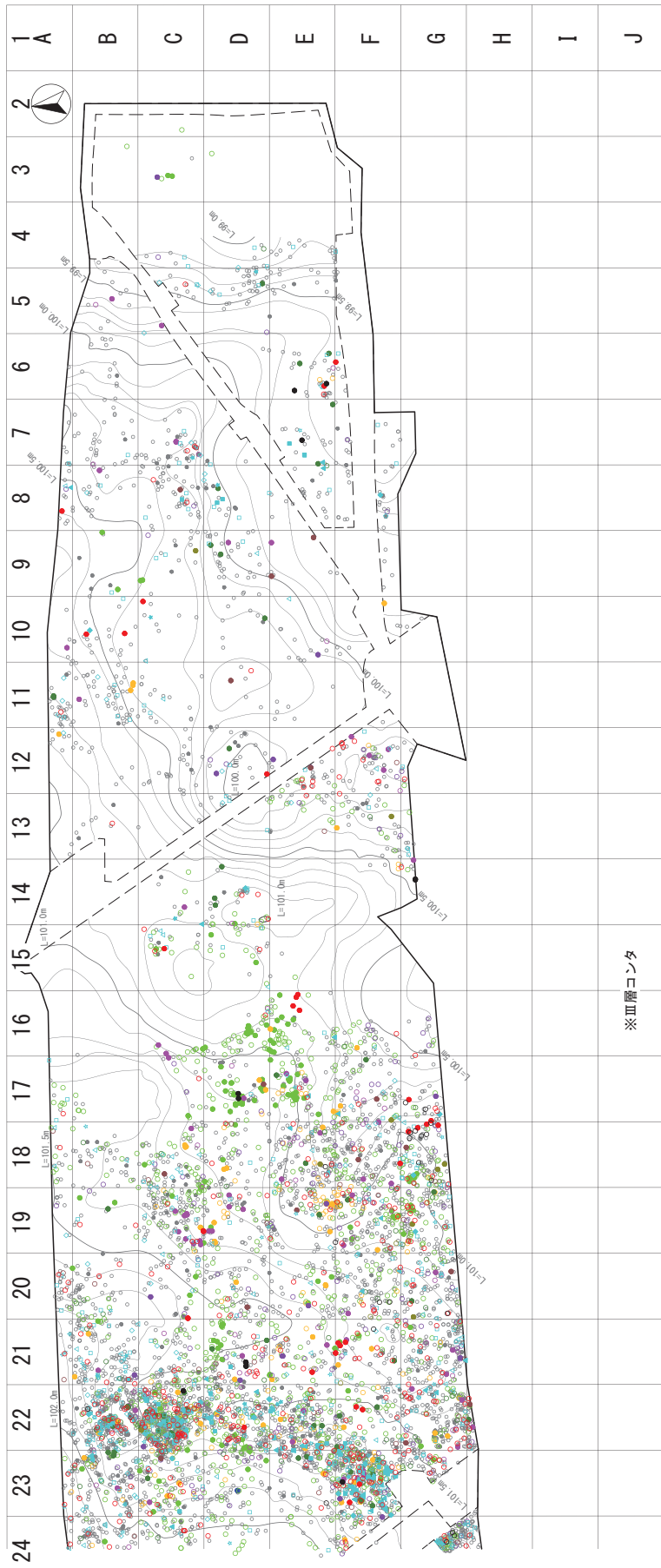
【本文中写真】

写真 9	土器付着炭化物の試料採取位置	207
写真 10	牧山遺跡の貯蔵穴から出土した炭化種実	209
写真 11	炭化材・炭化種実	219
写真 12	第XI類土器 1190 (赤色部分)	226
写真 13	第XI類土器 1190 (胎土部分)	226
写真 14	第VI類土器 626	227
写真 15	弥生土器 1718	227

【図版】

図版 1	牧山遺跡全景・発掘作業風景・土層断面	256
図版 2	遺物出土状況	257
図版 3	縄文時代前期埋設土器	258
図版 4	掘立柱建物跡 1	259
図版 5	掘立柱建物跡 2	260
図版 6	掘立柱建物跡 3	261
図版 7	貯蔵穴・土坑 1	262
図版 8	土坑 2	263
図版 9	土坑 3	264
図版 10	土坑 4	265
図版 11	土坑 5	266
図版 12	土坑 6	267
図版 13	石器集中部 1	268
図版 14	石器集中部 2	269
図版 15	石器集中部 3	270
図版 16	石器集中部 4	271
図版 17	埋設土器 1	272
図版 18	埋設土器 2	273
図版 19	埋設土器 3	274
図版 20	埋設土器 4・埋納遺構	275
図版 21	落とし穴 1	276
図版 22	落とし穴 2	277
図版 23	落とし穴 3	278
図版 24	落とし穴 4	279
図版 25	落とし穴 5	280
図版 26	落とし穴 6	281
図版 27	土器集中部 1	282
図版 28	土器集中部 2	283
図版 29	縄文時代後期包含層出土遺物・古道跡 1	284
図版 30	古道跡 2・溝状遺構	285
図版 31	縄文時代前期埋設土器 1号	286
図版 32	縄文時代後期の掘立柱建物跡・土坑出土遺物	287
図版 33	縄文時代後期の土坑出土遺物 1	288
図版 34	縄文時代後期の土坑出土遺物 2	289
図版 35	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 1	290
図版 36	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 2	291

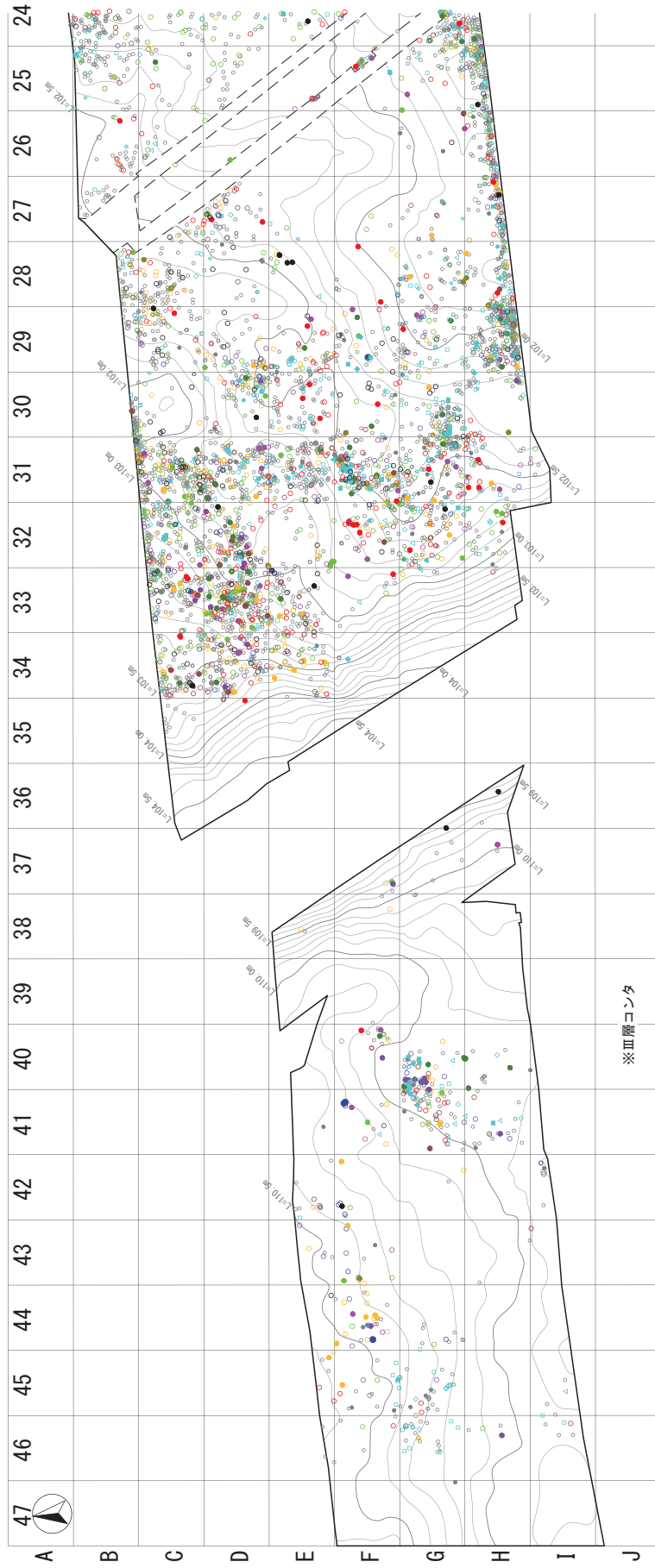
図版 37	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 3	292
図版 38	縄文時代後期の埋設土器出土遺物 1	293
図版 39	縄文時代後期の埋設土器出土遺物 2	294
図版 40	縄文時代後期の落とし穴出土遺物 1	295
図版 41	縄文時代後期の落とし穴出土遺物 2	296
図版 42	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 1	297
図版 43	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 2	298
図版 44	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 3	299
図版 45	縄文時代後期の石器集中部出土遺物 4	300
図版 46	縄文時代後期のピット・埋納遺構出土遺物	301
図版 47	縄文時代前期・中期の土器	302
図版 48	縄文時代後期の土器 1	303
図版 49	縄文時代後期の土器 2	304
図版 50	縄文時代後期の土器 3	305
図版 51	縄文時代後期の土器 4	306
図版 52	縄文時代後期の土器 5	307
図版 53	縄文時代後期の土器 6	308
図版 54	縄文時代後期の土器 7	309
図版 55	縄文時代後期の土器 8	310
図版 56	縄文時代後期の土器 9	311
図版 57	縄文時代後期の土器 10	312
図版 58	縄文時代後期の土器 11	313
図版 59	縄文時代後期の土器 12	314
図版 60	縄文時代後期の土器 13	315
図版 61	縄文時代後期の土器 14	316
図版 62	縄文時代後期の土器 15	317
図版 63	縄文時代後期の土器 16	318
図版 64	縄文時代後期の土器 17・土製品	319
図版 65	弥生時代の土器 1	320
図版 66	弥生時代の土器 2	321
図版 67	弥生時代の土器 3・古墳時代の土器 1	322
図版 68	古墳時代の土器 2・中世～近世の陶磁器・ 金属製品	323
図版 69	出土石器 1	324
図版 70	出土石器 2	325
図版 71	出土石器 3	326
図版 72	出土石器 4	327
図版 73	出土石器 5	328
図版 74	出土石器 6	329
図版 75	出土石器 7	330
図版 76	出土石器 8	331
図版 77	出土石器 9	332
図版 78	出土石器 10	333
図版 79	出土石器 11	334
図版 80	石冠	335



- 凡例
- III類土器
 - IV類土器
 - V類土器
 - VI類土器
 - VII類土器
 - VIII類土器
 - IX類土器
 - X-a類土器
 - ★ X-b類土器
 - X-c類土器
 - ◆ X-d類土器
 - XI類土器
 - XII類土器
 - XIII類土器
 - 第VI～X類不明土器
 - 非編載遺物は白抜き

※血腐コンタ

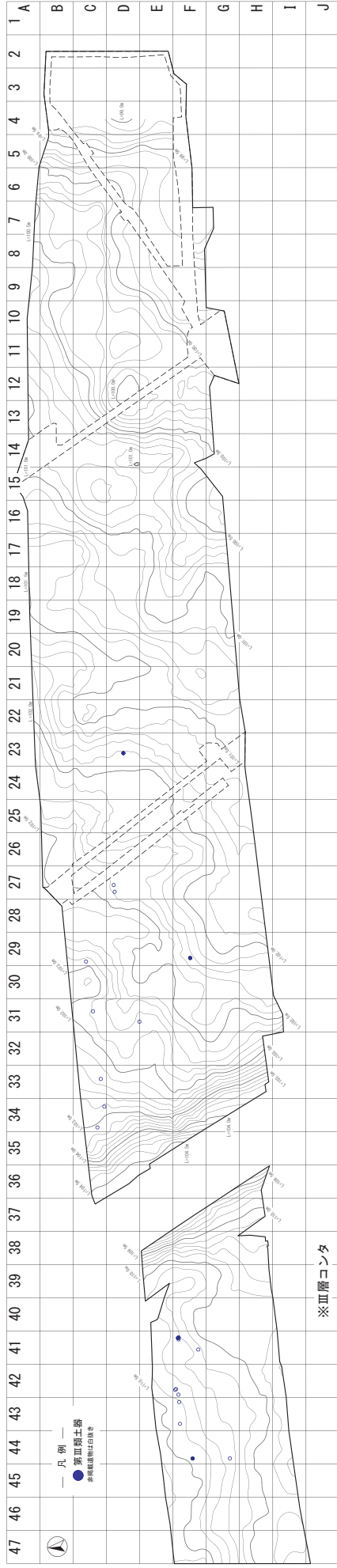
第241図 縄文時代後期～晩期 全土器分布図(1)



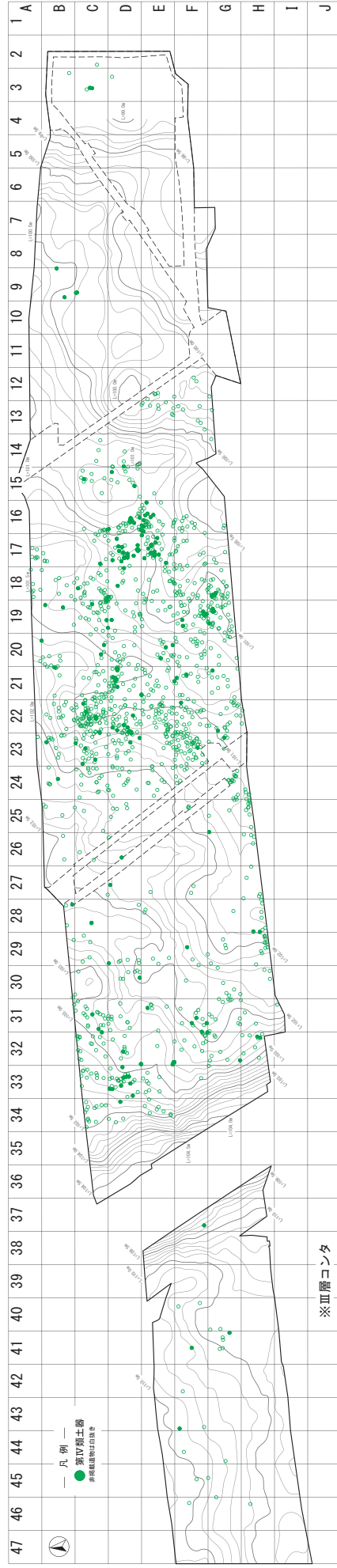
- 凡例
- Ⅲ類土器
 - Ⅳ類土器
 - Ⅴ類土器
 - Ⅵ類土器
 - Ⅶ類土器
 - Ⅷ類土器
 - Ⅸ類土器
 - X-a類土器
 - ★ X-b類土器
 - X-c類土器
 - ◆ X-d類土器
 - XⅠ類土器
 - XⅡ類土器
 - XⅢ類土器
 - 第Ⅵ～Ⅹ類不明土器
 - 非掲載遺物は白抜き

第242図 縄文時代後期～晩期 全土器分布図(2)

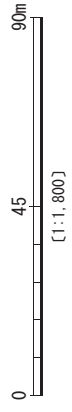
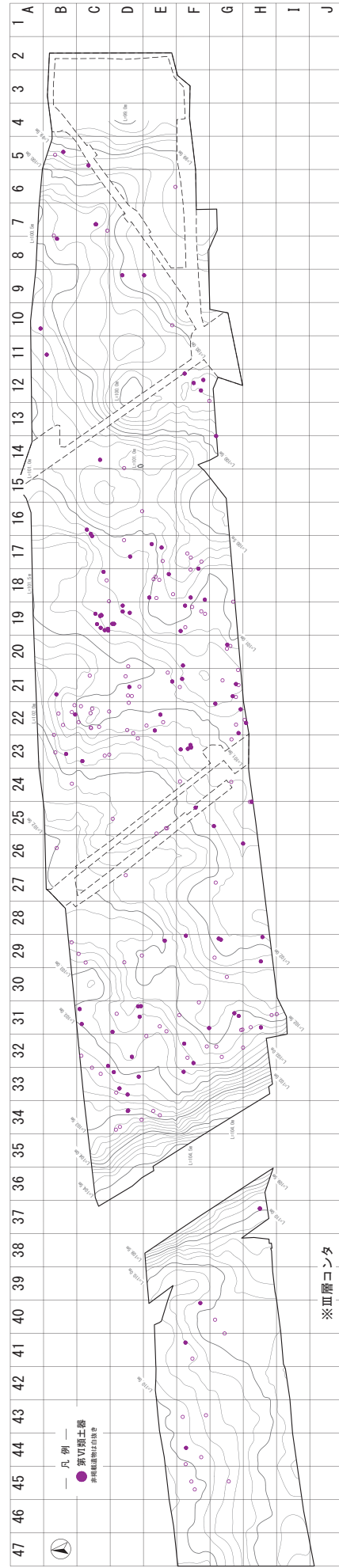
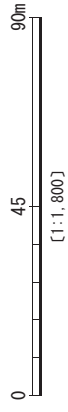
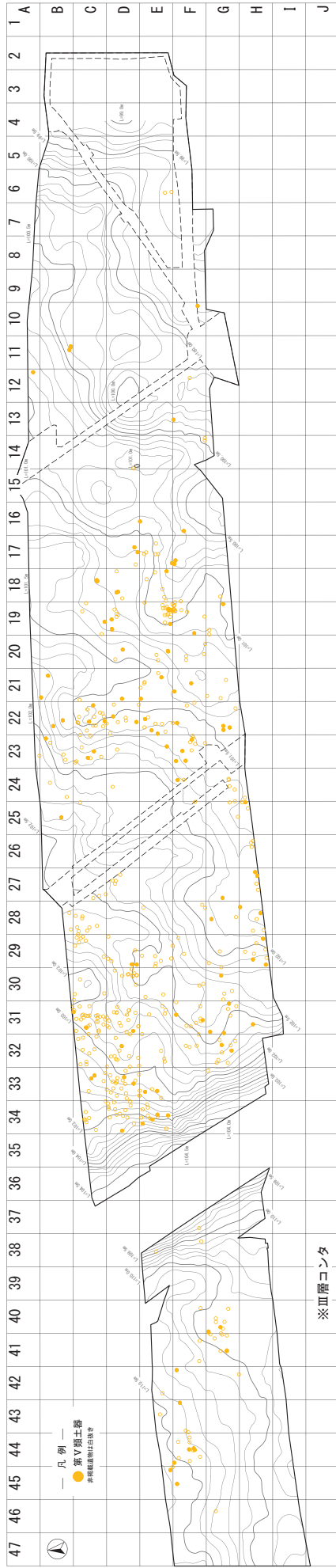
第Ⅲ類土器



第Ⅳ類土器

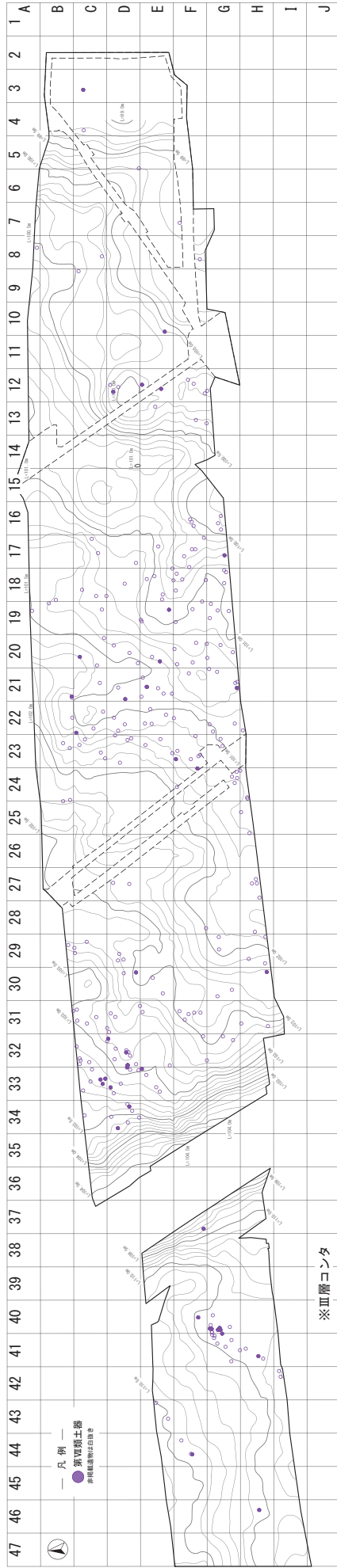


第243図 第Ⅲ類・第Ⅳ類土器出土状況図

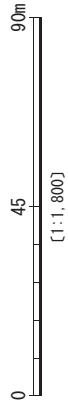
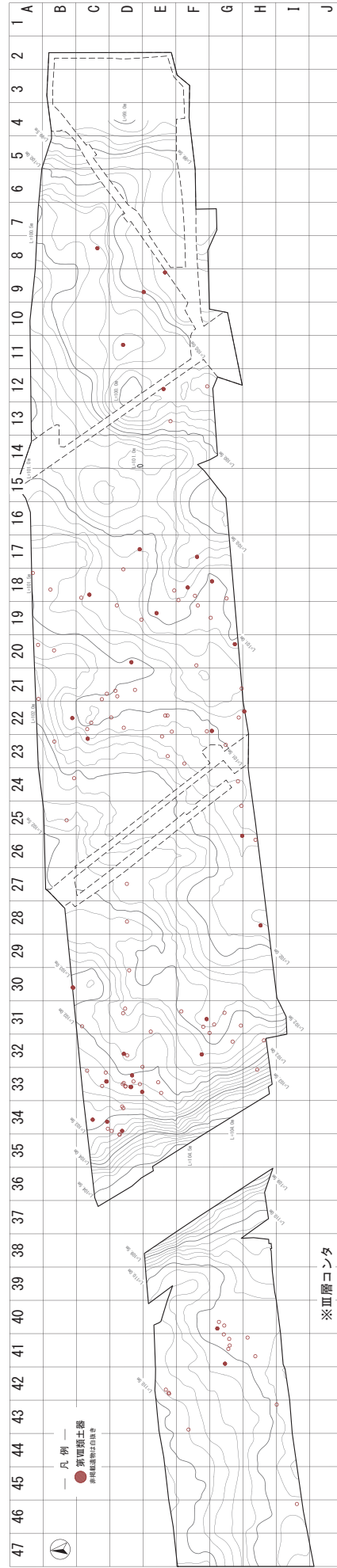


第244図 第V類・第VI類土器出土状況図

第四類土器

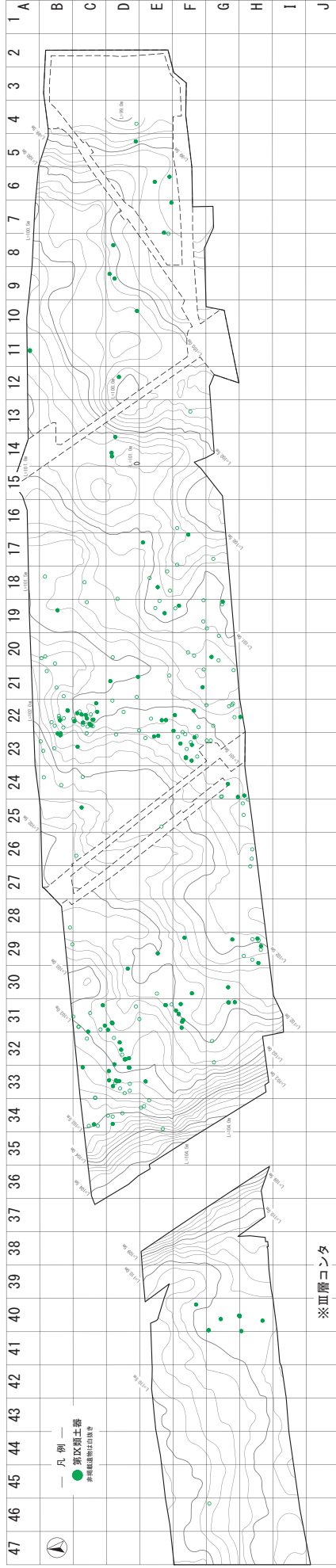


第四類土器

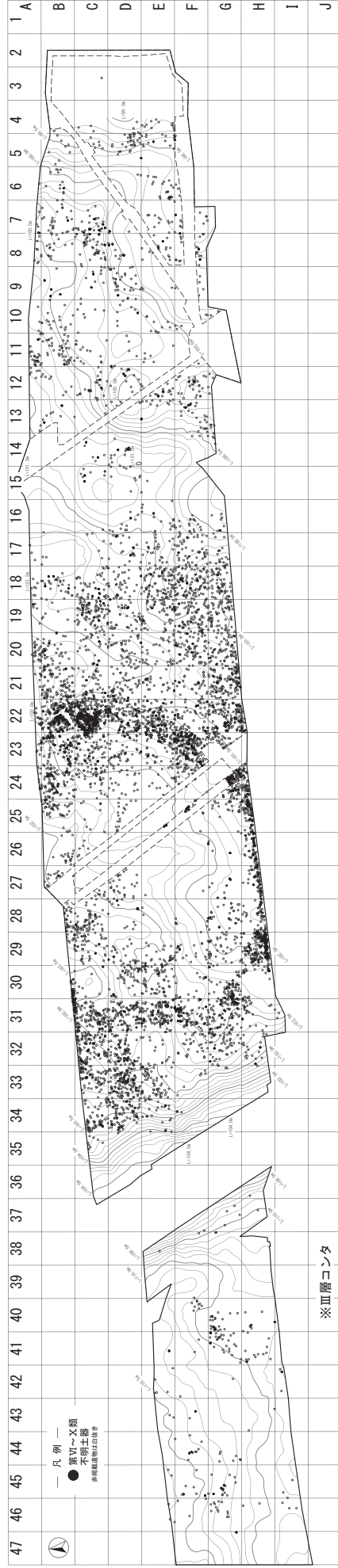


第245図 第七類・第八類土器出土状況図

第Ⅳ類土器

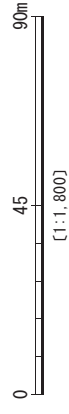
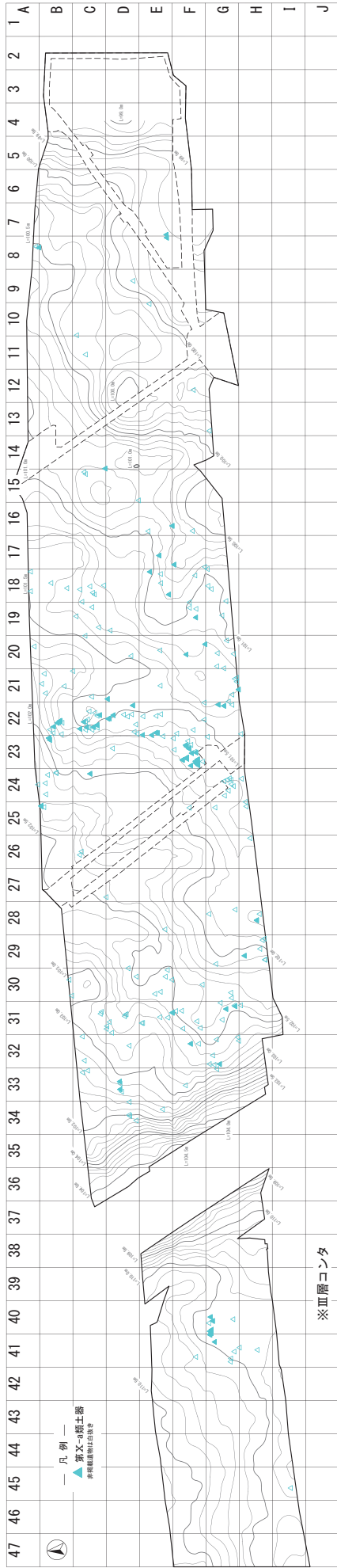


第Ⅵ～Ⅹ類不明土器

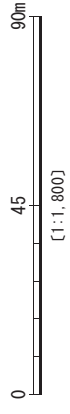
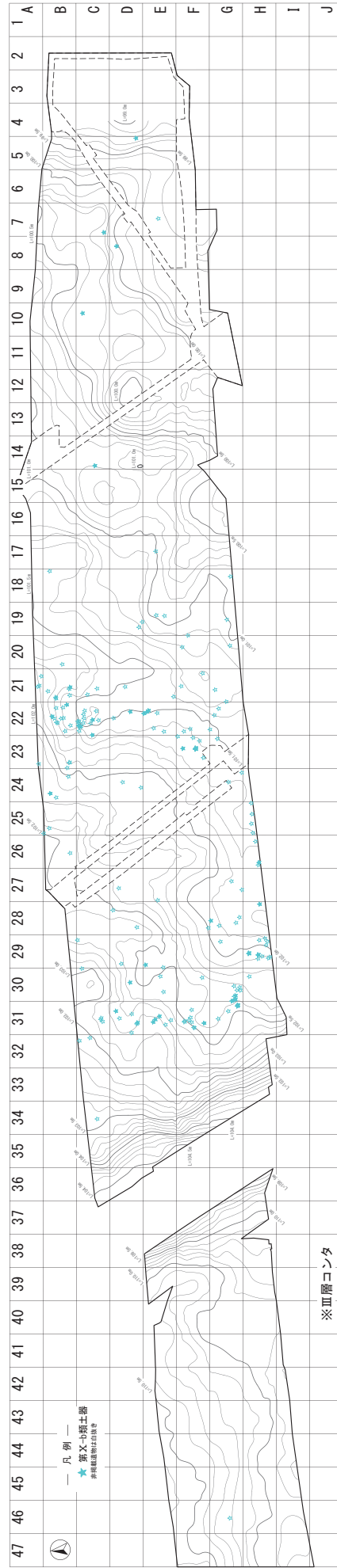


第246図 第Ⅳ類・第Ⅵ～Ⅹ類不明土器出土状況図

第X-a類土器

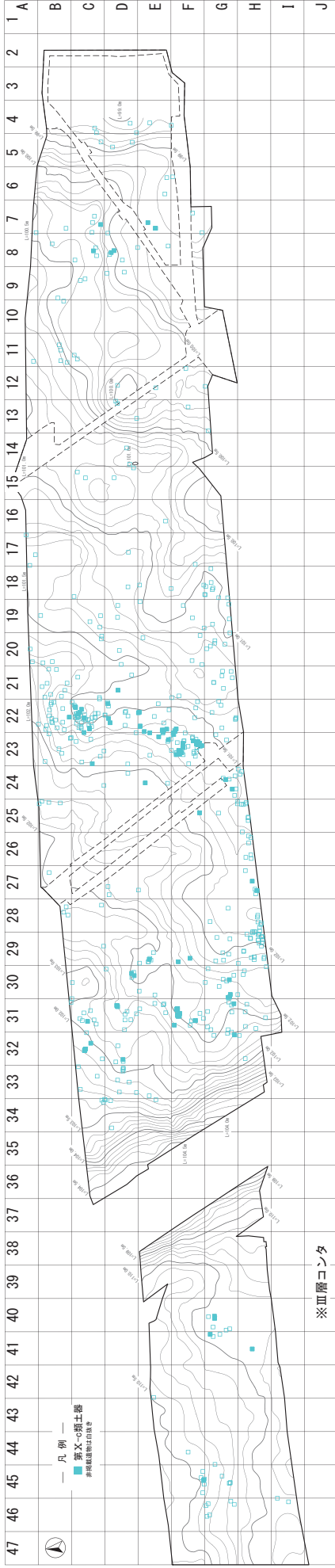


第X-b類土器

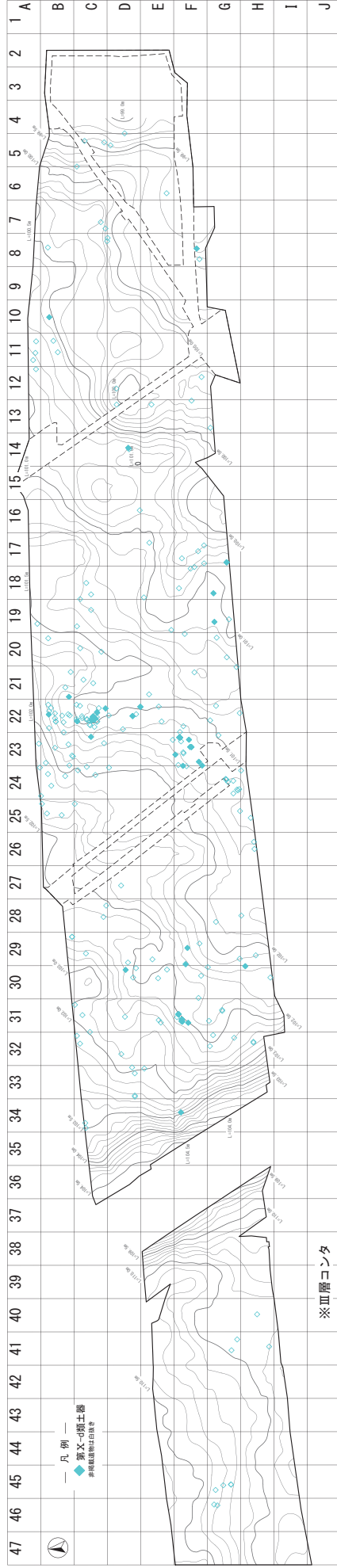


第247図 第X-a類・第X-b類土器出土状況図

第X-c類土器

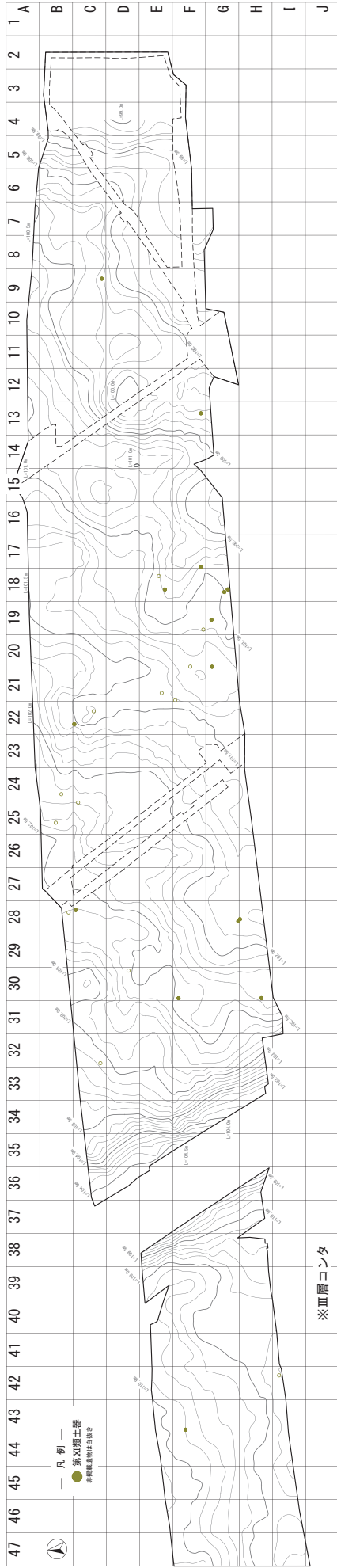


第X-d類土器

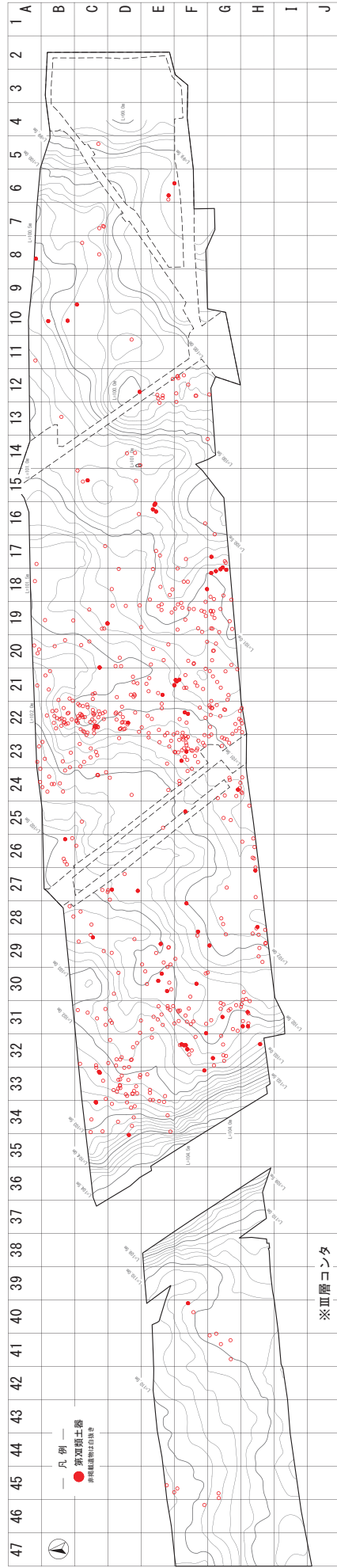


第248図 第X-c類・第X-d類土器出土状況図

第Ⅱ類土器

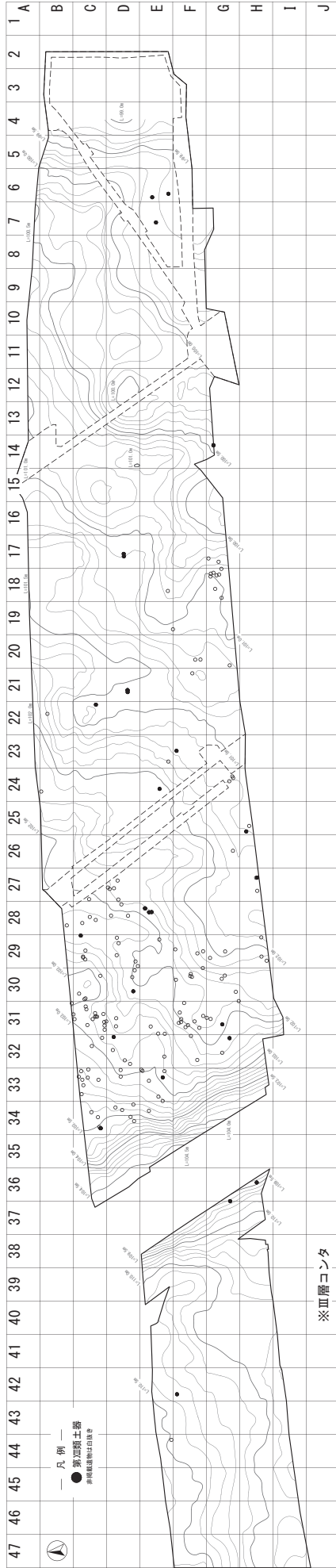


第Ⅲ類土器

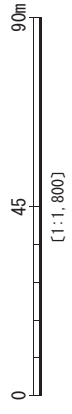
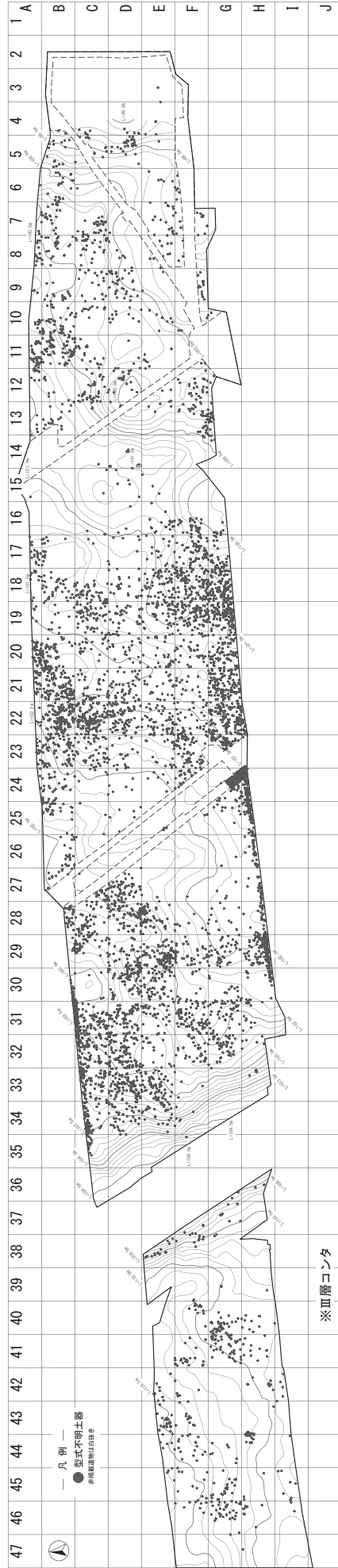


第249図 第Ⅱ類・第Ⅲ類土器出土状況図

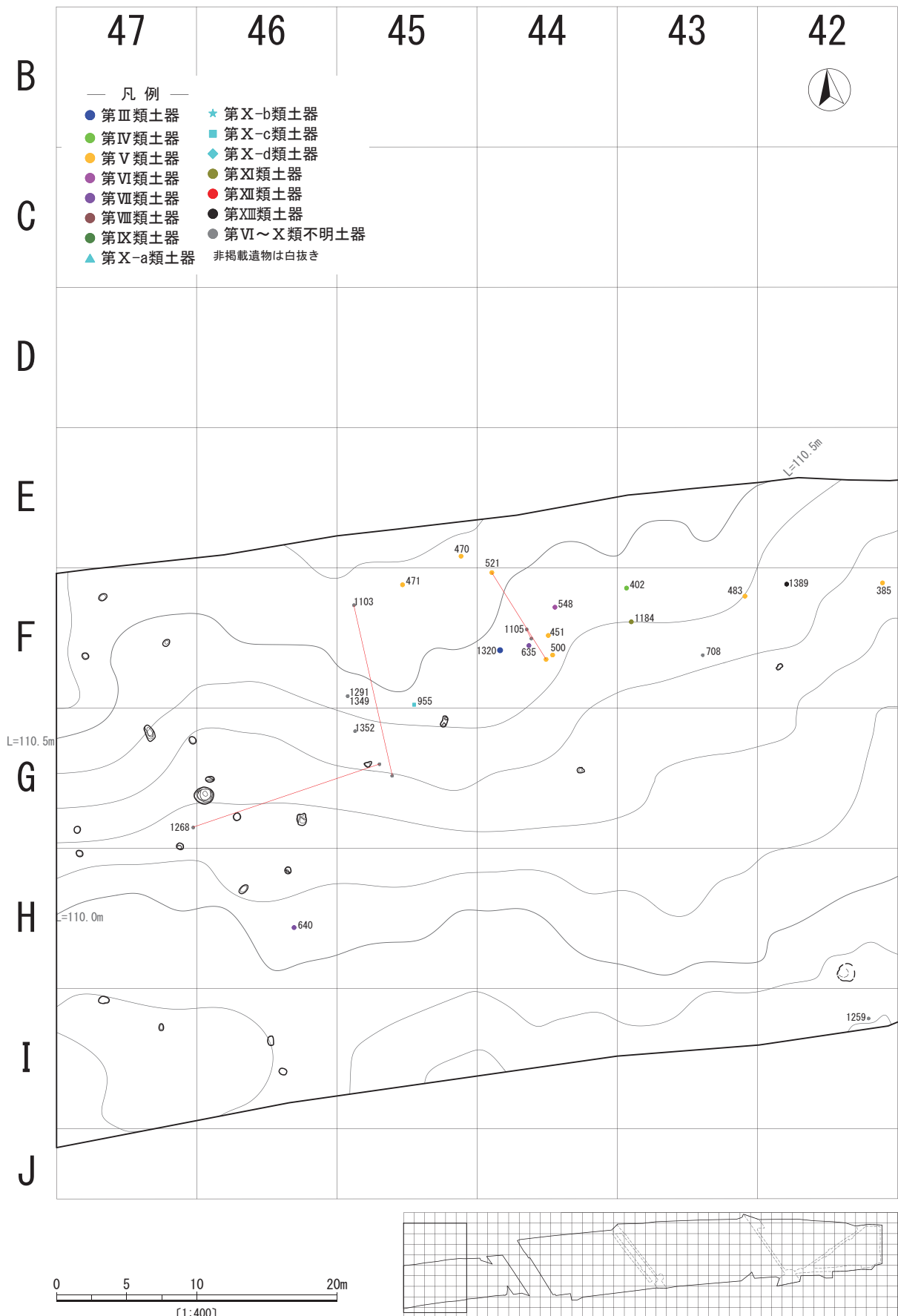
第Ⅳ類土器

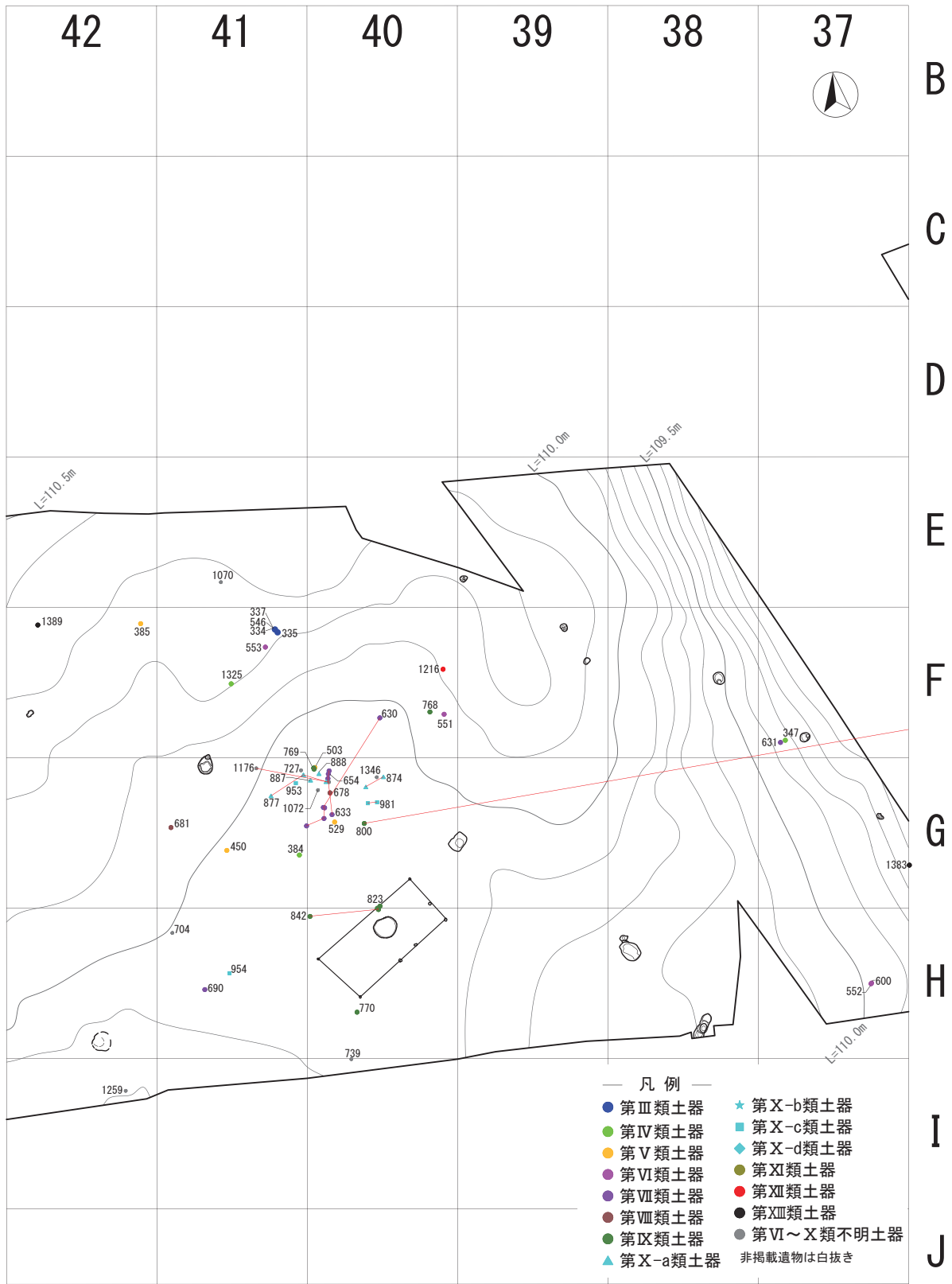


型式不明土器

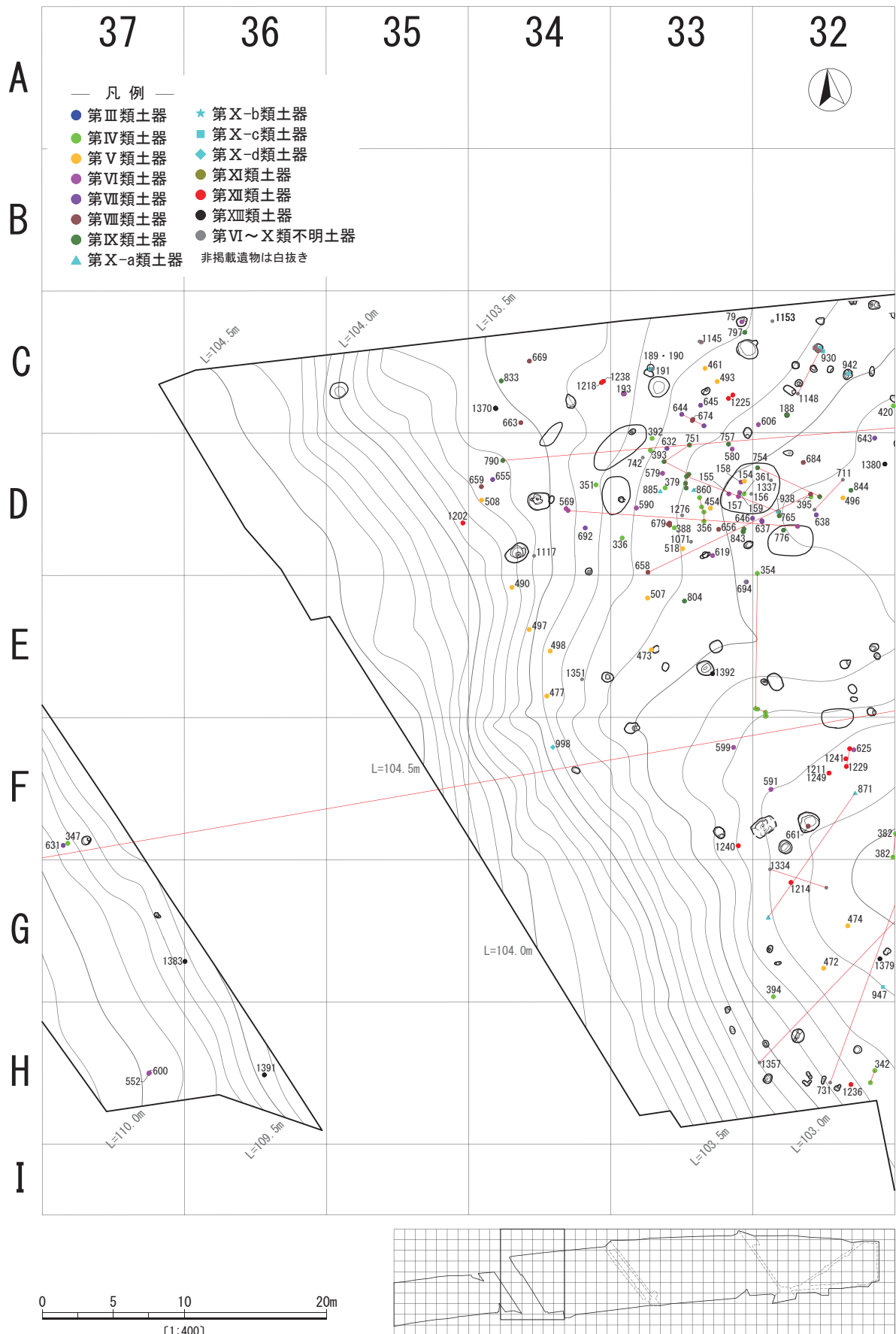


第250図 第Ⅳ類・型式不明土器出土状況図

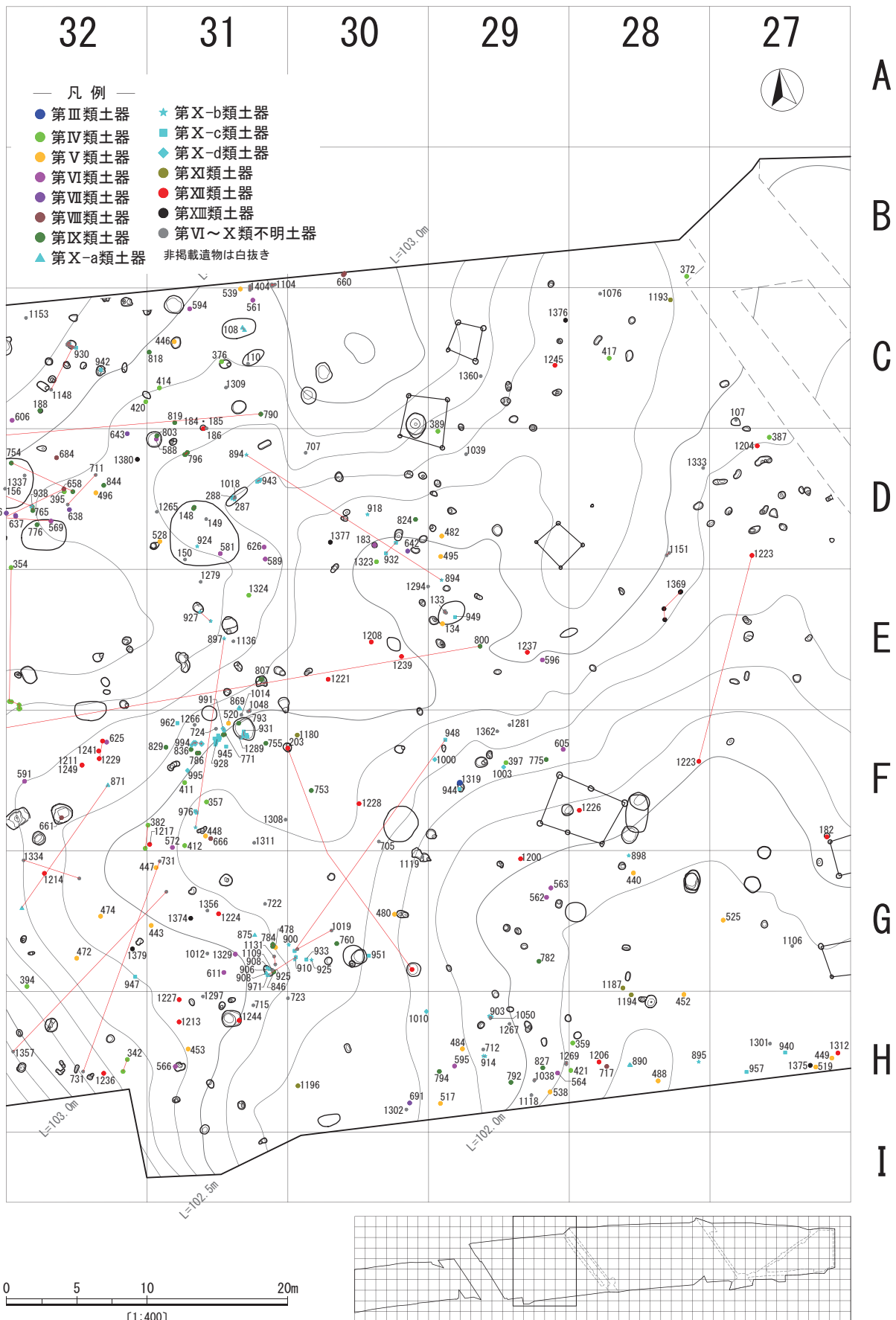


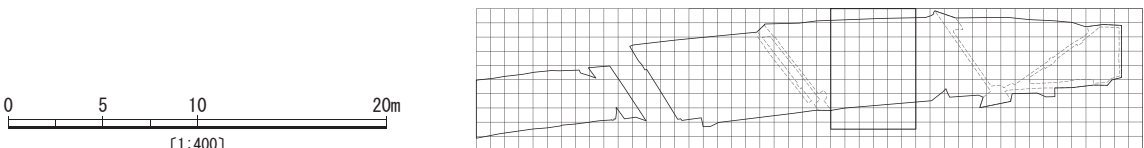
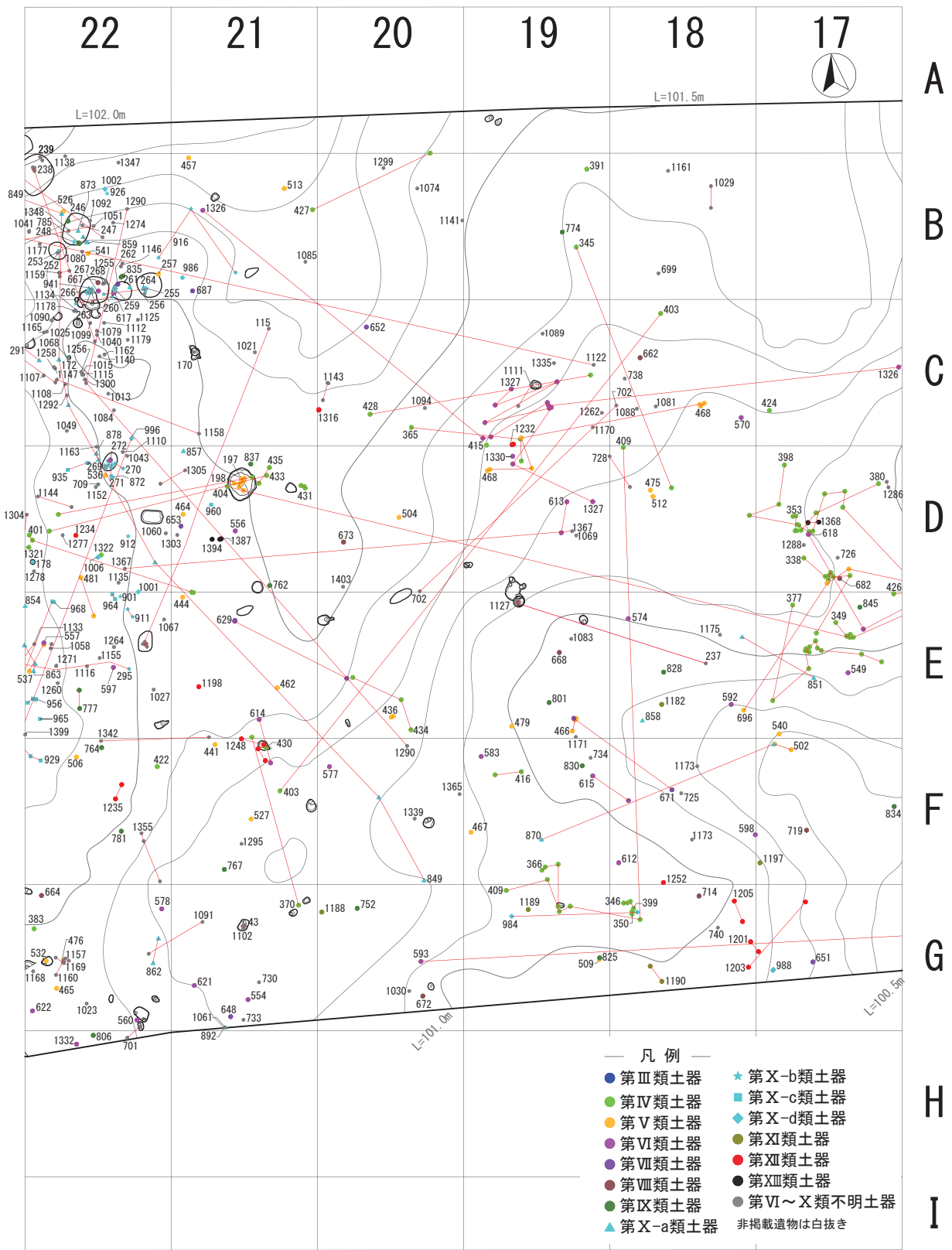


第 252 図 縄文時代後期～晩期 土器接合図 (2)

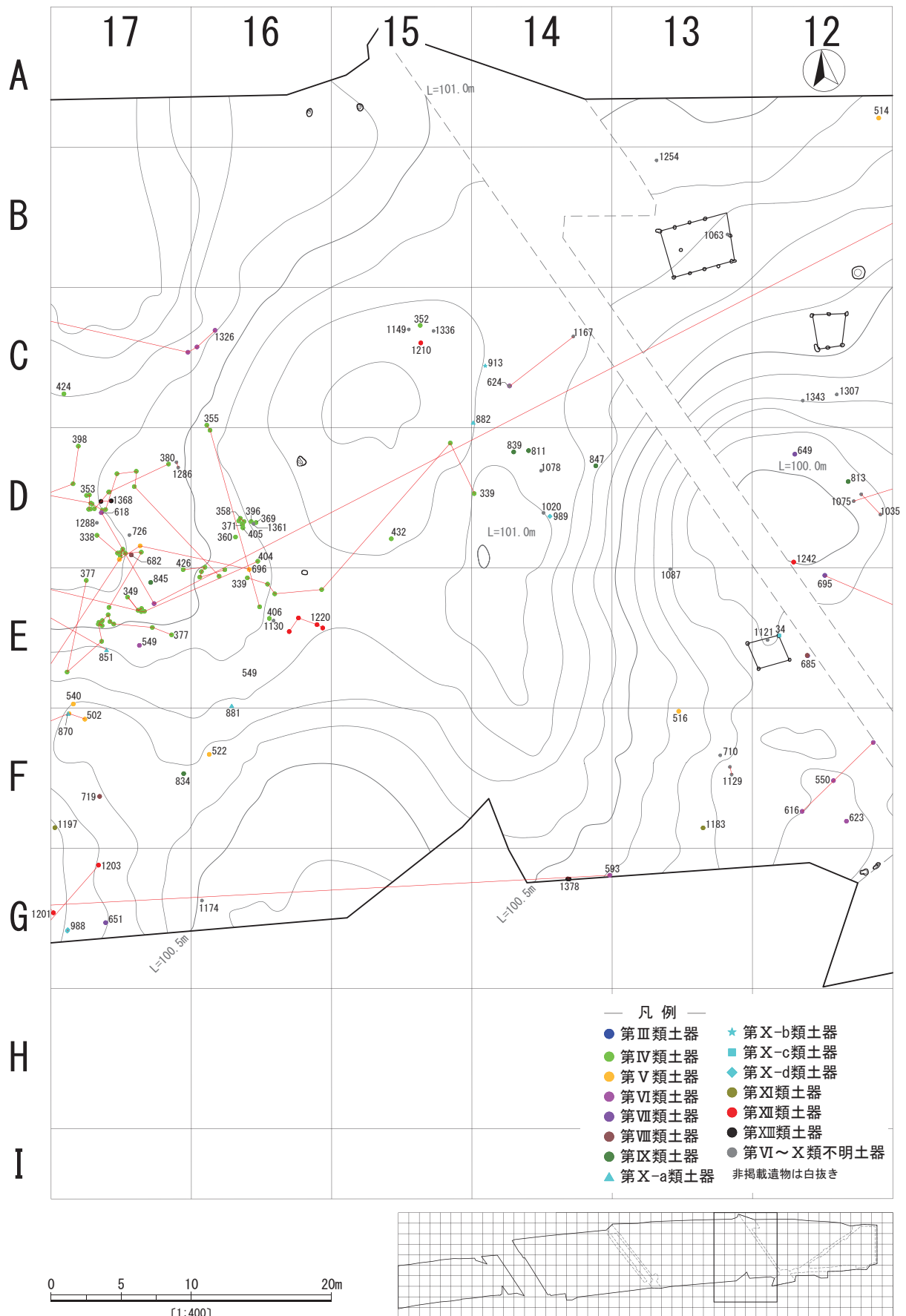


第253図 縄文時代後期～晩期 土器接合図(3)

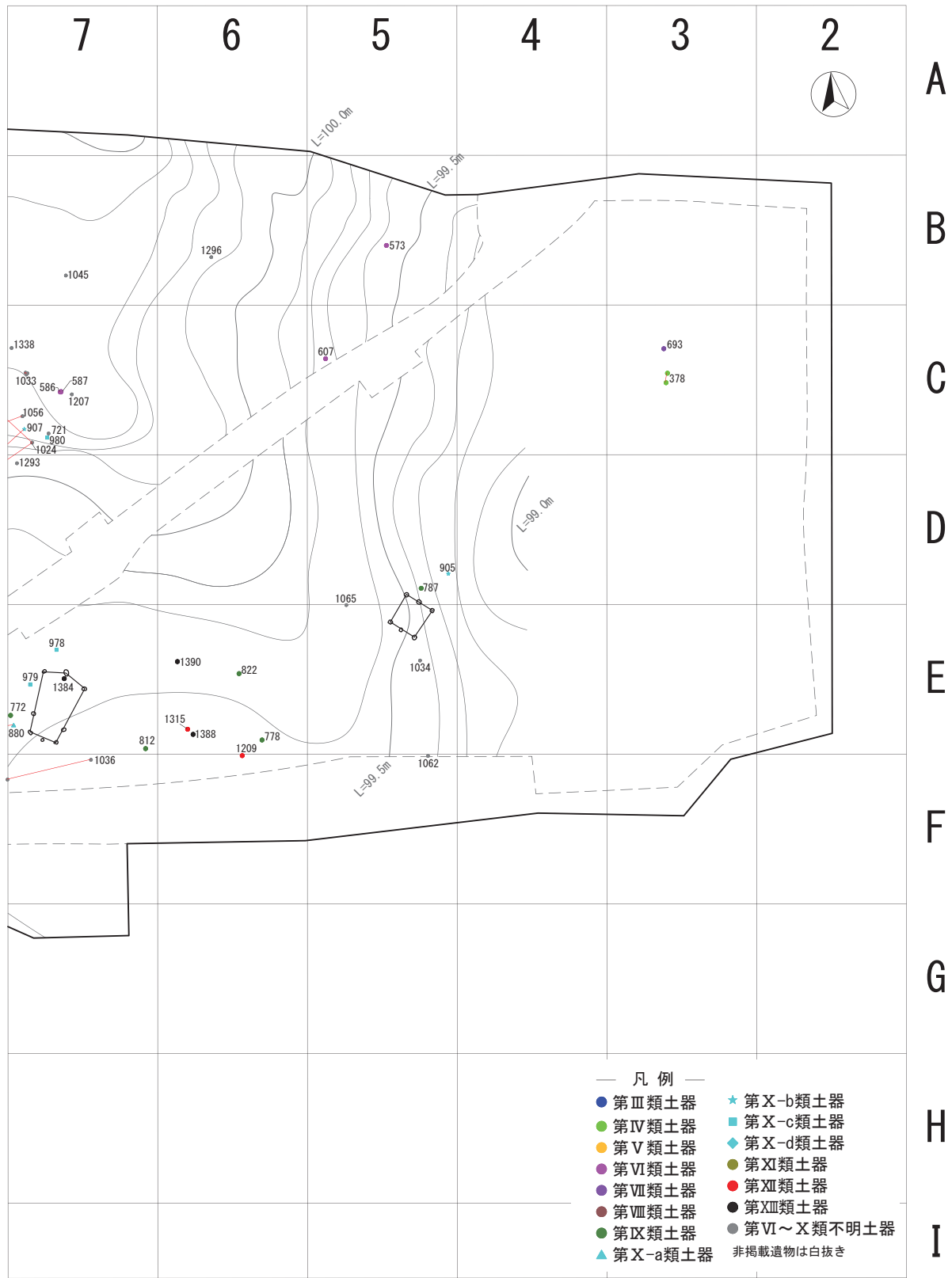




第256図 縄文時代後期～晩期 土器接合図(6)



第 257 図 縄文時代後期～晩期 土器接合図 (7)



第 259 図 縄文時代後期～晩期 土器接合図 (9)

3 遺物

(1) 包含層出土土器

ア 概要

Ⅱ a 層からⅡ c 層の包含層出土の土器については、第 8 図から第 13 図の土器分類に従って記述する。土器の取上点数は第 128 表に整理した。総取上点数が 19,730 点、掲載点数は 1,405 点である。

イ 包含層出土土器の状況

第Ⅲ類土器（第 260 図 334～337）

口縁部が立ち上がり幅広の文様帯を作るもので、ヘラによる連続刺突や幅広の凹線や貝殻腹縁による刺突で文様を構成する。

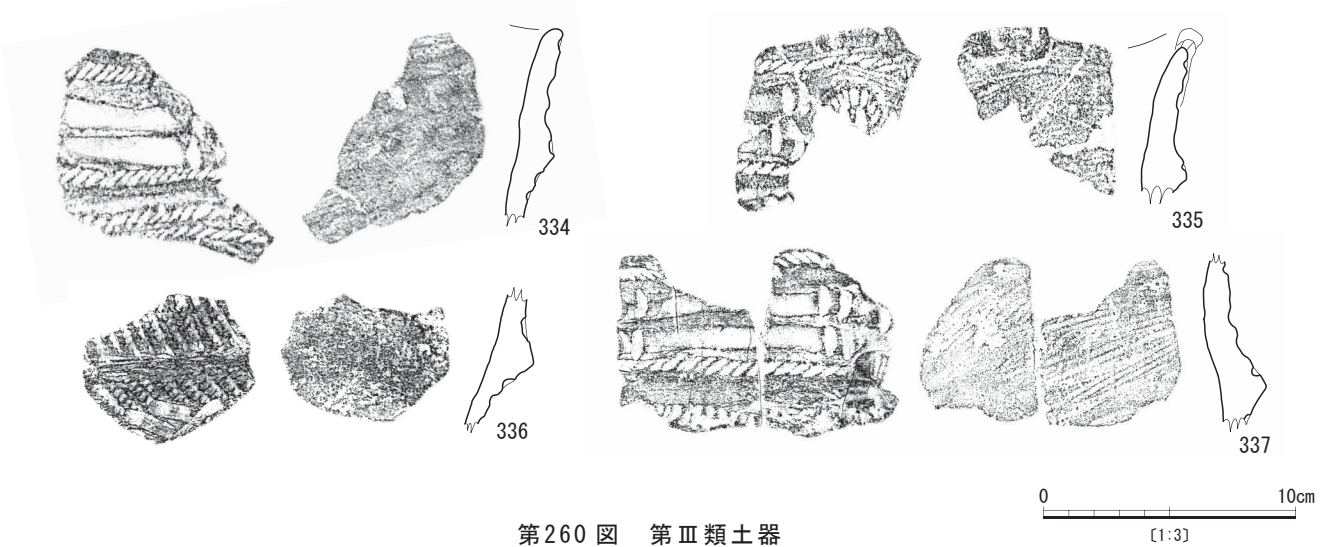
334 は、口縁部で、ヘラによる連続刺突や幅広の凹線で施文される。口縁部施文帯の下位にも文様が広がる。335 も同様であるが、凹線が浅く、円形のヘラによる連続刺突文がうかがわれる。336 は、稜部を挟んで貝殻腹縁による連続刺突文が施され、下位に凹線がうかがわれる。337 は口縁の端部が欠損しているが、ヘラによる連続刺突や幅広の凹線で施文され、334 と同一個体の可能性がある。

第Ⅳ類土器（第 261～268 図 338～435）

外反する口縁部に、頸部がゆるやかにしまり、胴部がやや膨らみながら平底の底部に至る器形である。口縁部が前型式からの肥厚をもって、三角形の稜部の上下に主に貝殻腹縁の連続刺突を施すものを a 類とし、肥厚がみられなくなり外反する口縁部の外側に文様を施すものを b 類、口縁部が内湾するようになり、文様に短沈線をつなげて横沈線となる沈線が加わるものを c 類とする。いずれも内外面の貝殻条痕の調整が残されるが、c 類は外面がナデ消されるようになる。339～355 が a 類、356～373 は b 類、338・374～397 が c 類である。また、411～425 の口縁下の部分は、文様構成から c 類の可能性が高い。

第Ⅳ類土器は、胎土に雲母を多く含んでいることも特徴である。

338 は口縁部が内湾しながら外に開く器形で、口縁部は肥厚しない。貝殻腹縁による刺突を二段に施す。a 類と c 類の比較のために前の方にレイアウトした。339 は口縁部が屈曲して、外側に稜をなして、その上下に貝殻刺突と沈線と刺突文を施す。340 は、口縁下に貝殻腹縁による刺突を一段回し、その下に短沈線で文様を施し、さらに下位に貝殻腹縁による刺突を一段回す。341 も同

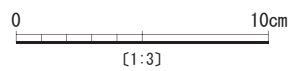
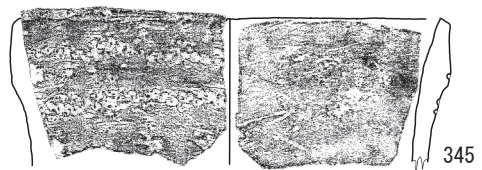
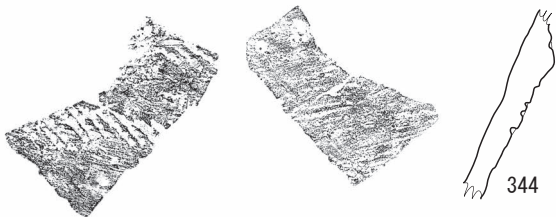
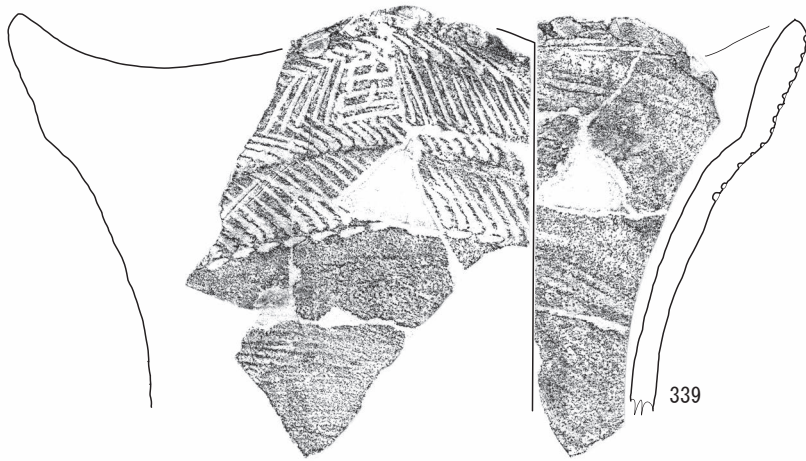
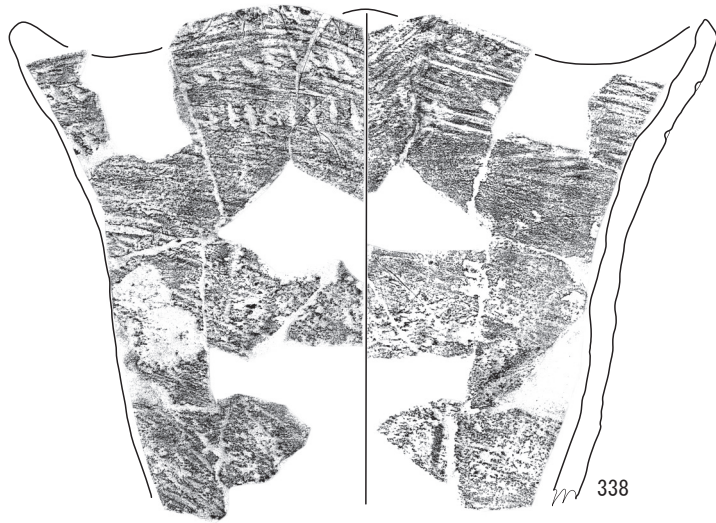


第 260 図 第Ⅲ類土器

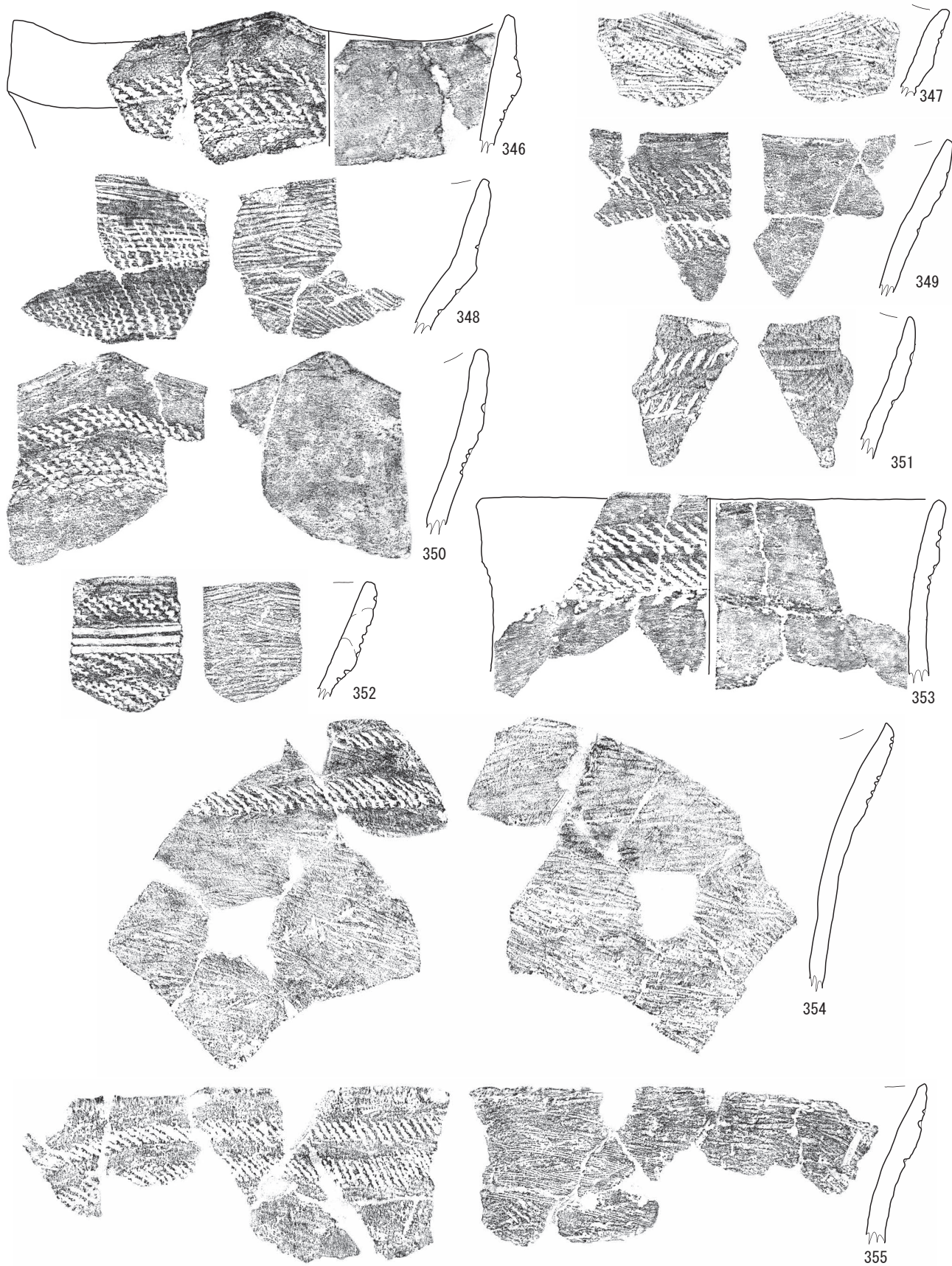
第 58 表 第Ⅲ類土器観察表

備考欄：計測値の単位は cm, () 内は復元値

挿図番号	掲載番号	器種	区	層位	部位	主文様・調整		胎土						色調				備考	取上番号	
						外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	白色砂粒	黒色砂粒	他	外面	内面				
260	334	深鉢	F41	Ⅱ b	口縁～類	連続刺突文・凹線・横ナデ	横ナデ	○	△	△				砂礫△	5YR6/4	にぶい橙	5YR5/4	にぶい赤褐		640
	335	深鉢	F41	Ⅱ b	口縁～類	連続刺突文・凹点・凹線・突起・横ナデ	横ナデ	○		△		△	△		5YR6/4	にぶい橙	5YR5/4	にぶい赤褐		641
	336	深鉢	D33	Ⅱ c	類	貝殻腹縁文・凹線	横ナデ	◎	△		◎	○			2.5Y3/2	黒褐	7.5YR5/4	にぶい褐		7367
	337	深鉢	F41	Ⅱ b	口縁～類	刺突微隆突帯・連続刺突文・凹点・凹線・横ナデ	貝殻条痕・横ナデ	○	△	△			△		5YR7/6	橙	7.5YR7/4	にぶい橙		640

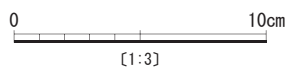
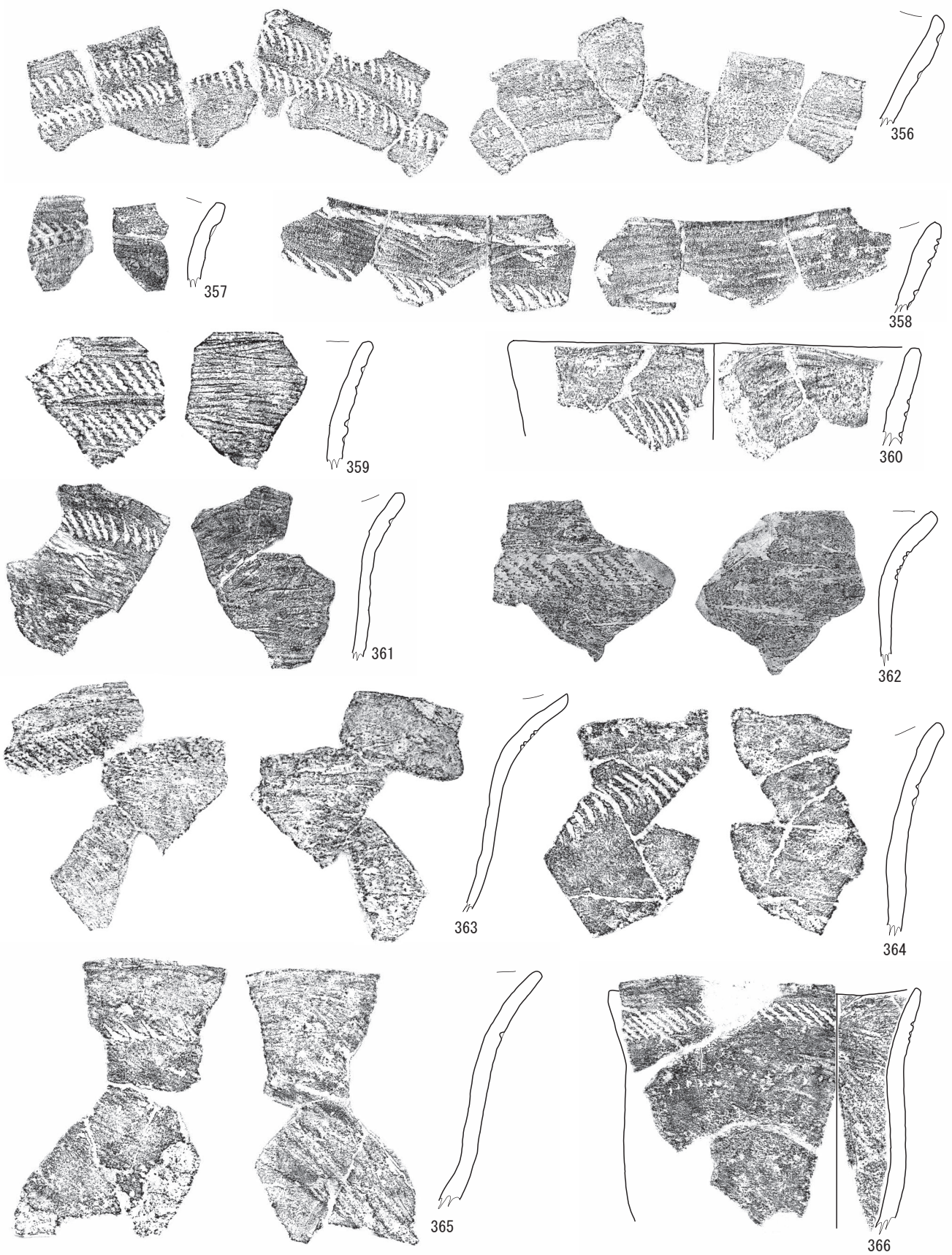


第261图 第四类土器(1)

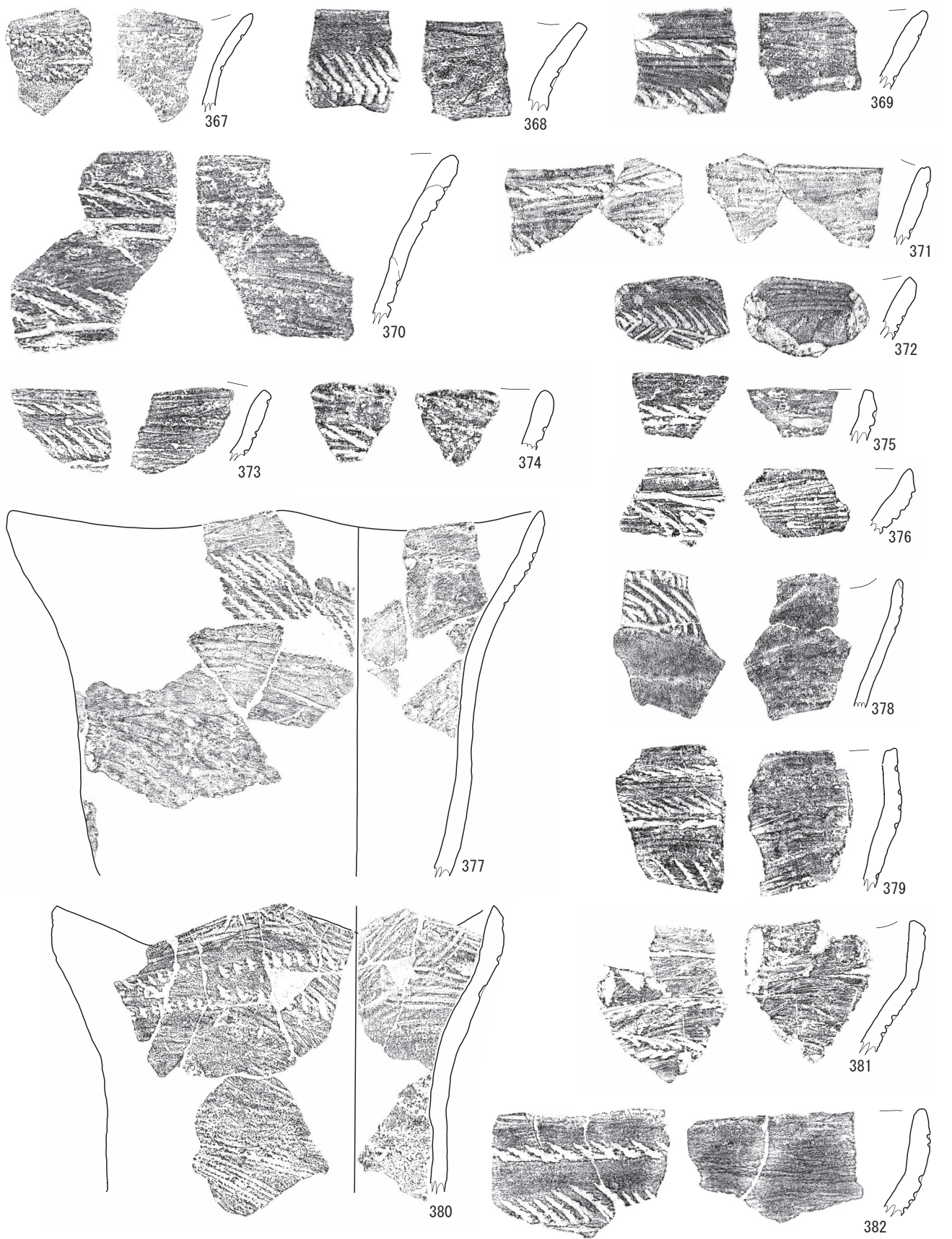


第262图 第IV类土器(2)

0 10cm
[1:3]

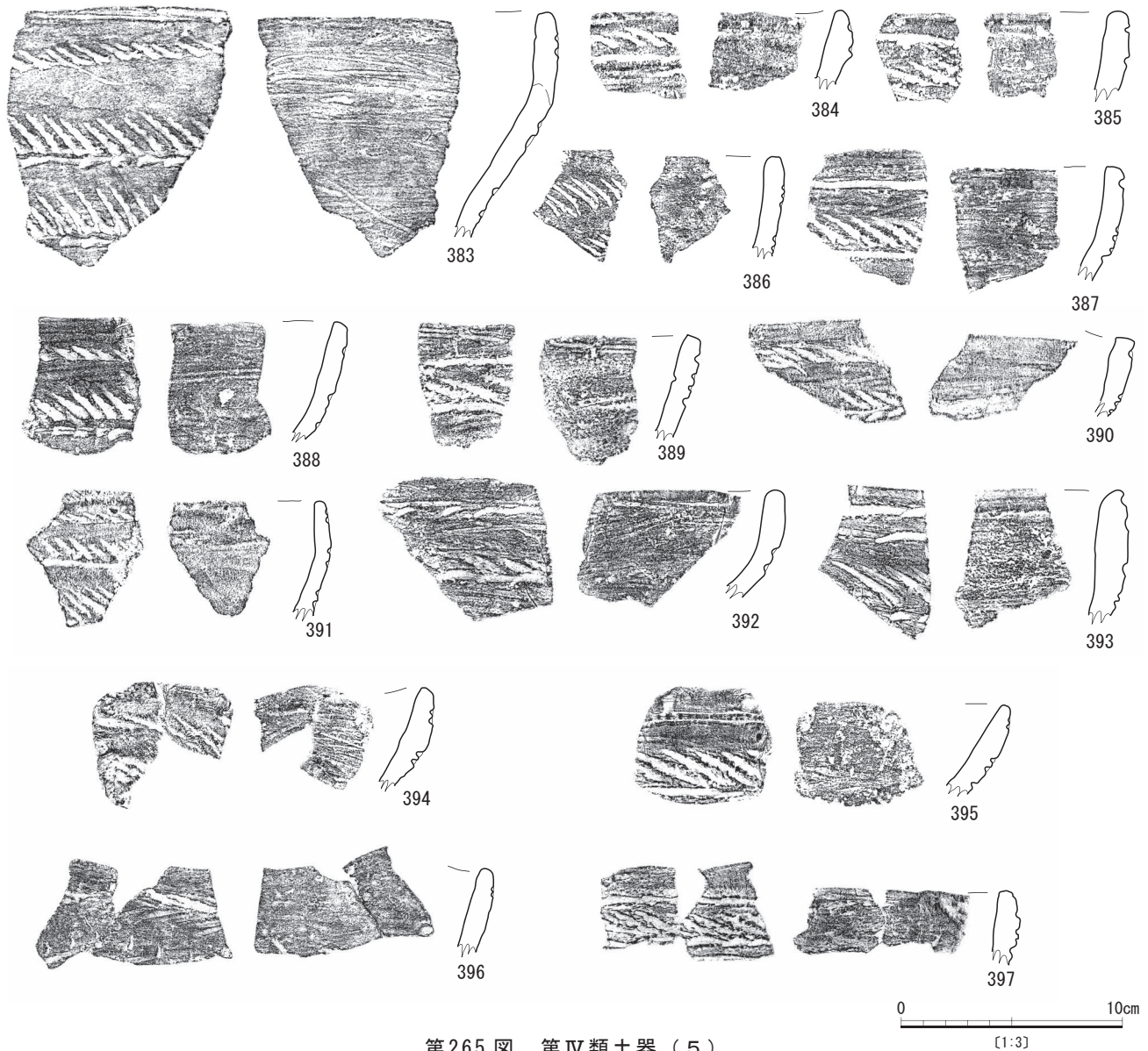


第263图 第四类土器(3)



第264图 第IV类土器(4)

0 10cm
[1:3]

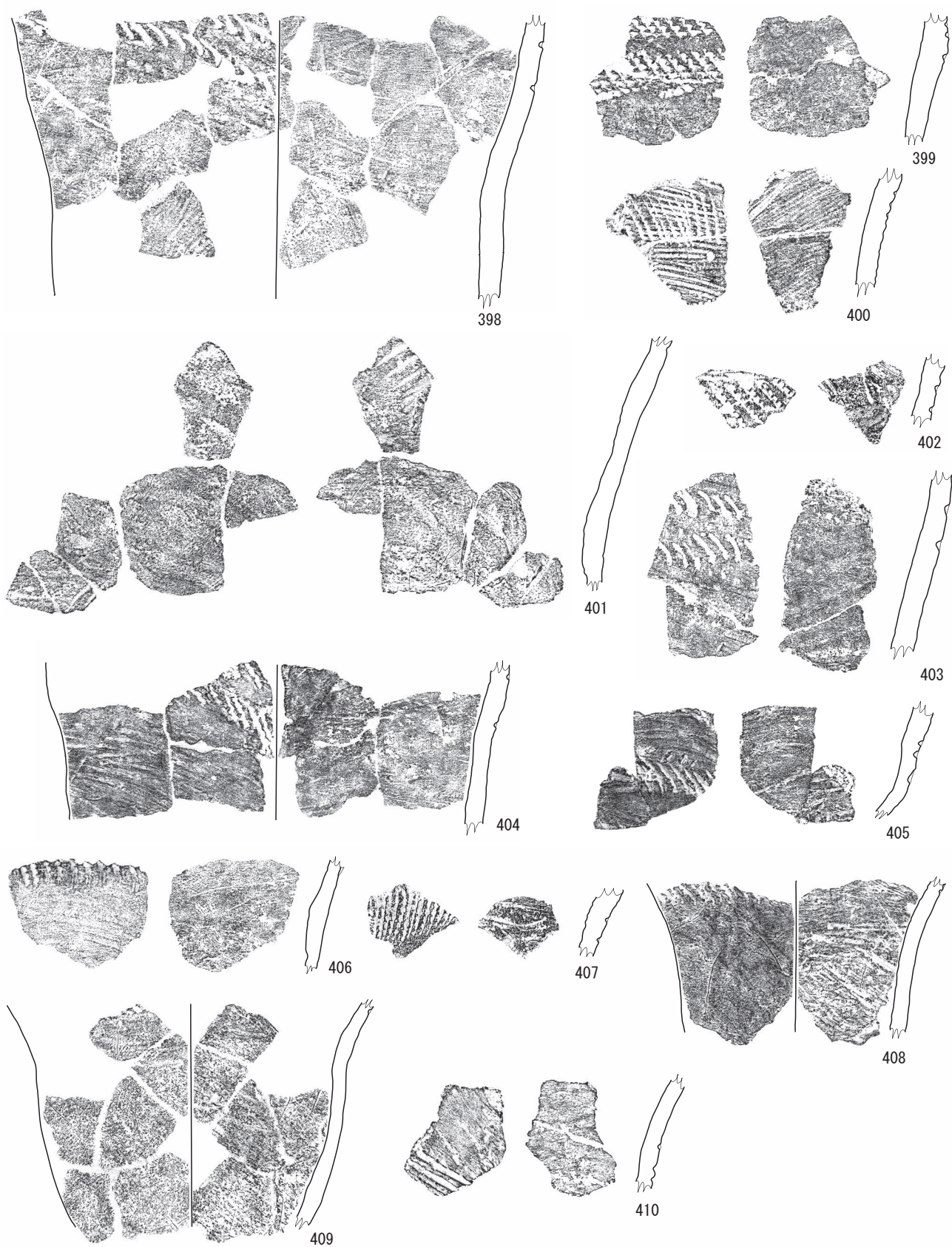


第265図 第IV類土器（5）

様の施文を行うものと考えられる。342～355は、屈曲ないし肥厚で生じた外面の稜を挟んで、貝殻腹縁による刺突文などを配するものである。平口縁と波状口縁の2種類があり、それによる型式差は無いと考えられる。345は貝殻腹縁の一部分を用いて刺突を2段に、無作為に行っている。352は沈線が3条上書きされる。356～372は、ほとんど口縁部の肥厚がみられないで外反するものである。貝殻腹縁による刺突文が主であるが、358・369・371のように、刺突を横方向として、下位の刺突文と差別化したものもみられる。359は内面に貝殻条痕が明瞭に入り、胎土に金雲母を多く含む。363、365は口縁部の外反が強く、屈曲部上部に貝殻腹縁による刺突を施す。370の様に、短沈線が施されるものもある。372も刺突文の下位に沈線が施されている。

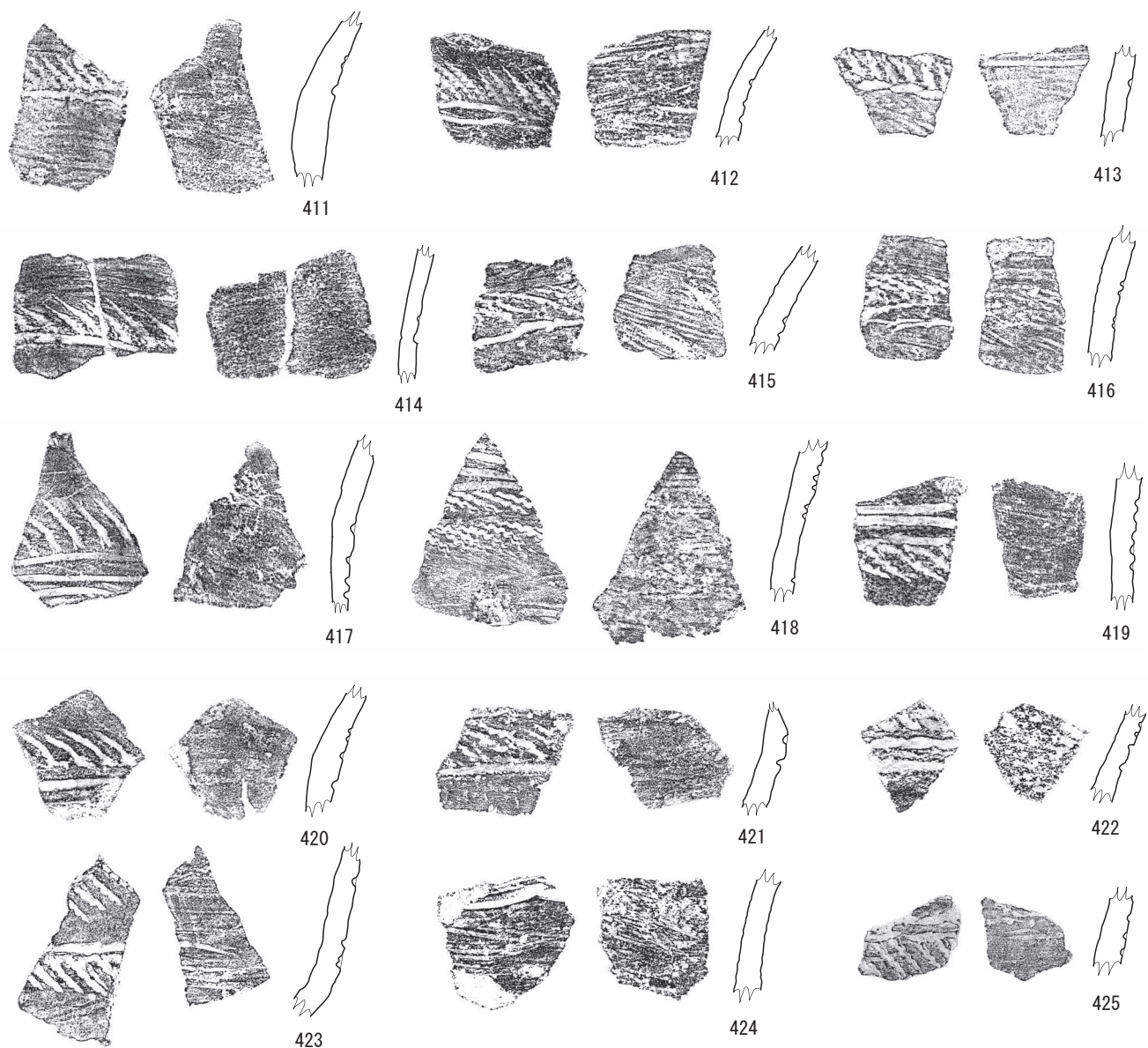
375～397は内湾する口縁部が外に開くもので、新たに短沈線が文様の要素として加えられる。381は頸部の屈曲が明瞭で、屈曲部上部は条痕文をナゲ消した後沈線を施し、一方下部の施文は明瞭に条痕文と刺突文を施す。395は胎土に滑石を少量含み、2条の沈線を薄く施す。

398～435は胴部の破片である。412～425は、貝殻腹縁による刺突文と短沈線・沈線で施文され、c類のものである。398は胎土に滑石を少量含み、410は金雲母を多く含む。412は沈線が2条薄く、416・418は明瞭に沈線が3条施されている。429は器壁が薄く、内外とも明瞭に貝殻条痕を施す。431・435は底部付近で、435の内面は粗く貝殻条痕を施し、外面は貝殻条痕を施文後、ナゲ消されている。



0 10cm
[1:3]

第266图 第IV类土器(6)



第267図 第IV類土器（7）

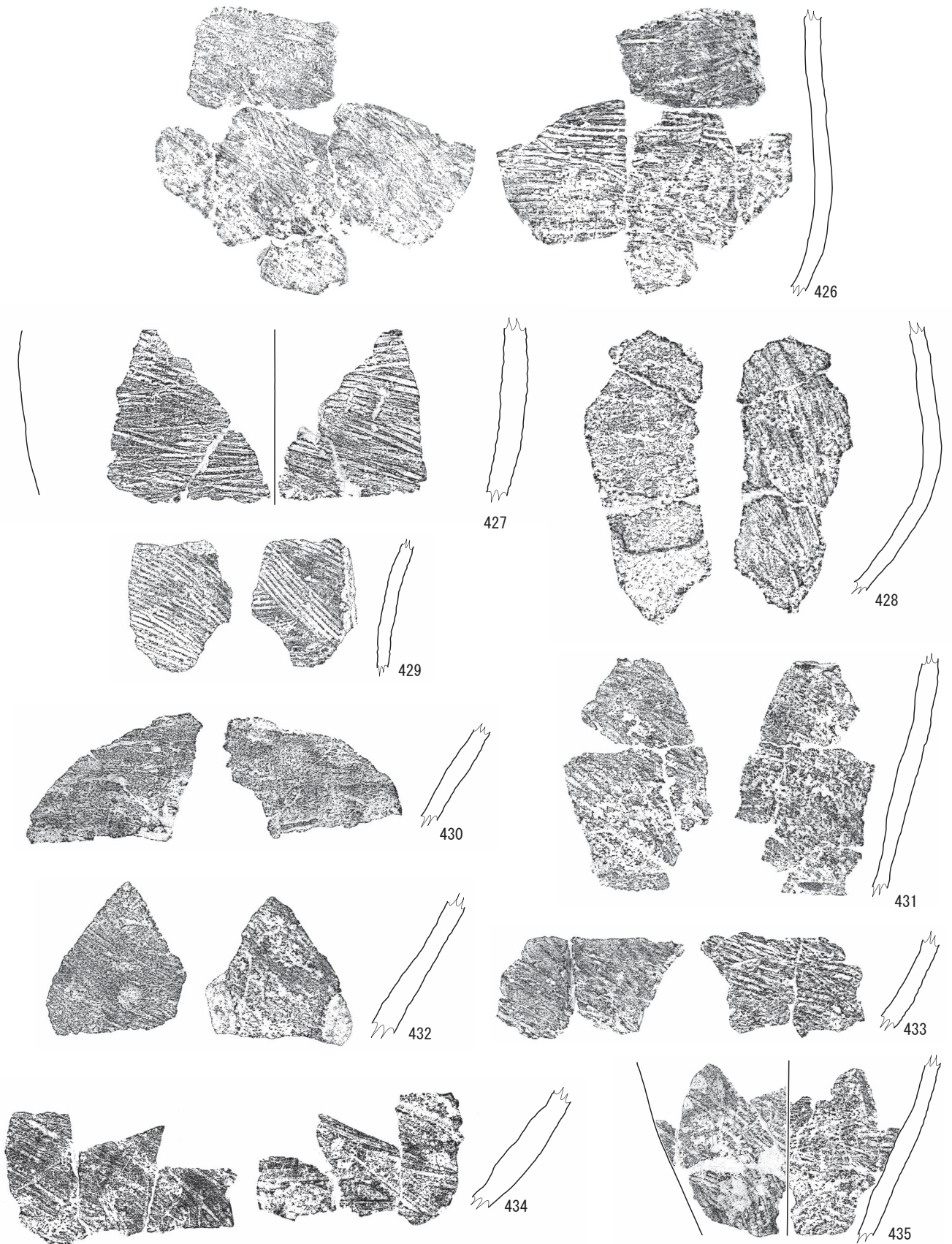
第V類土器（第269～274図436～546）

外反する口縁部がやや内湾して立ち上がり、口縁部と胴部に文様帯が形成される。内外面が貝殻条痕で調整され、文様は貝殻腹縁による刺突と短沈線や沈線がセットで施文されることが多い。これをa類とする。口縁部が肥厚して直立するようになり、短沈線や沈線による平行線文等が主流となるものをb類とする。文様が第VI類の影響下で三角文や曲線文を多用して、外反する頸部の屈曲が強くなるものをc類とする。

436～451がa類で、452～467がb類で、468～480がc類となる。466にみられるように、b類には胴部に平行な沈線を施すものがセットとなり、c類には524～

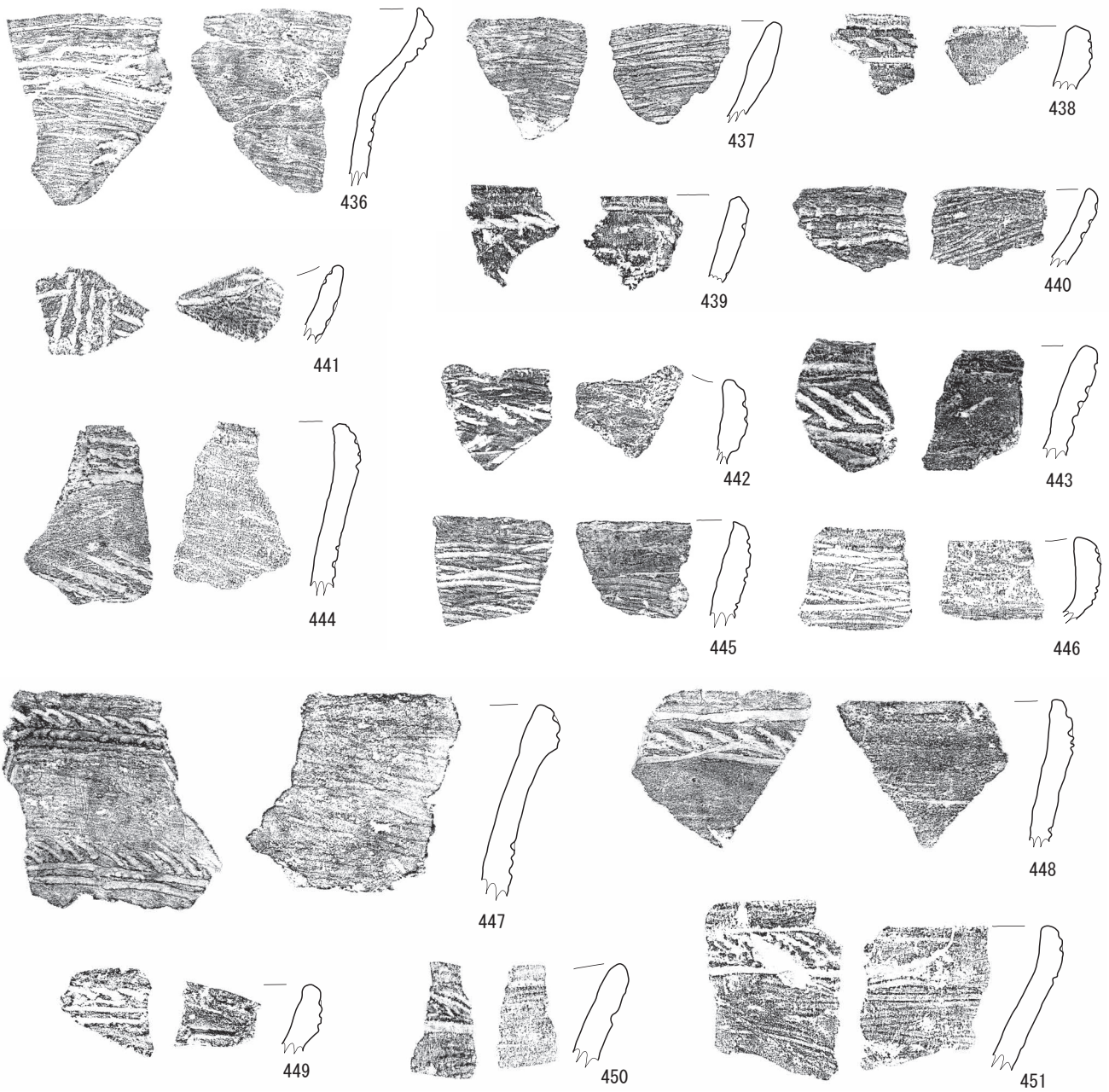
529・532～539などの第VI類土器の胴部文様でみられる曲線文や頸部に刺突文が回る胴部がセットとなるものと考えられる。

436～445の第V-a類は第IV-c類からの型式変化でたどれるものである。斜め方向の貝殻腹縁の刺突文と、それが沈線として文様を形成するものがあり、それを上下で沈線に挟むモチーフが口縁で主になされる。444・447のように、文様が口縁部と胴部の2か所に分かれて施されるものもある。441・442は波状口縁である。446・451の口縁部は内湾している。447の口縁部は肥厚し、肥厚した口縁部に短沈線状の文様を2段に施す。胎土に金雲母を多く含む。452は胎土に滑石を含み、口縁部に



0 10cm
[1:3]

第268図 第IV類土器(8)



第269図 第V類土器(1)

平行沈線を施す。465の口縁部は内湾し、波状口縁を呈す。口縁部の文様帯も広く、沈線2条と短沈線2条の計4条が施され、器壁は薄い。内面は貝殻条痕が施された後、ナデ消されている。466・467の口縁部は肥厚し、沈線を2条施す。

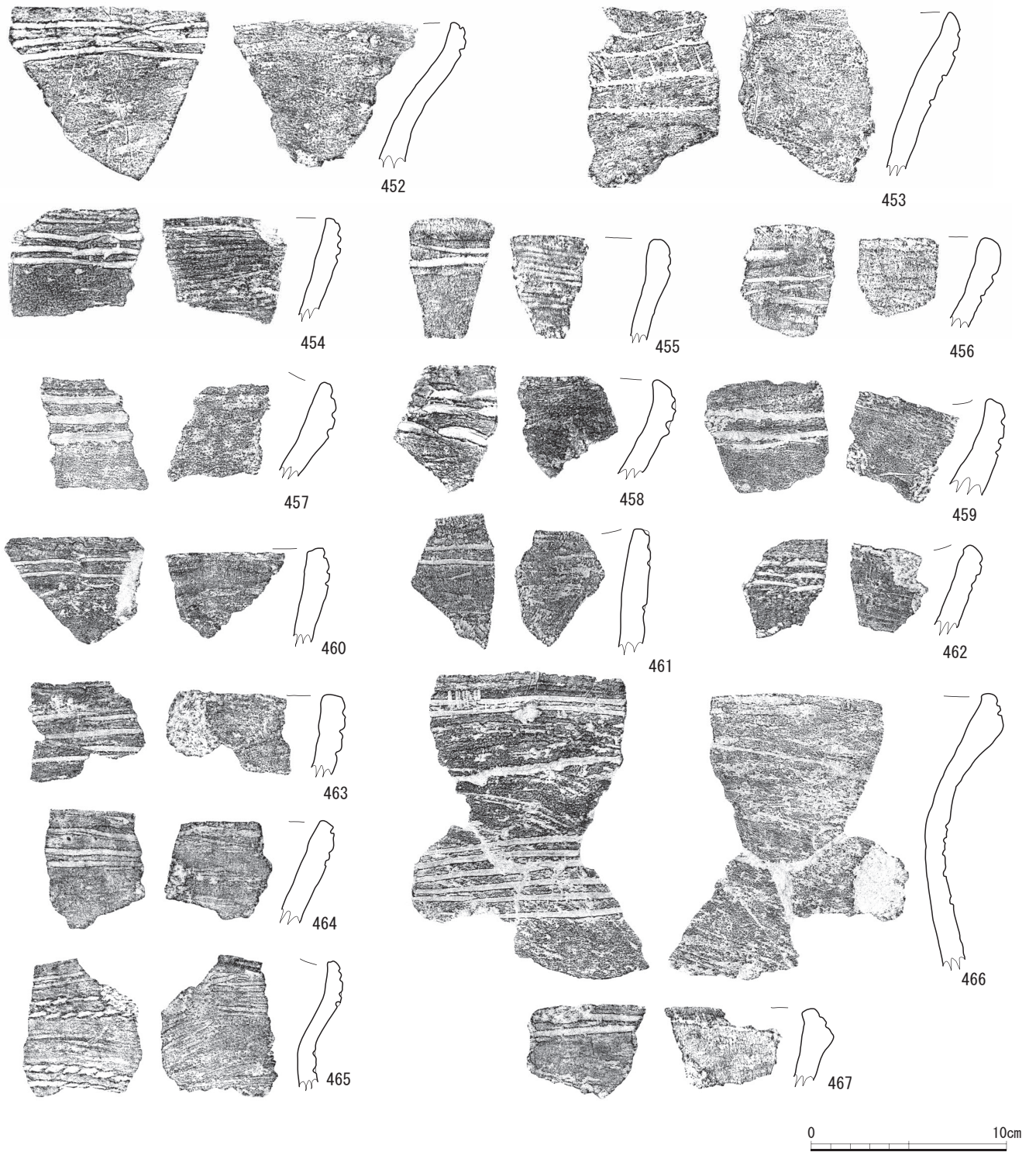
468は、胴部文様のモチーフは第VI類土器であるが、沈線で文様を写す。擬縄文を含めてこうした土器が第V類土器として認識されてきたところもある。452・454・455は粗い平行沈線として第V類土器で設定されたものに入る。476の口縁部も肥厚するが、断面が三角形状を呈し、斜め方向に短沈線が施される。456・474～478

などは、口縁部の文様帯のところの形状が第VI類土器に近く、文様も三角形や流水文を擬している。

489～491は鉢形土器である。

頸部から胴部である。492～499はa類、500～520はb類、521～539はc類と考えられる。

492・494は沈線・短沈線が太く、深く入っている。507は胎土に滑石が入り、内外面とも丁寧にミガキ調整が行われている。515～517・532・533は横位直線文の上から刺突文を施している。刺突文は連続性に乏しい。537の頸部の屈曲は緩い。544は器壁がかなり厚く、胎土に金雲母を多く含んでいる。



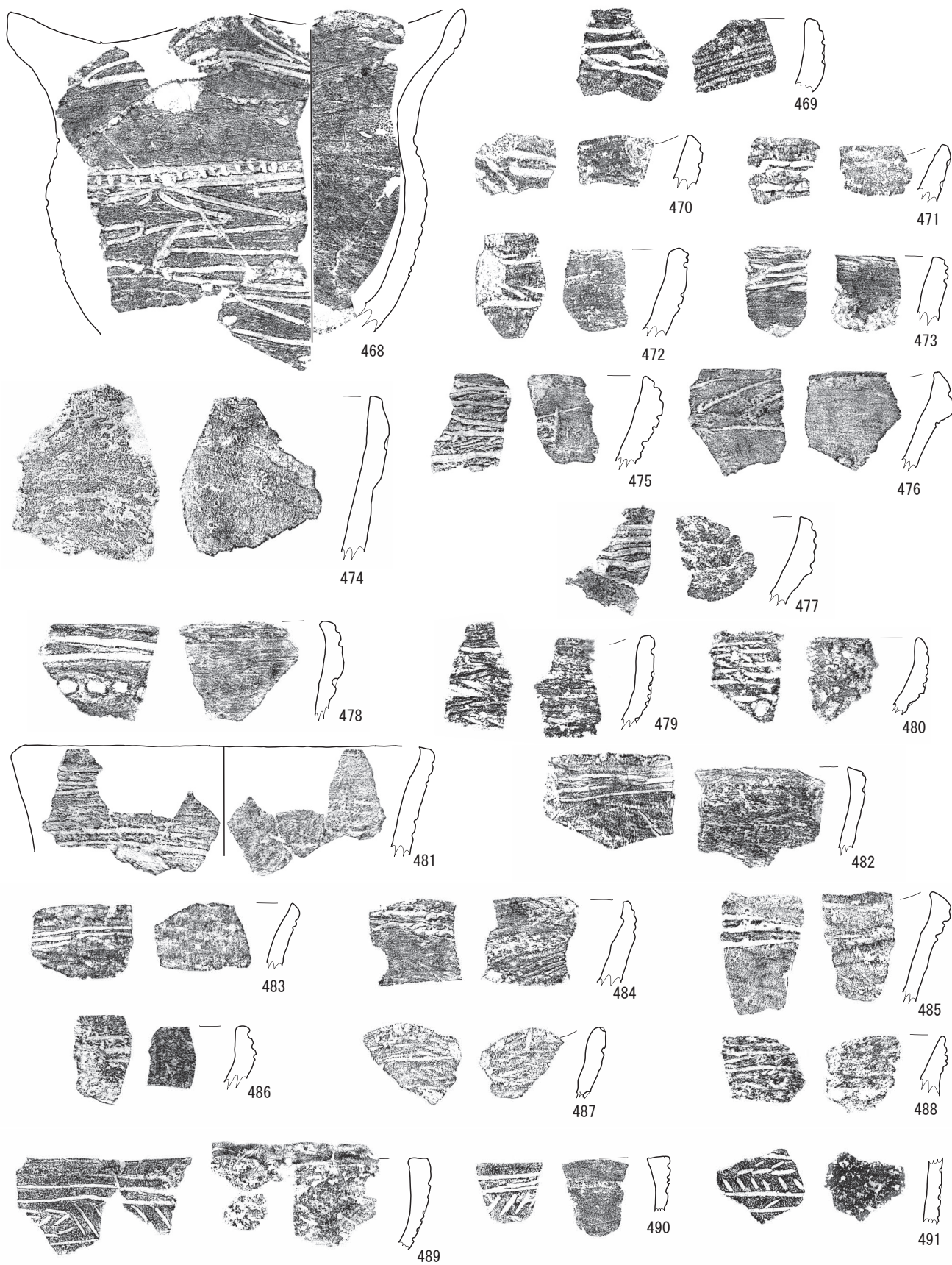
第270図 第V類土器（2）

第VI類土器（第275～279図 547～629）

幅広の口縁部文様帯と、頸部が無文で胴部に文様帯をもつもので、磨消縄文が施される。文様は三角形や流水文様が施され、頸部と胴部の屈曲部には刺突文が施される。縄文がなく、沈線のみは第V類（沈線のものや擬

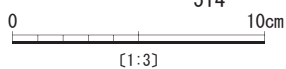
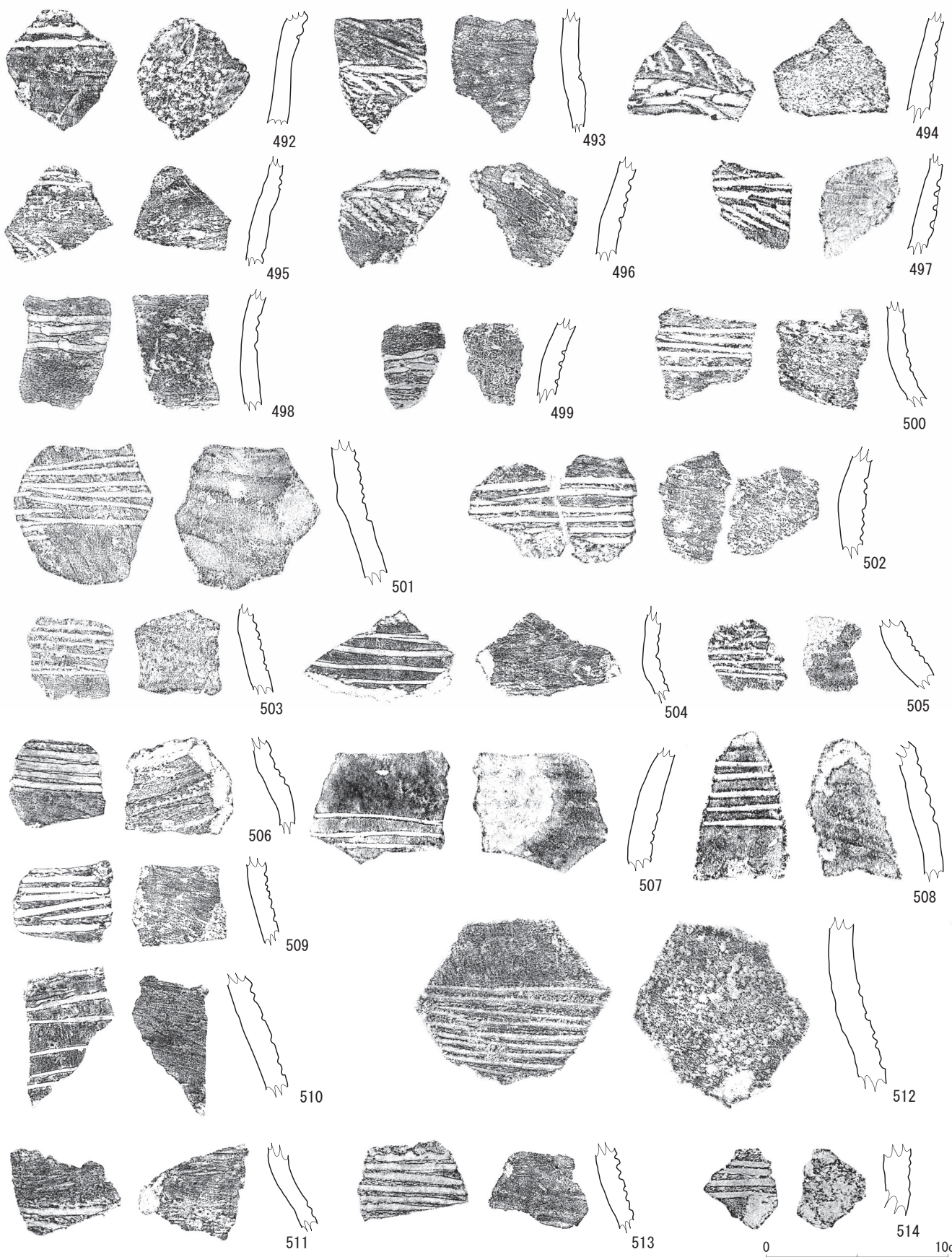
縄文・頸部の内側の稜が顕著ではない等々）との類別が難しいものもあるが第VI類とした。

547は、外反する口縁部に、内外で縦位突帯を2条ずつ4～6か所貼り付けるもので、第VI類とした中に含めたが、北久根山第一型式にみられる土器である。548～

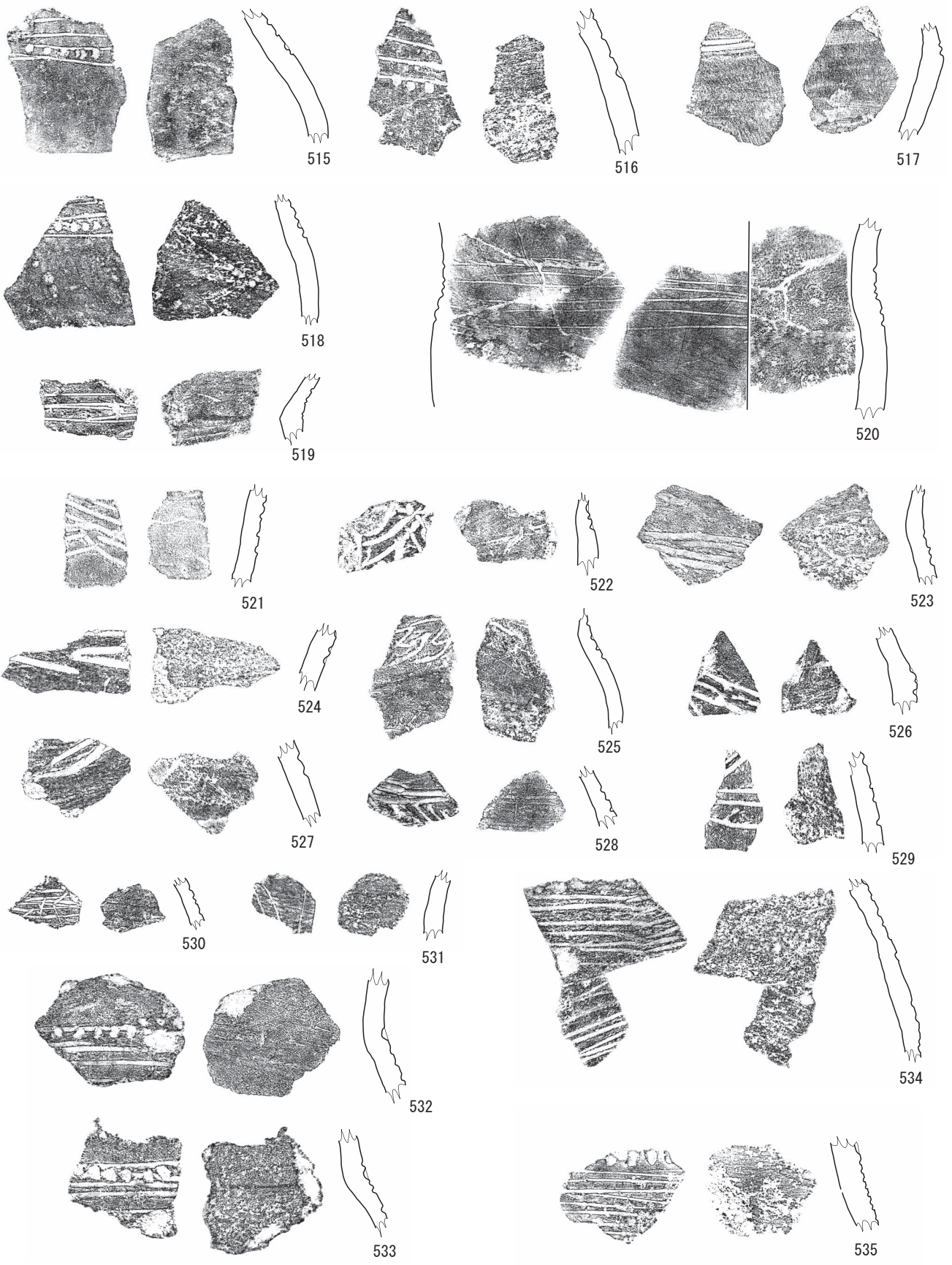


第271 図 第V類土器 (3)

0 10cm
[1:3]

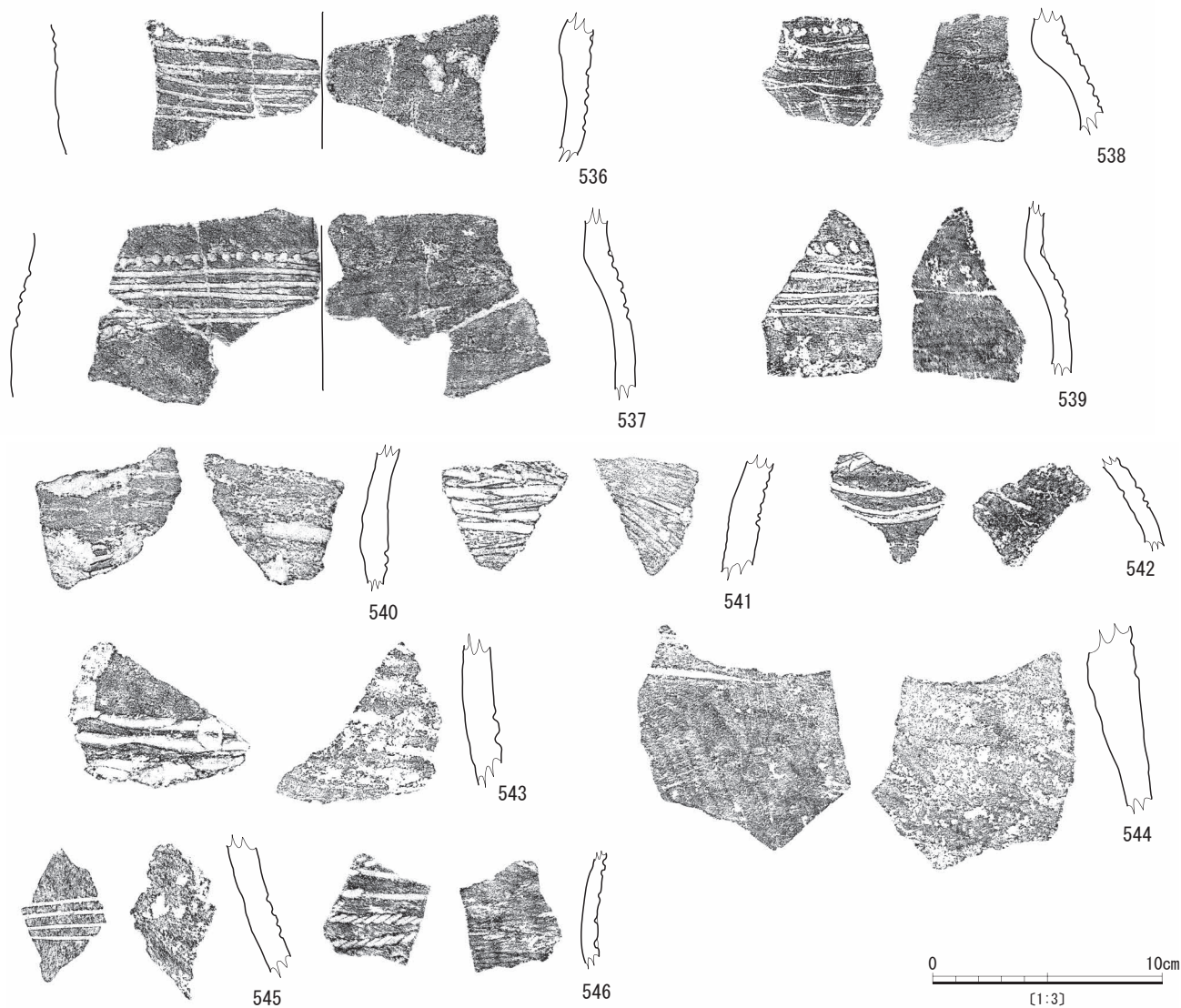


第272图 第V类土器(4)



第273图 第V类土器(5)

0 10cm
[1:3]



第274図 第V類土器(6)

550は口縁部に文様帯がなく、口縁部外面に縄文が残る。551～569は口縁部である。幅広に肥厚させて文様帯を形成する。3条を中心に、沈線を施し、途中で楕円形ないし円形の刺突文を切断するように配する。553・560・561は縄文が施されない。554は胴部文様帯まで残存するが、文様帯の上部に横方向に刺突文を入れる。555も胴部文様帯まで繋がり、連続刺突文が上部を回る。556～565は、口縁部文様帯の下部に、円形ないし楕円形の刺突文を施すものである。562～566は三角形文、569は流水文と磨消縄文が施されている。

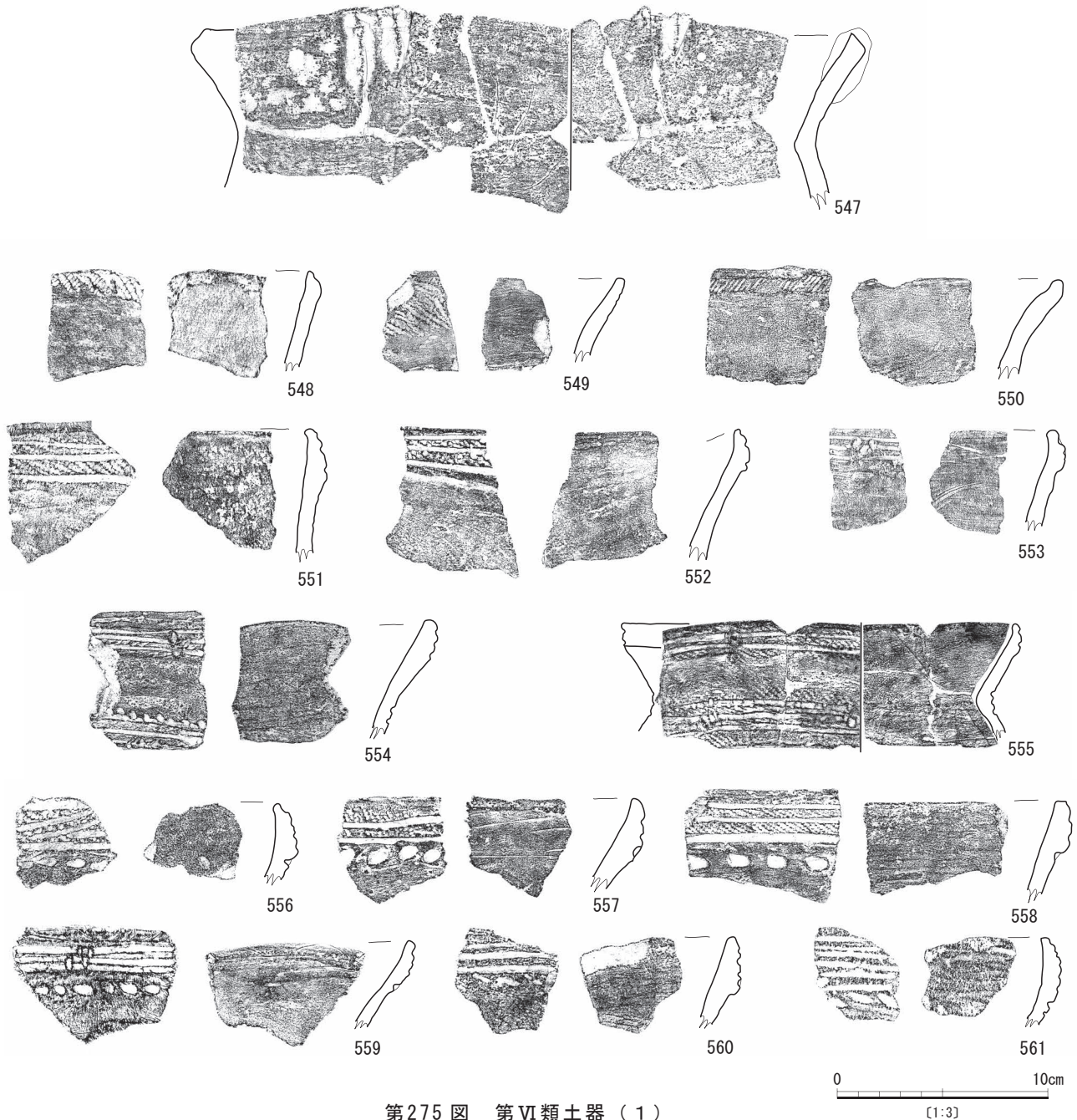
570～625は胴部の上半、頸部から肩部の文様帯の破片である。頸部には必ず刺突文が回る。三角形文(570～574・578・579・581・585～589・610)や流水文様(611～617)をモチーフとしているものが多いが、S字文(611・612)もみられる。570は三角形文を4条の沈線で大きく施し、肩部が強く張り出す。内面は横方向にやや粗く

へラミガキされる。586は570同様、肩部が強く張り出し、器壁は薄い。586は三角形文の中に円形の刺突文を施す。605は半円状の刺突文を、610細い沈線による三角形文を施す。626は台付皿形土器である。627・628は鉢で、627は刺突文を3条に施す。

629は、第VI類土器であるが、口縁部形態と円形の凹点など第VII類土器と共通点が多く、中ノ原タイプにも近しい。

第VII類土器(第279・280図630～655)

口縁部が外反して、頸部に明確な稜が形成される。口縁部は「く」の字状に立ち上がり、屈曲部内部に凹みが巡る。磨消縄文が施される。内外面共によくへラミガキされて、口縁内部と口縁下は横方向、頸部は縦方向、胴部文様帯の下は縦方向のへラミガキをなす。一方、第VIII類は口縁部の屈曲がなくなっていく、口縁部外面の文様帯が狭くなる。



第275図 第VI類土器(1)

胴部文様は、波頂部に合わせた位置に円形やハート形の凹点が入り、やや斜行しても平行沈線様のものを第VII類とした。

630は、口縁部が外反し、端部が「く」の字状に折れて、波状口縁をなす。頸部の外反は強くない。頸部に連続刺突文を施し、その下に平行線の磨消縄文が胴上部に施される。口縁端部が立ち上がり、内側に凹線が回る。口縁部の沈線は3本を基本とするが、波底部の文様帯の狭い部分では2本沈線となる。

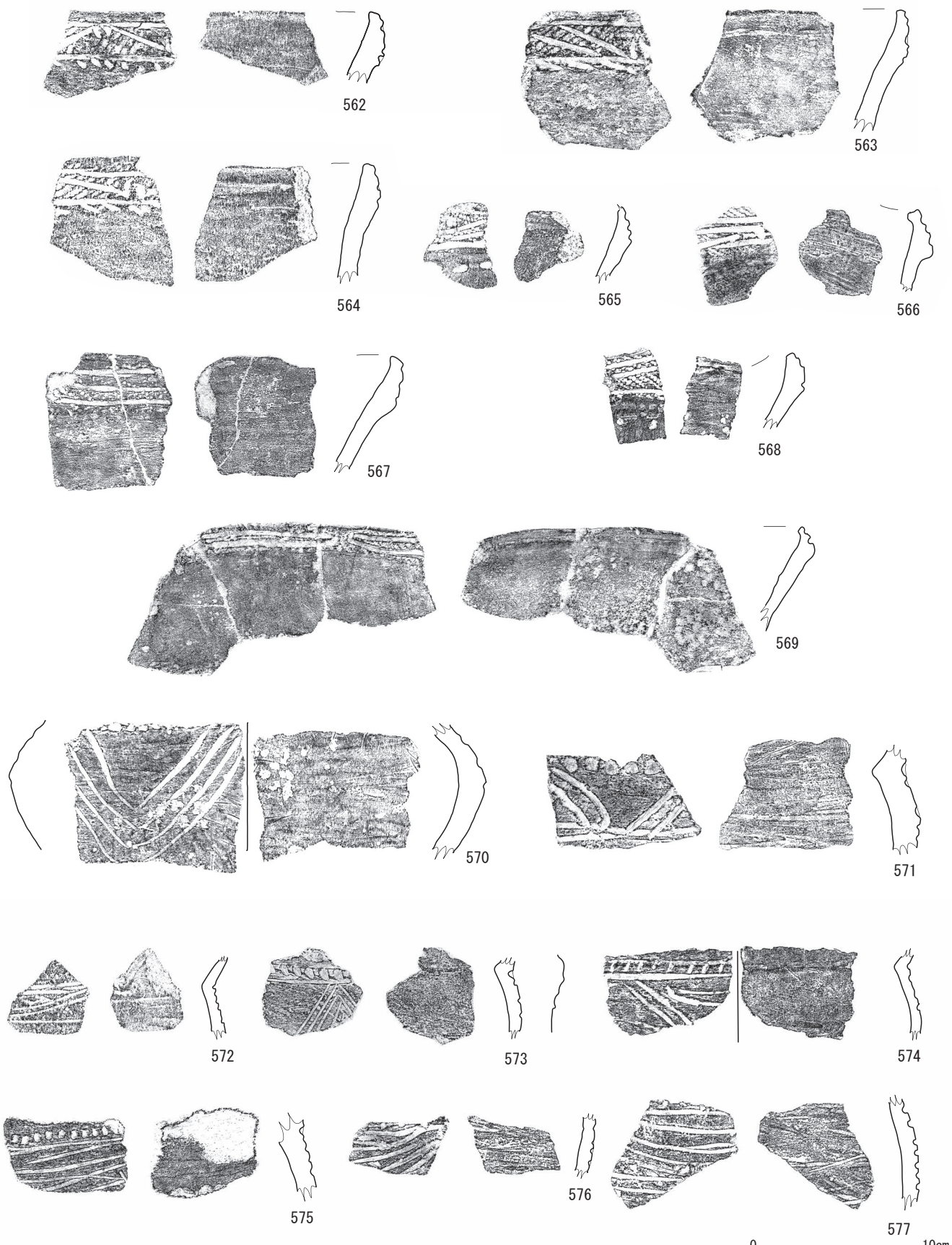
632～637・639・641・642・645・647・649は波頂部を含むが、文様はヴァリエーションに富む。635はハー

ト形、636・639・643・644・647・649・650は半円形の凹点が波頂部に入る。また、631・637・639・641・642・646・649・650は波頂部の沈線が3本で、634・638・644・647・648・650・651・653・654は2本である。

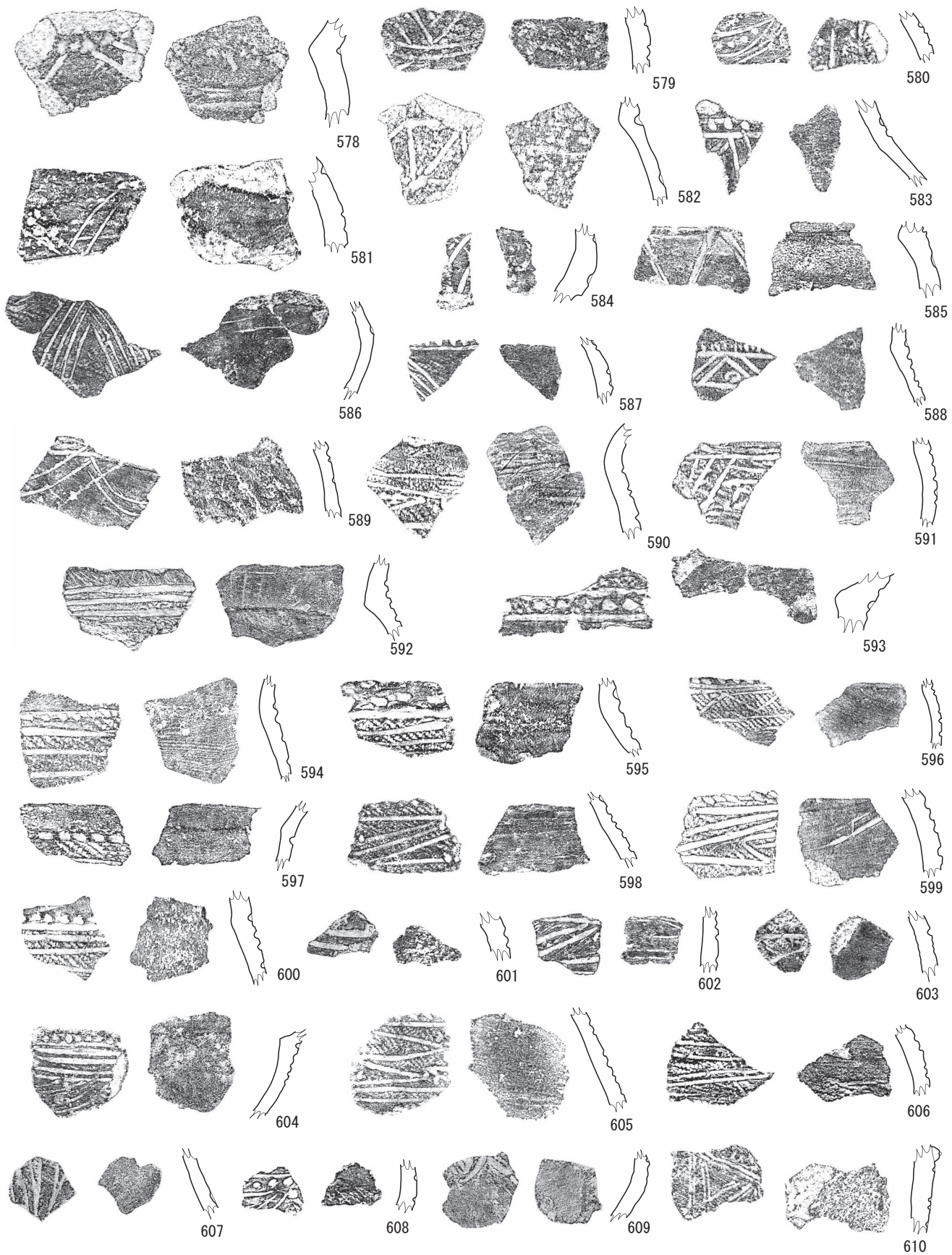
第VIII類土器(第281・282図656～684)

口縁部が折り曲がって立ち上がるのではなく、口縁端部が肥厚して外面の文様帯部分となってくる。内面の口縁下の凹線がなくなる。胴部最大径が上がる。調整はヘラミガキが粗くなる傾向がある。

口縁部の文様帯の幅が縮まり、口縁部には2本沈線文が、胴部文様は西平式の簡略化として「x」と横位直線

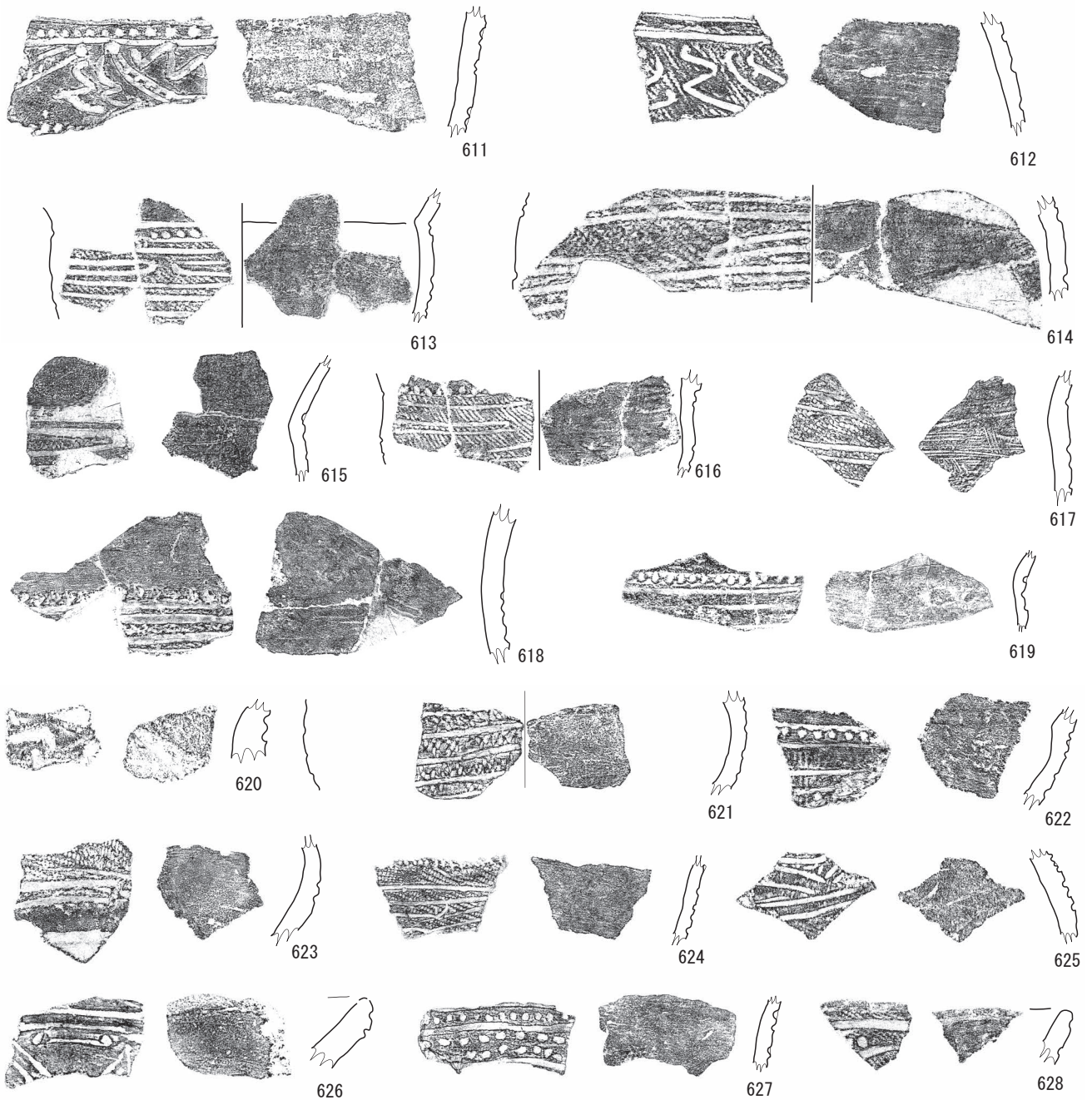


第276图 第VI类土器(2)



0 10cm
 [1:3]

第277图 第VI类土器(3)



第278図 第VI類土器(4)

文による横形流水文に変化する。文様は磨消縄文が施される。656～684の口縁部を一応、第VIII類の口縁部として分類しておく。

658は口縁端部に2本沈線とハート形の凹点をもつ。661は内面の口縁下の凹線が入るが口縁部は折り曲がらない。668は口縁端部が肥厚し、2本沈線と凹点をもつ。674は、断面三角形の外面に文様帯が有り、沈線と連続刺突文を保持する。最大径は胴部の上位にあり、流水文様で胴部を施文する。

679は、口縁部は立ち上がり、内面に凹線が回るが、

胴部文様は「 \times 」字で折り返して流水文様となる。684は口縁端部が肥厚し、きれいな平坦面に2本沈線を施す。頸部付近の器壁はかなり薄く作られている。

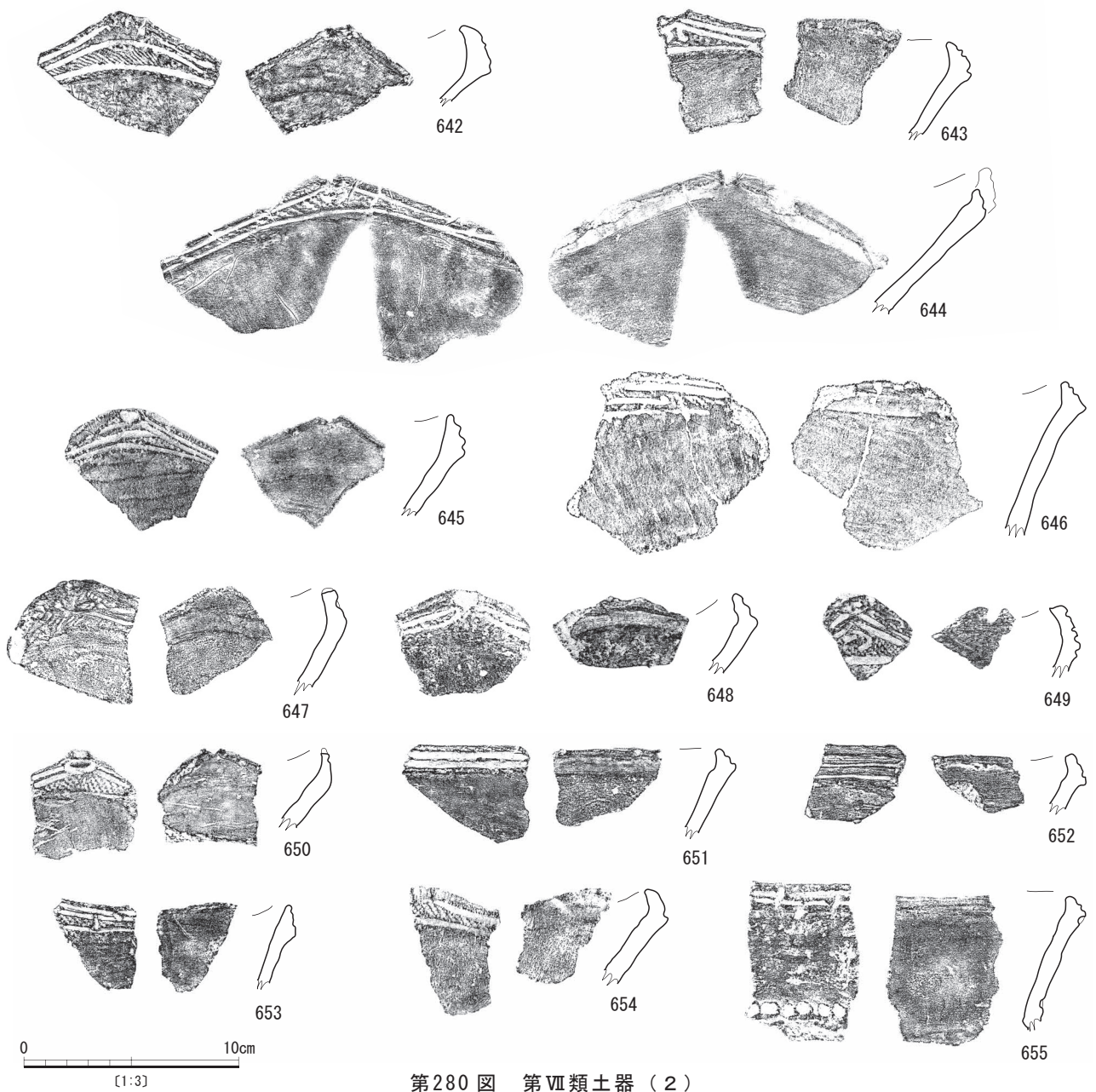
第VII・第VIII類胴部(第283～285図685～750)

第283図の685以降の胴部破片には、第VII類のものも含んでいる。

685～748は頸部や胴部の破片である。第VII類土器は685～698で凹点等が入る。699・700は「 \times 」字で折り返しなど第VIII類であるが、他の破片については第VII類・第VIII類のどちらなのかは不明である。



第279图 第七类土器(1)



第280図 第Ⅶ類土器（2）

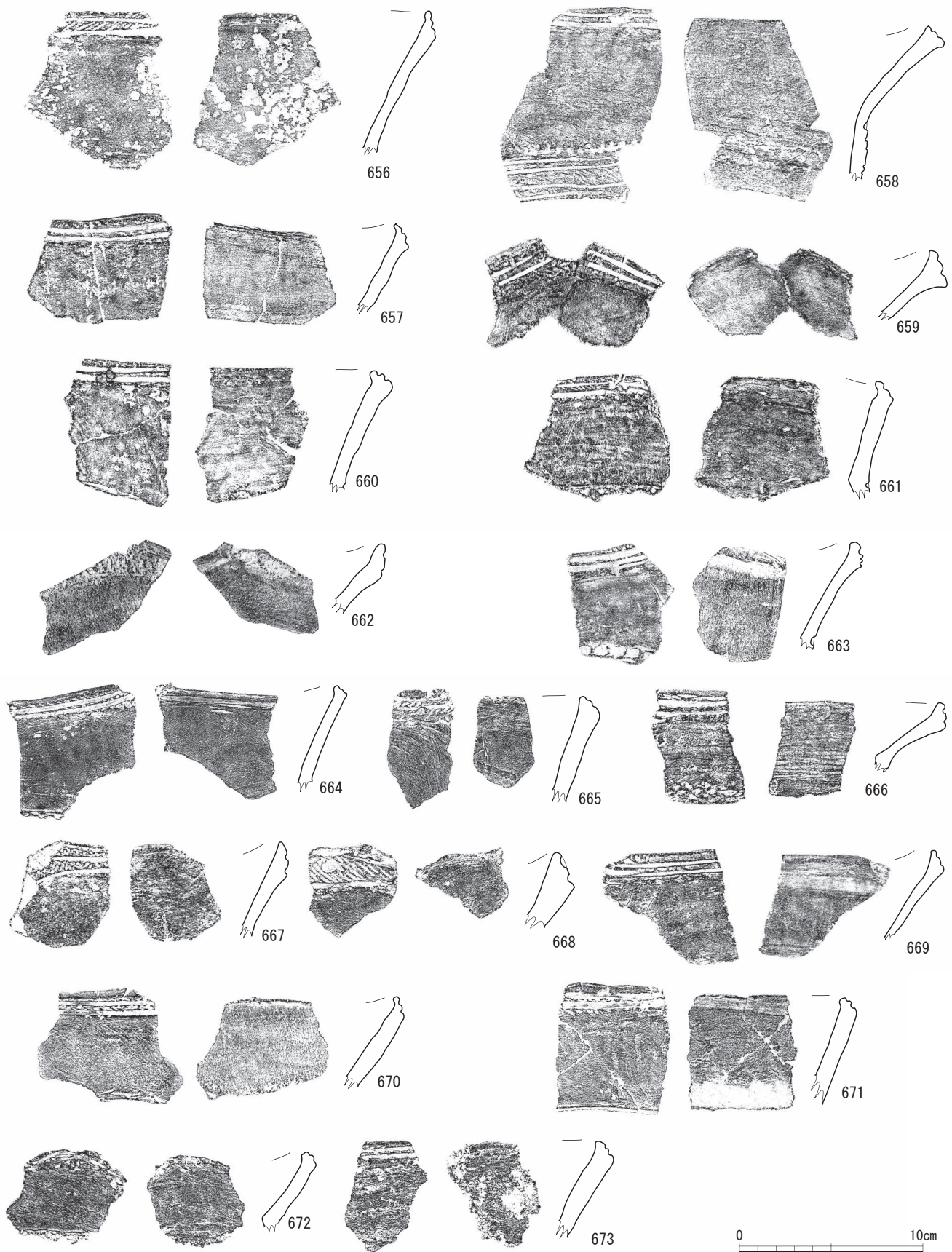
685は横位直線文と刺突が明瞭に入り、頸部の屈曲はやや強い。690は凹点を用いて「X」字を表現した可能性がある。696～698は半円状の凹点を隣り合う形で施文し「X」字に似た形を作っている。699は半円状の凹点1つだけであるが、690同様、凹点を用いて「X」字を表現した可能性がある。741は頸部の屈曲が弱く、刺突文がない。横方向に縄文を軽く押し当てて刺突文の様に施文していると考えられる。740～745は縄文が残るが、沈線は施されていない破片である。

749・750は無頸壺の口縁部である。

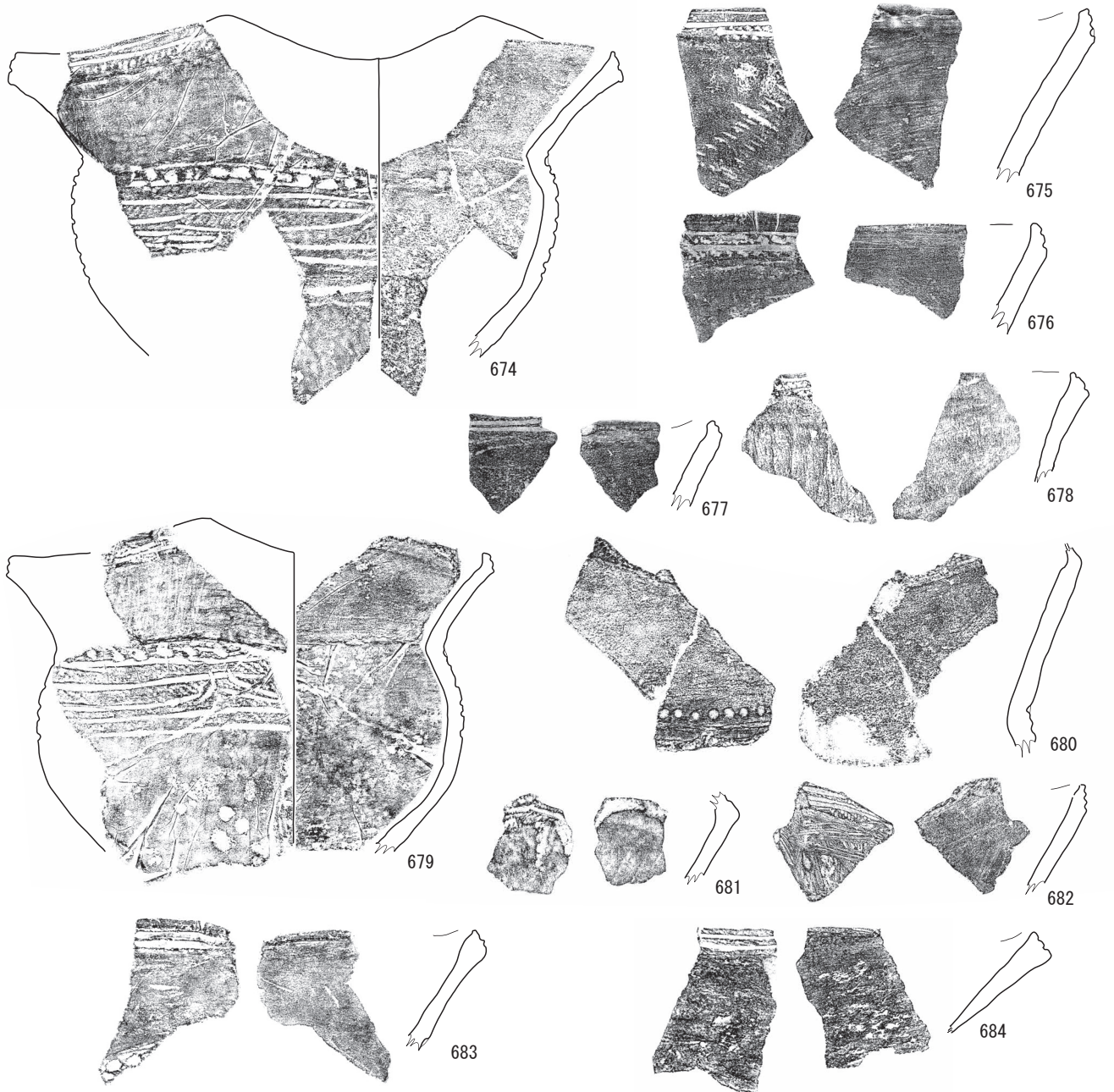
第Ⅸ類土器（第286～292図685～848）

口縁部あるいは胴部に沈線を施すものである。口縁部が屈曲して立ち上がらずに、口縁端部の平坦面に沈線が施される。一部に内側に凹線のあるものもあるが、口縁部が無文でも胴部に沈線を巡らせるものもある。器面がヘラミガキされるが、第Ⅶ類・第Ⅷ類と比べると粗い調整である。

751～782は口縁端部に沈線を施すものである。783～789は口縁端部には沈線がないが、頸部下に刺突文・沈線文が施されるもので、第Ⅹ類とした口縁の中にも第Ⅸ類の口縁部が含まれている可能性がある。790～806は口縁端部に沈線あるいは刺突文が施されるもの



第281图 第八类土器(1)



第282図 第Ⅷ類土器（2）

で、胴部の文様についてはつかめていないが口縁部形状から第Ⅸ類の中に含まれるものと考えた。796のように長い口縁部で、頸部での屈曲が弱く、胴部文様帯が付く場合は第Ⅵ類土器に分類できるものが稀にある可能性がある。751・754・757～759などから、807以下の胴部に繋がる可能性が高い。刺突文の連続性が乏しく、結果、円形や涙滴型の刺突文となったり（754・783～788・810・812～821・823・824・828・830～832・836）、刺突文が胴部の一番上の沈線上に施される（757・758・783・789・814・816～819・826）等が特徴である。同様の特徴は790～806は口縁端部にもみられる。

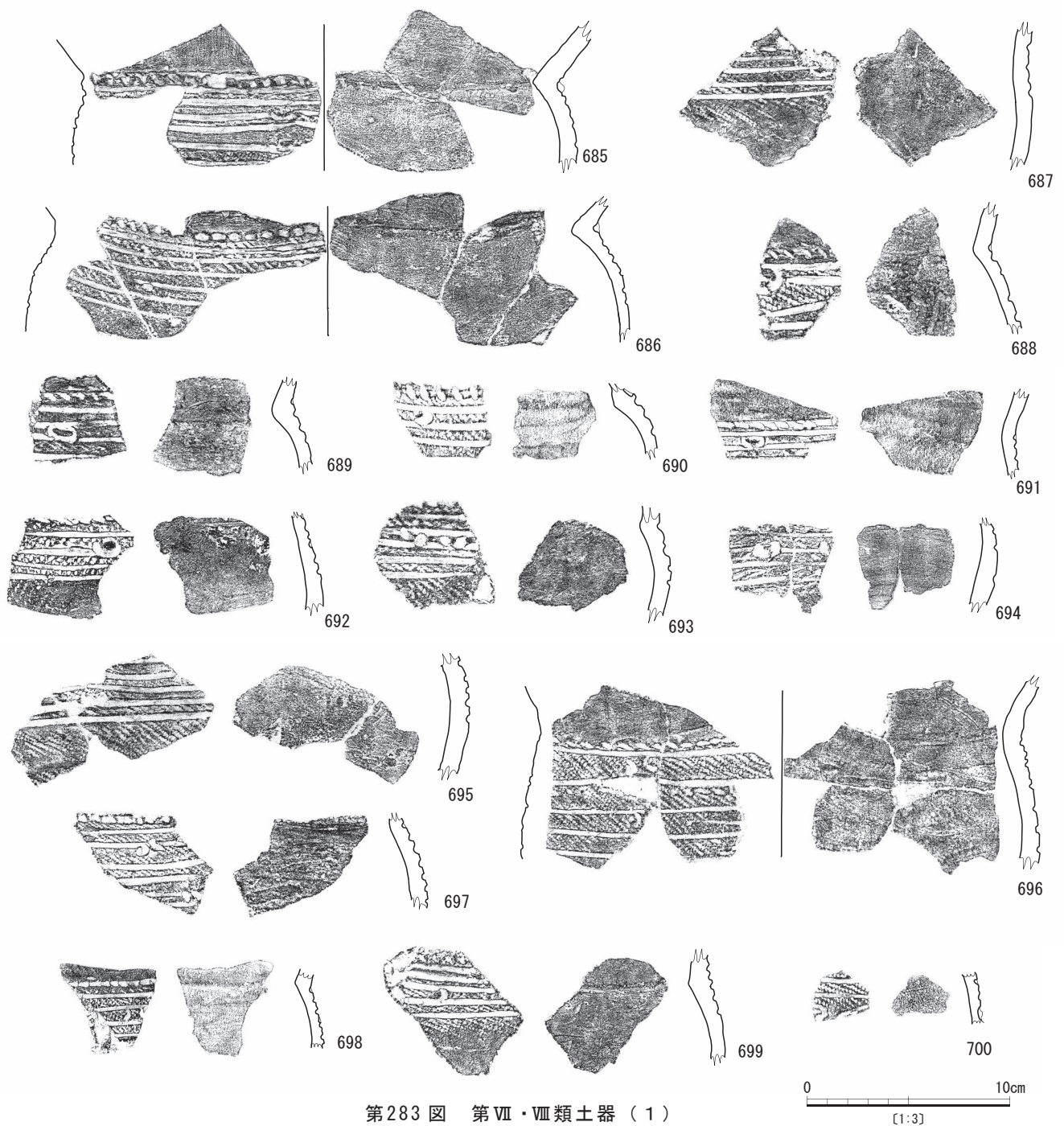
第Ⅹ類土器

無文土器の一群である。

第Ⅹ-a類（第293～297図849～893）

内外面共に丁寧にヘラミガキされ、口縁端が立ち上がり、口縁の立ち上がりの内面に凹線が巡るものである。頸部のヘラミガキ方向は縦方向が多い。第Ⅶ類・第Ⅷ類の文様のないものと考えられ、有文と無文の土器が存在したものと考えられる。

849は図上復元したものである。口縁部内側に凹線が巡り、口縁部の立ち上がりを結果的にかたちどる。頸部が長く口径が胴径を上回る。平底である。850は849と



第283図 第七・VIII類土器(1)

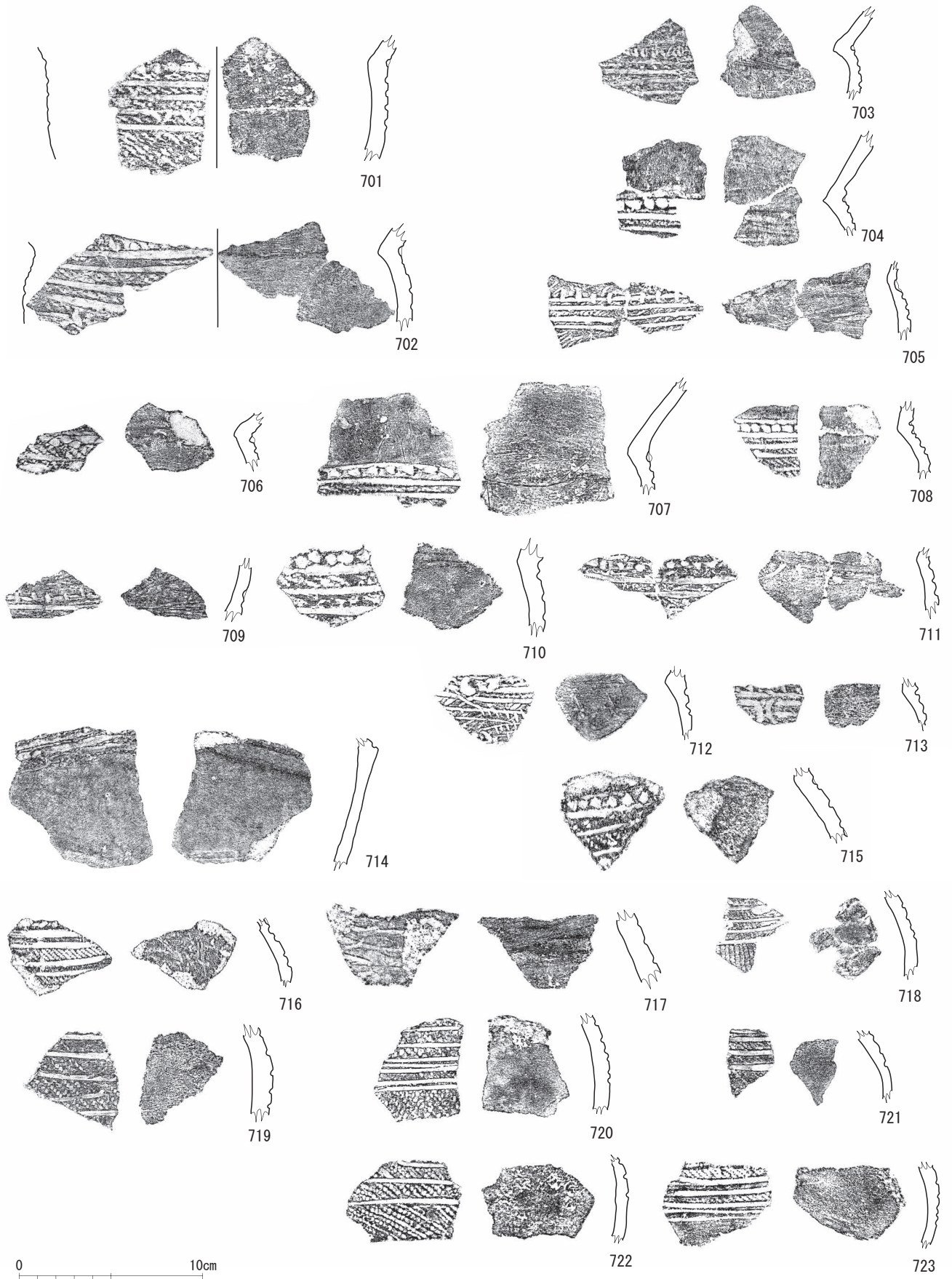
比較すると口縁部が短い。内外面ともに丁寧に磨かれている。口縁端部が短く立ち上がる。

口縁部形状では、凹線が巡るもの(849・851・853～864・868～871・874・876・878～884・886～890)、口縁端部がくちばし状になっているもの(850・857・865・867・872・873・875・877・885)などがある。

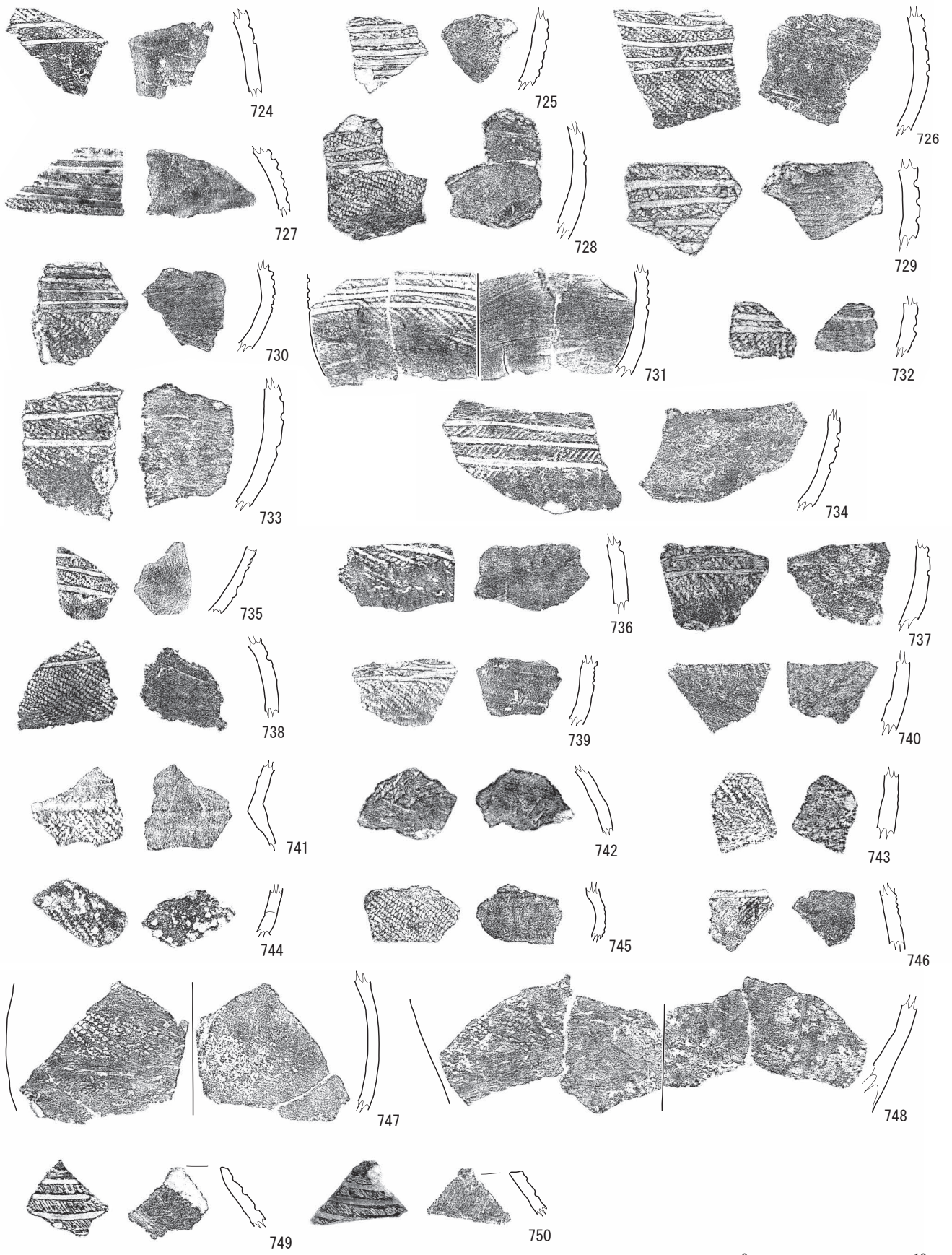
大型のもの(851・852)、中型のもの(853・857・895)、小型のもの(876～889)など、大小のものがやや器形の

異なりで存在し、これらが器種として機能していた可能性がある。

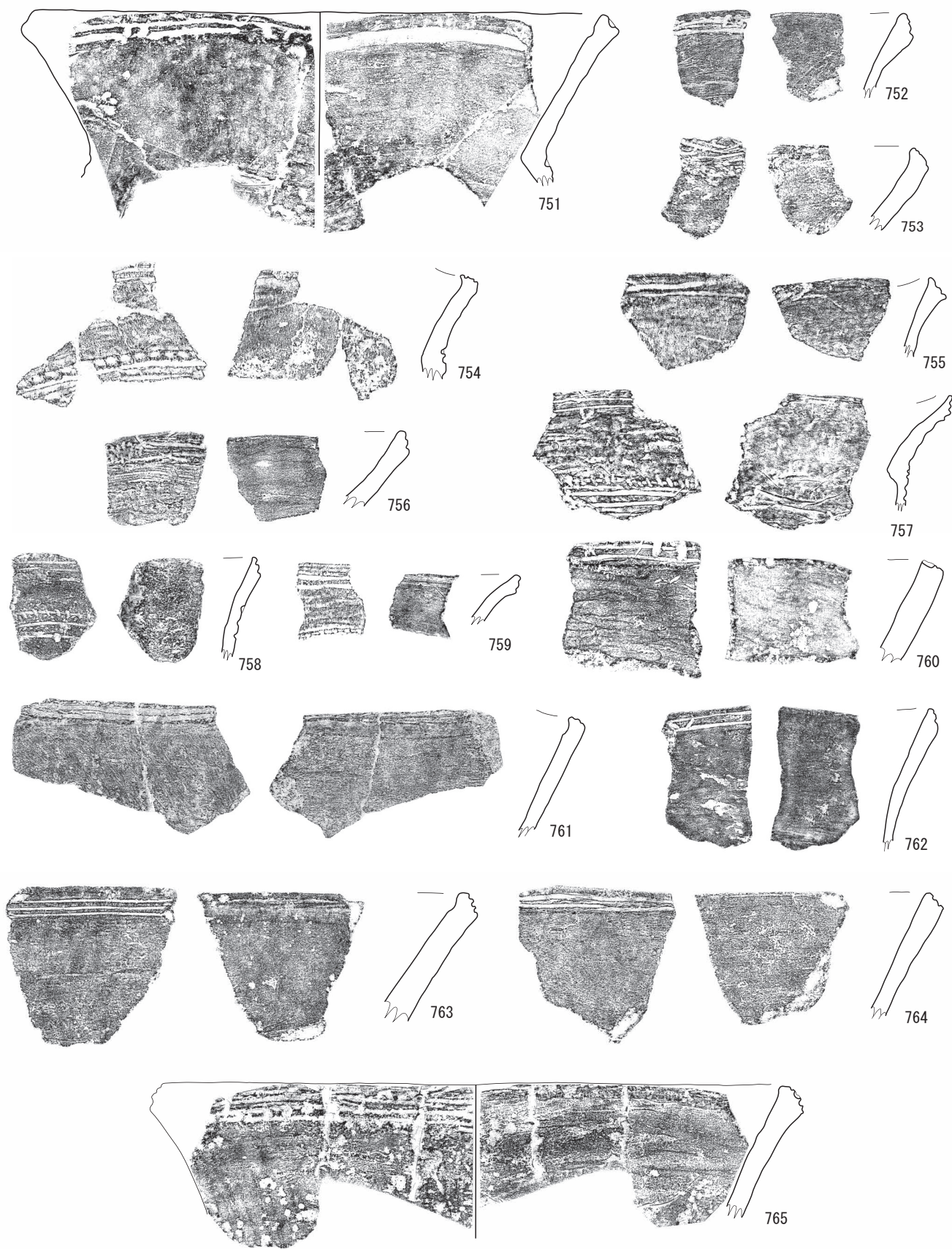
857は口縁部内側に凹線が巡り、調整は内外面とも横方向にヘラミガキがされる。858・860は口縁端部に狭い平坦面をもつ。865・866は頸部の屈曲が強く、871の口縁部はやや肥厚し、内面に明瞭な凹線をもつ。876は第X-a類に入れてあるが、頸部の屈曲が強く、肩部も張り出すなど第X-b類の特徴ももっている。881はス



第284图 第七·VIII类土器(2)

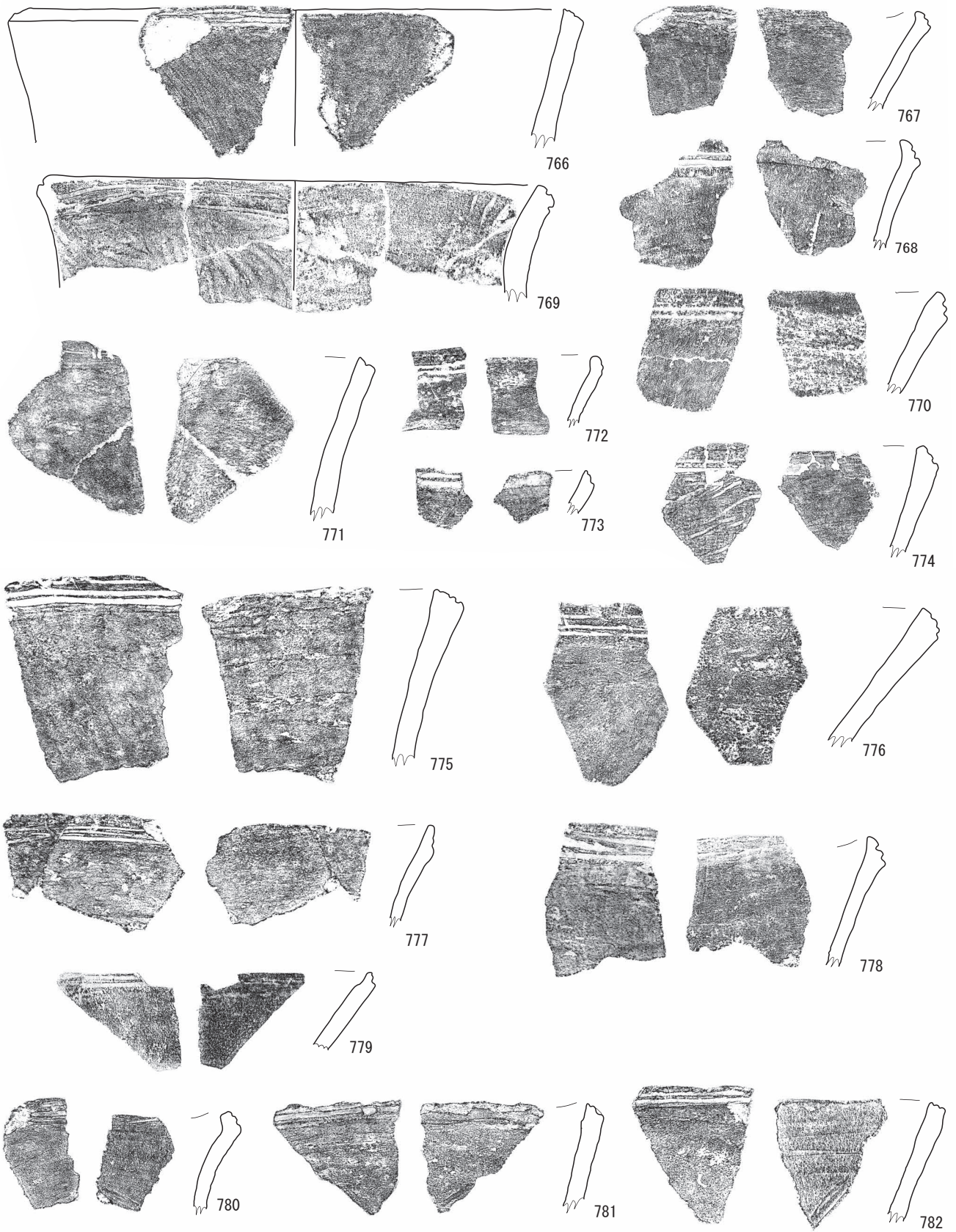


第285圖 第七・VIII類土器（3）



第286图 第区類土器(1)

0 10cm
[1:3]

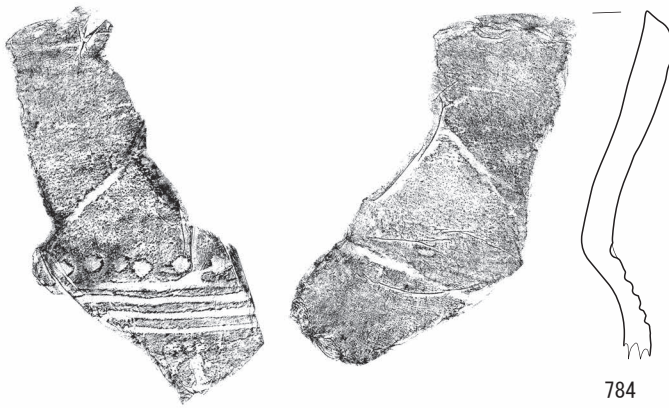


第287图 第Ⅹ区類土器(2)

0 10cm
[1:3]



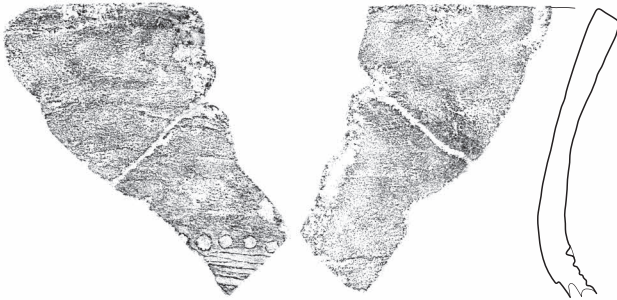
783



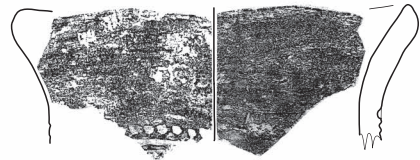
784



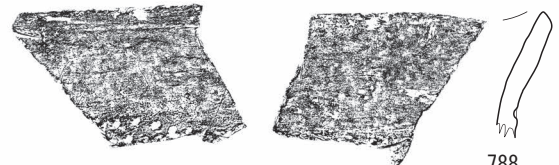
785



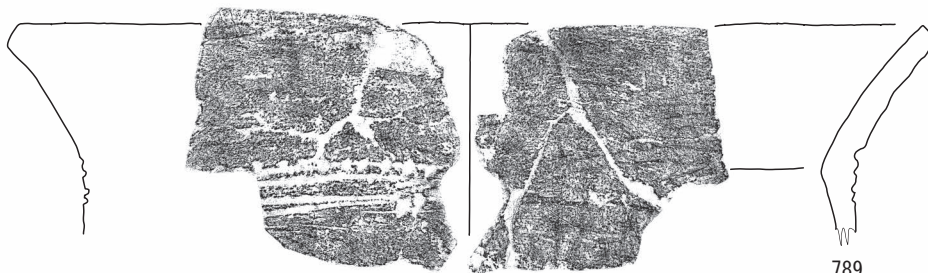
786



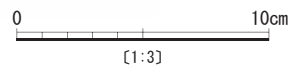
787



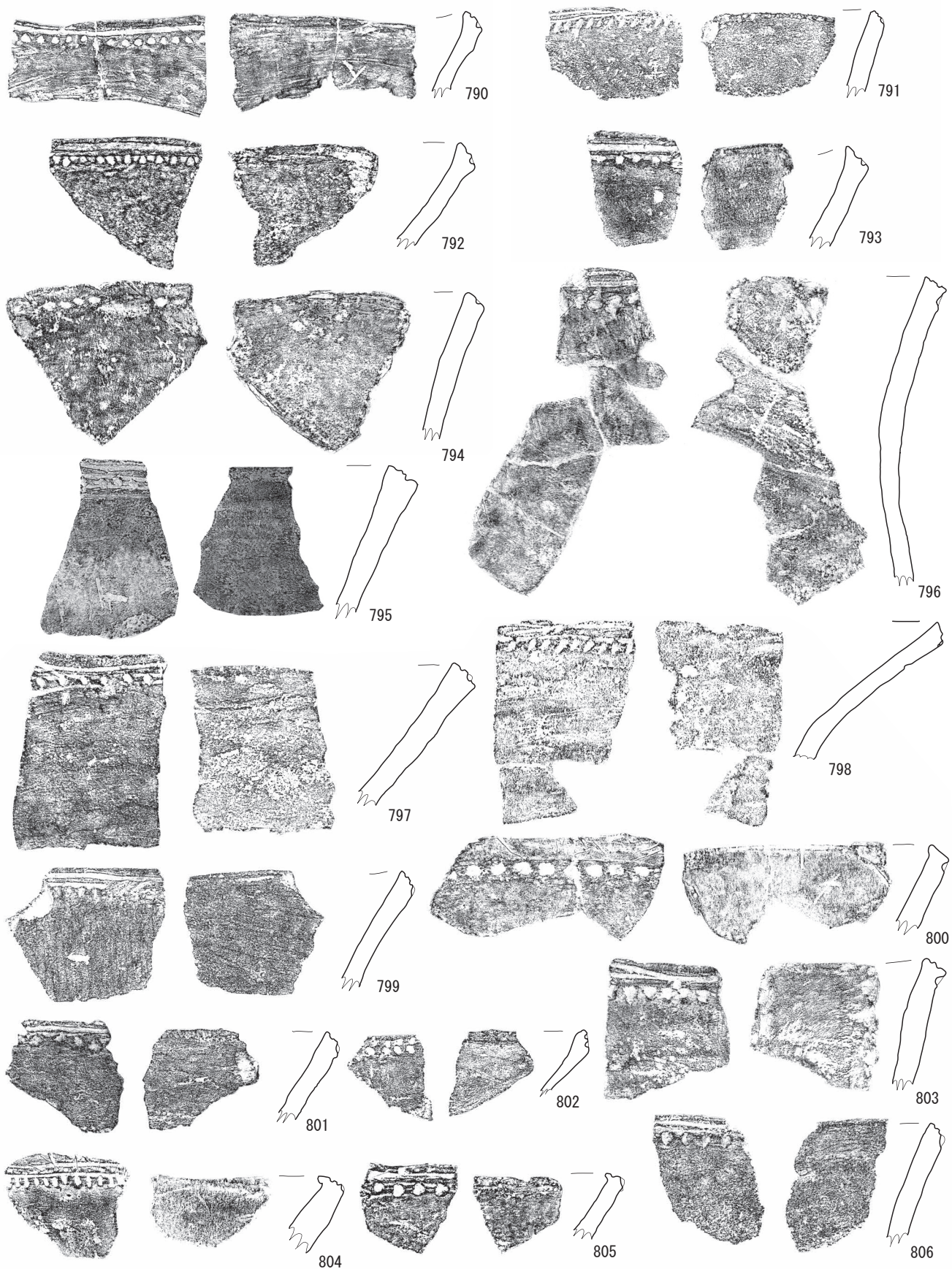
788



789

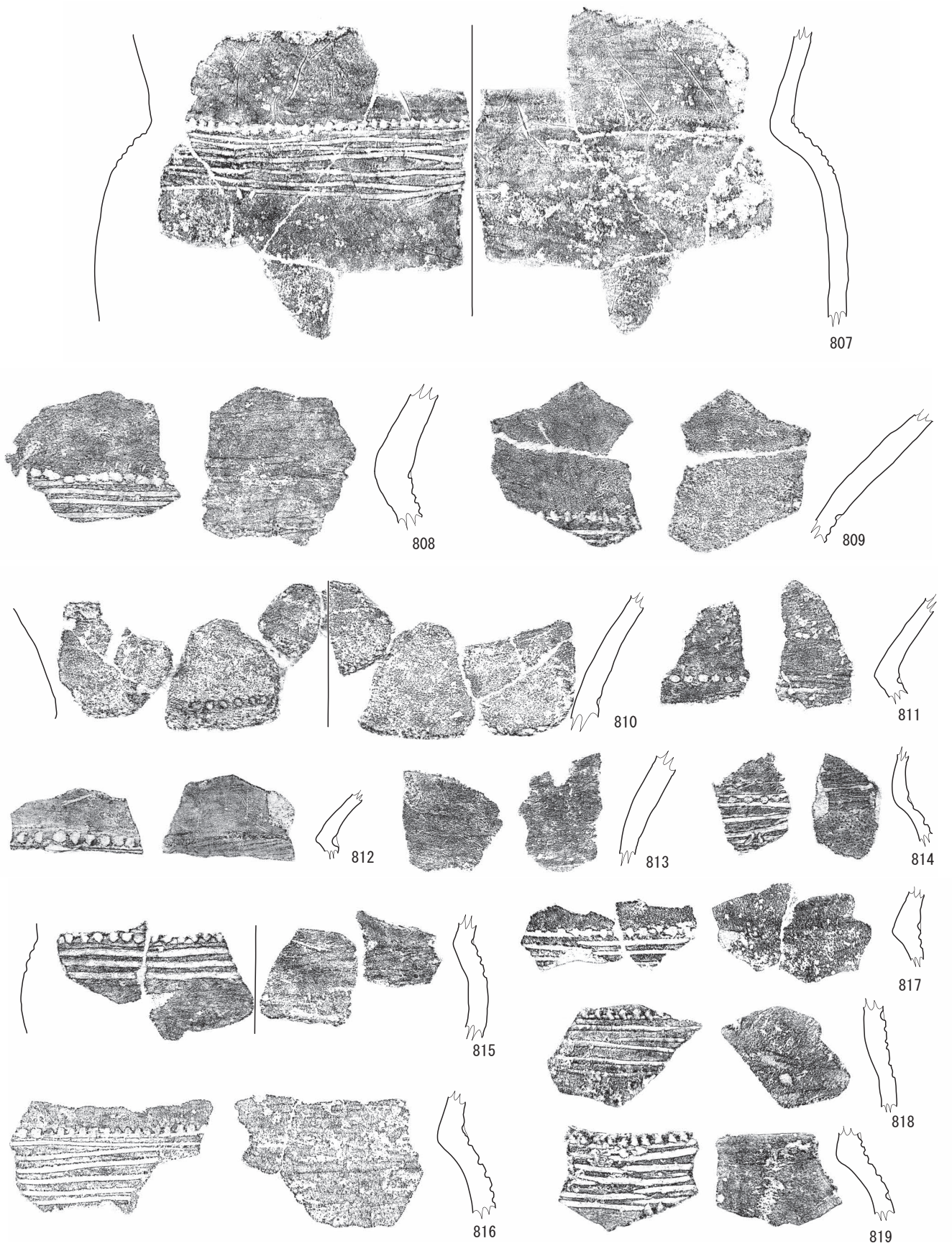


第288图 第Ⅹ区類土器(3)

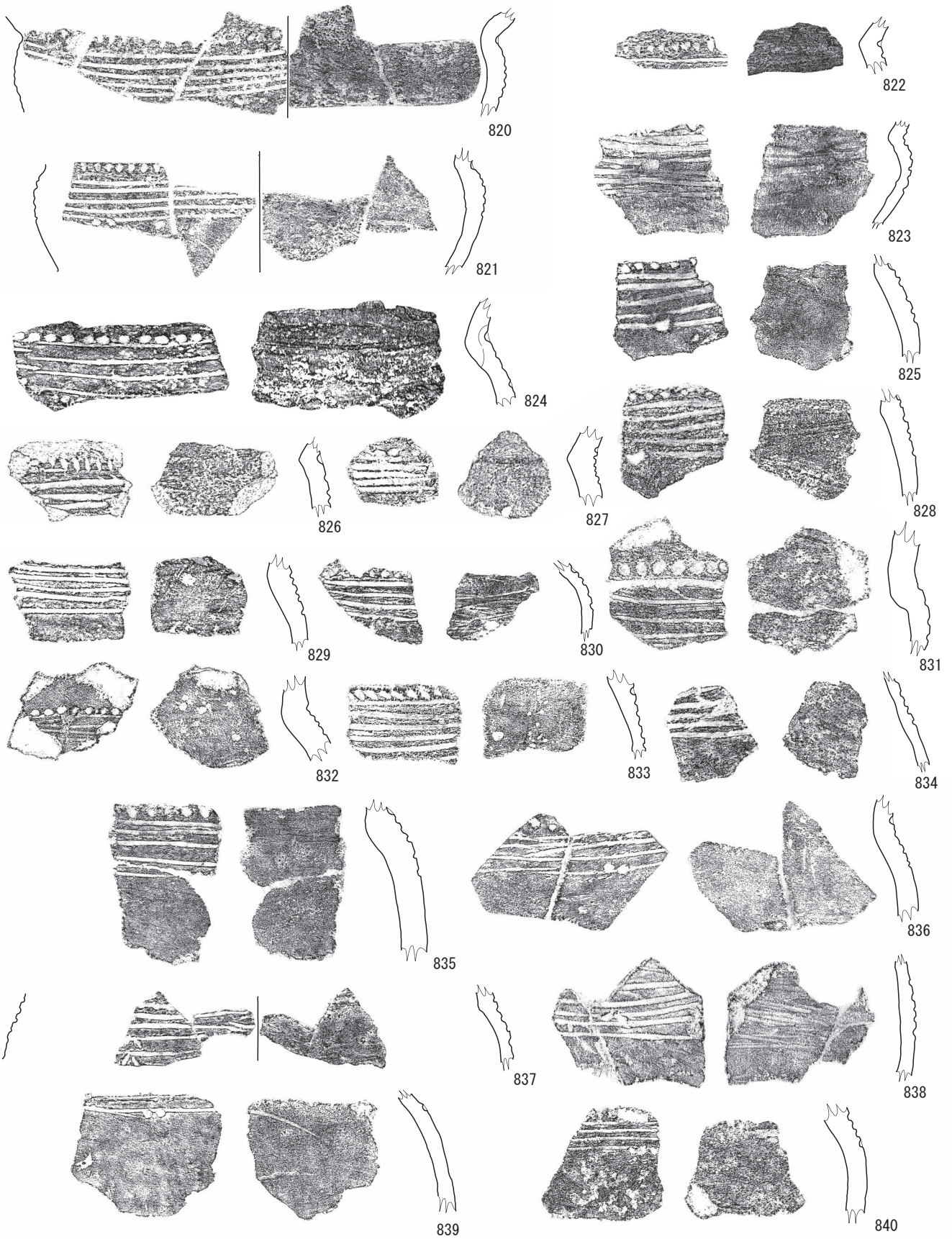


第289图 第区類土器(4)

0 10cm
[1:3]

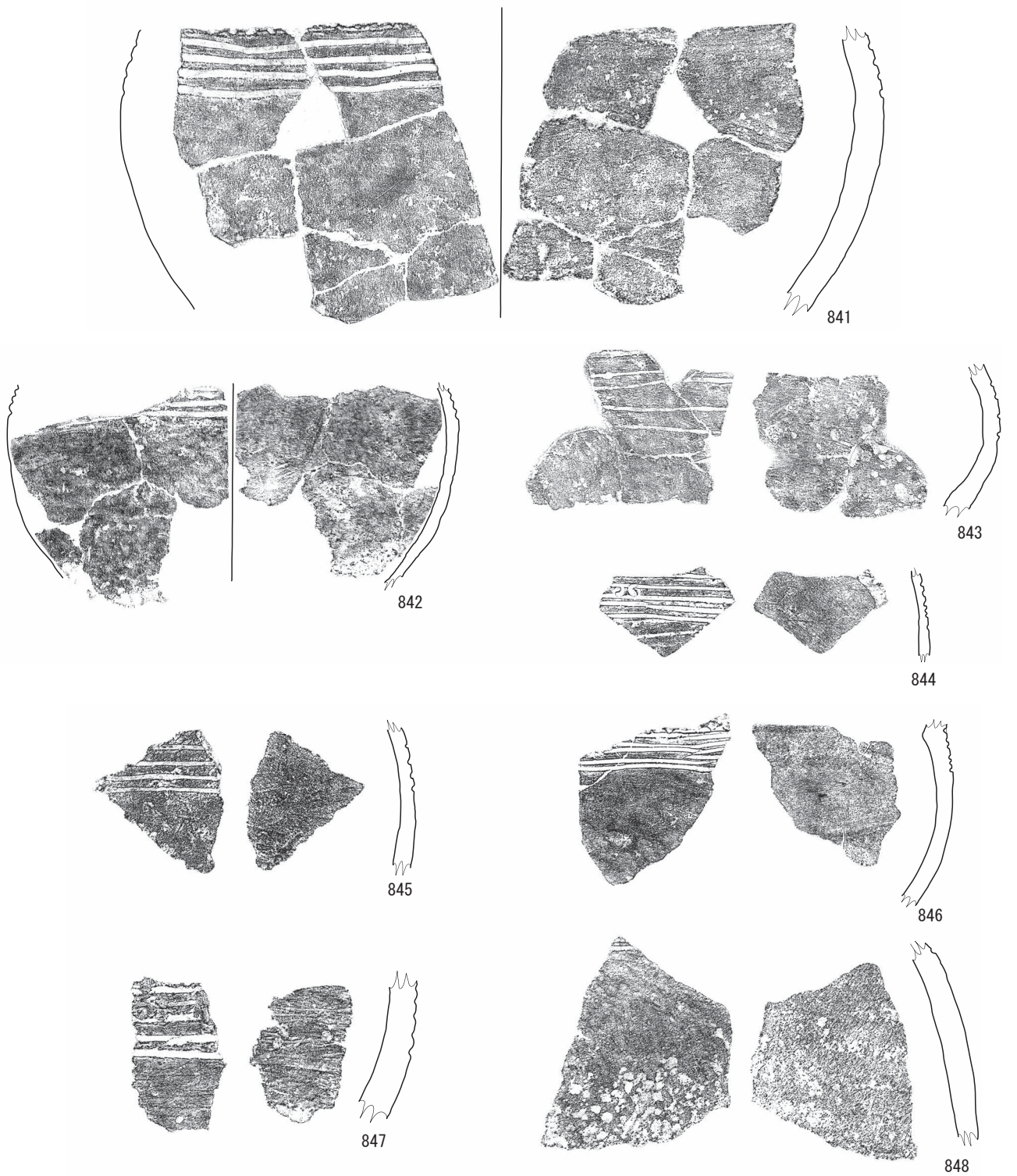


第290图 第Ⅸ区類土器(5)



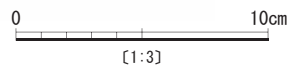
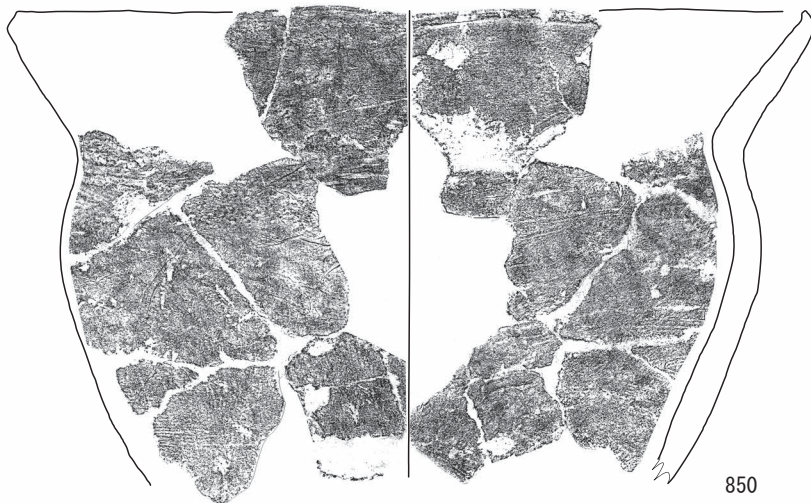
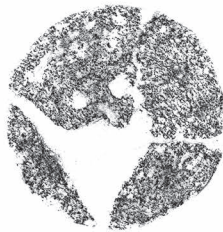
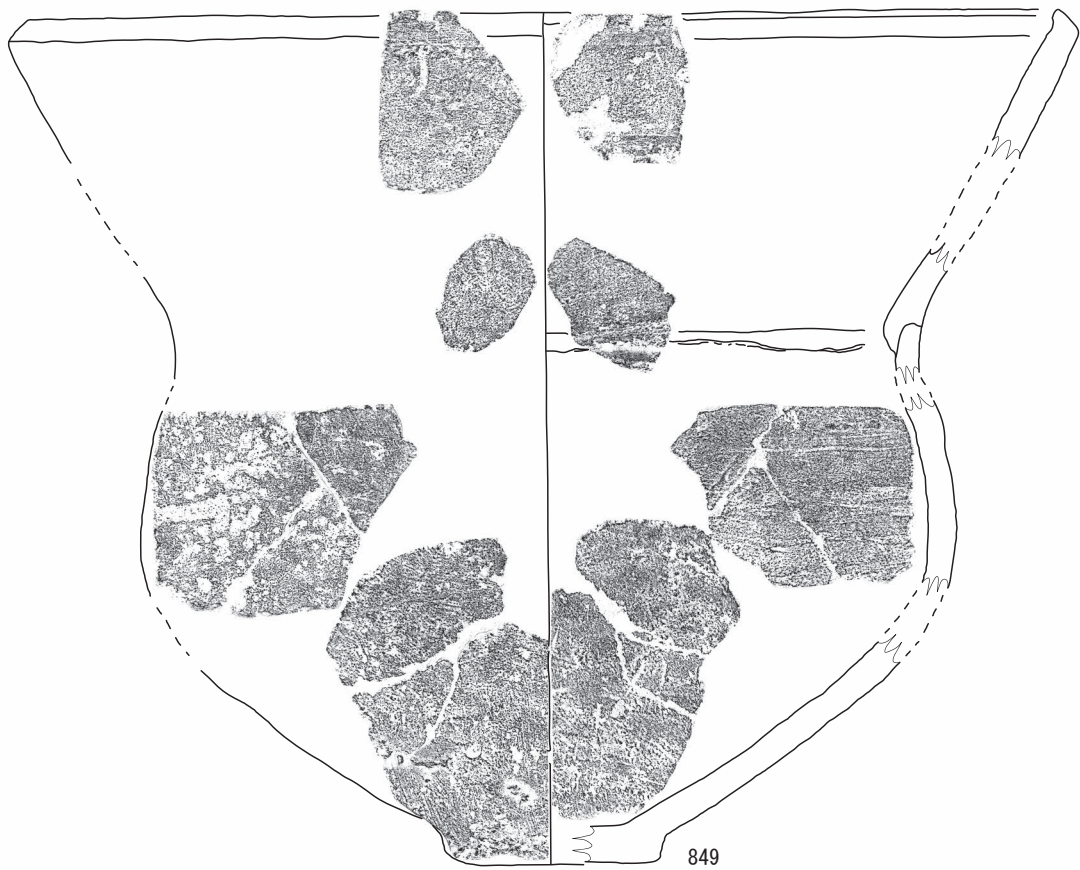
第291图 第Ⅸ区類土器(6)

0 10cm
[1:3]

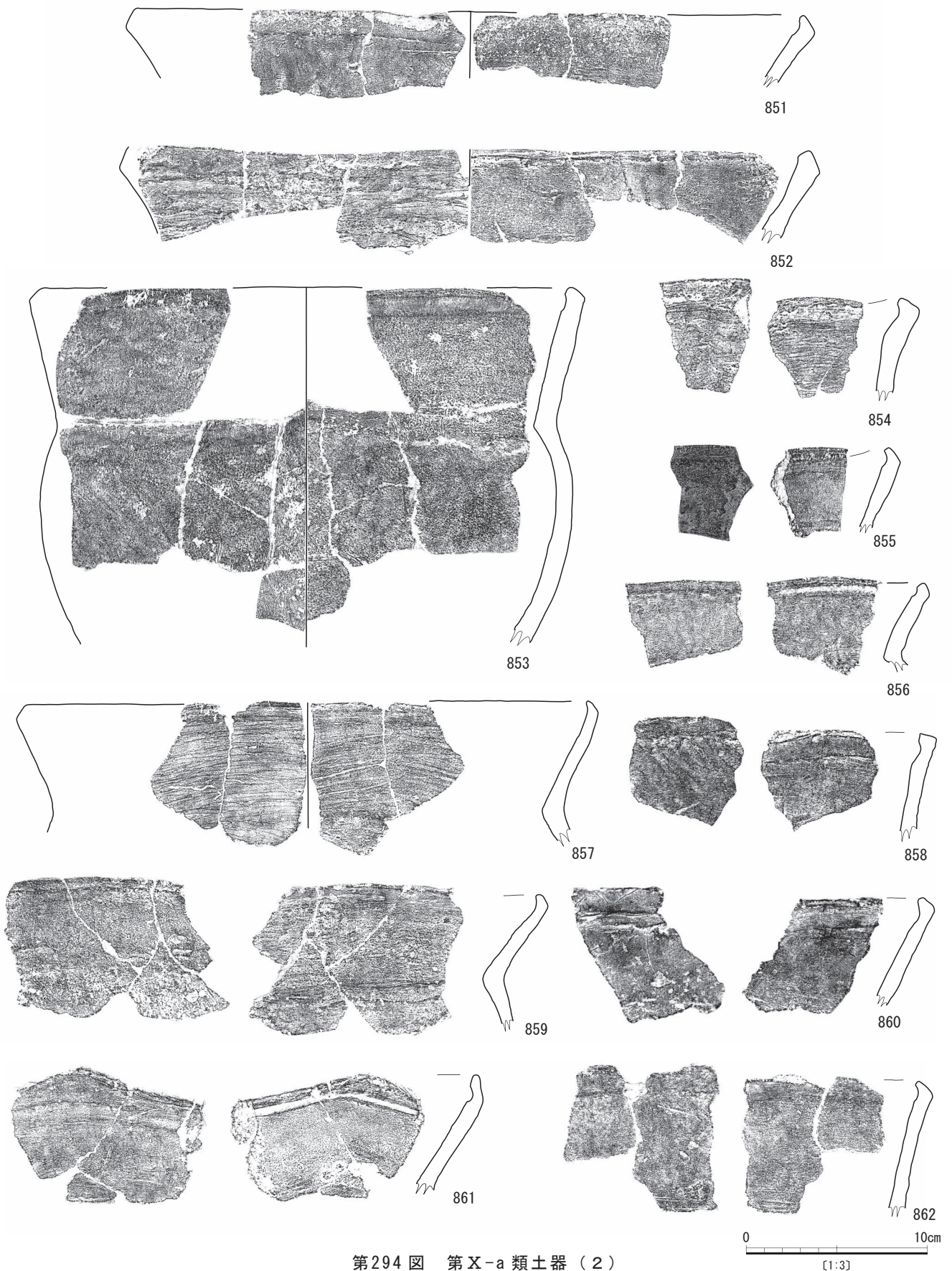


第292図 第Ⅸ類土器（7）

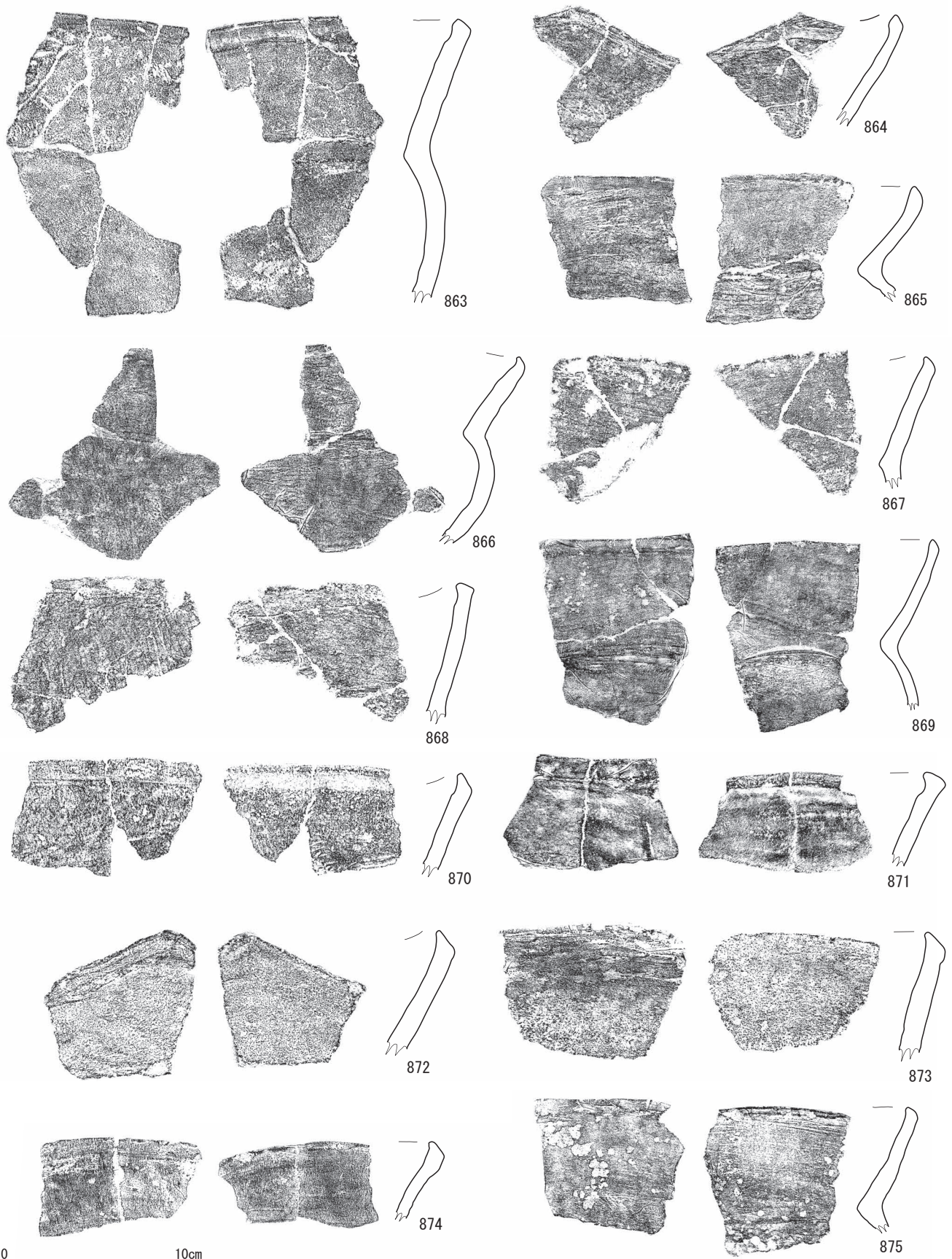
0 10cm
[1:3]



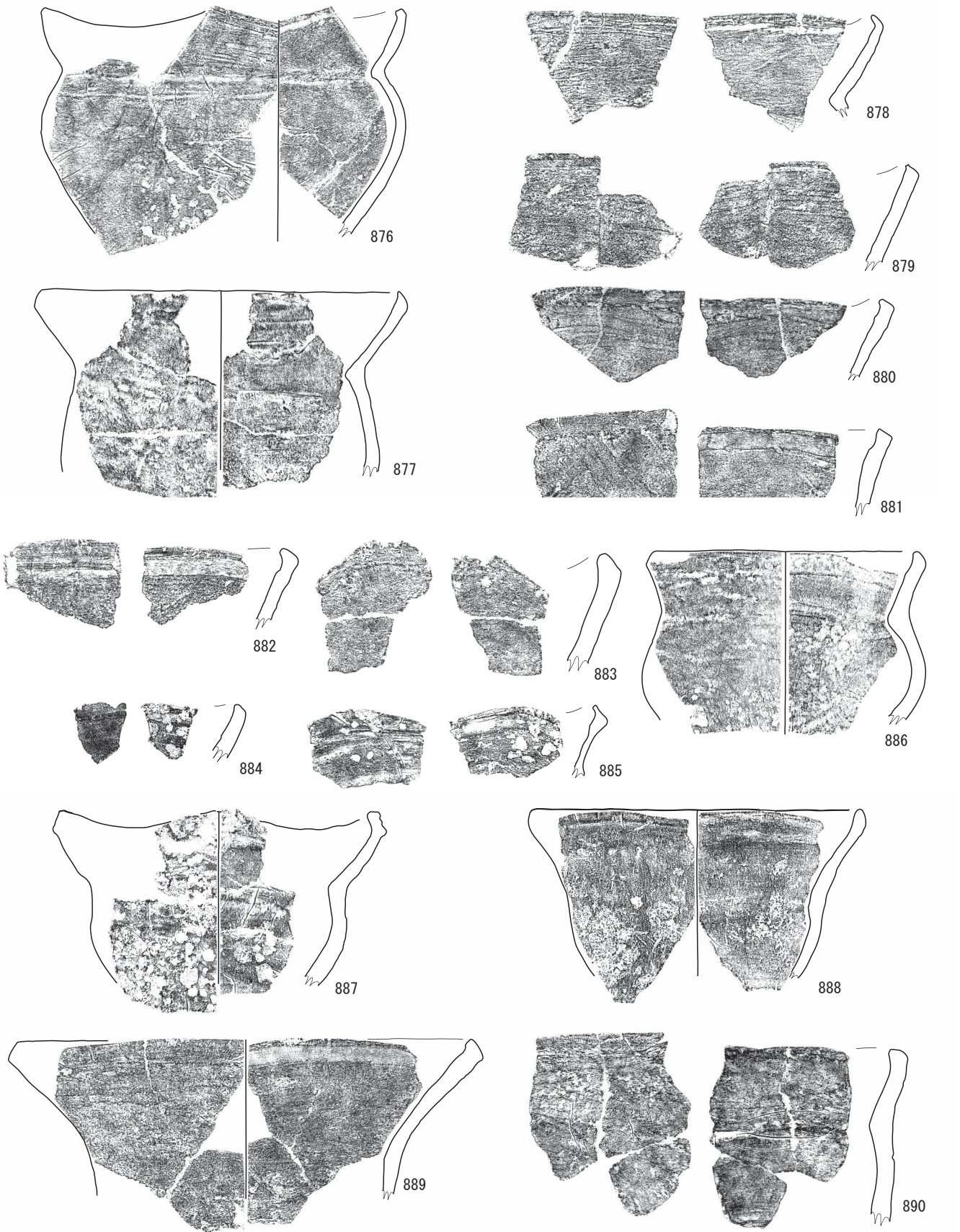
第293図 第X-a類土器(1)



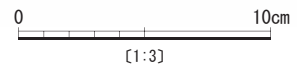
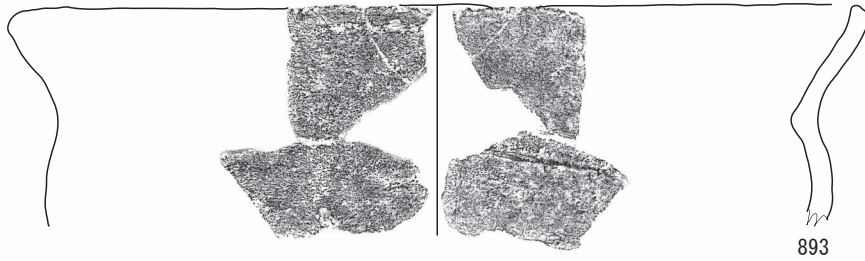
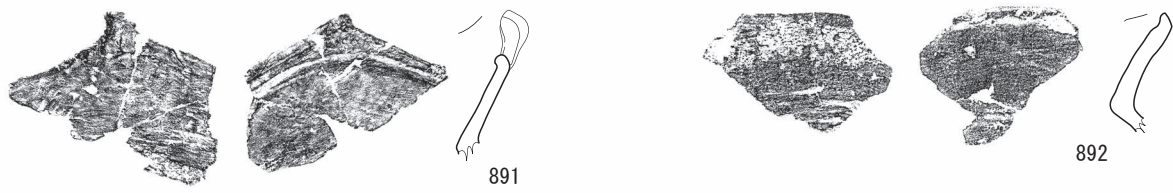
第294図 第X-a類土器(2)



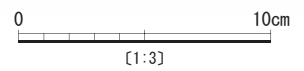
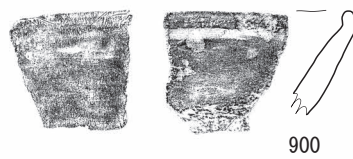
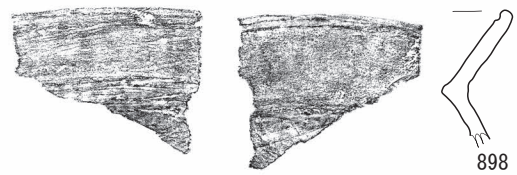
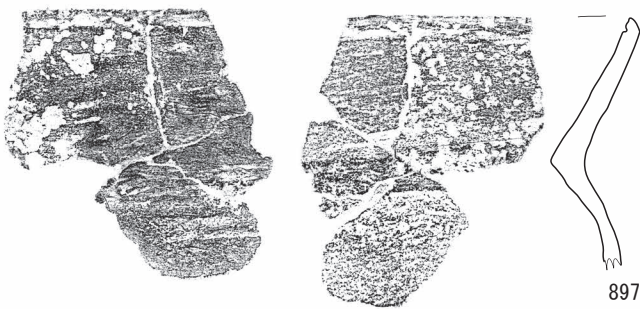
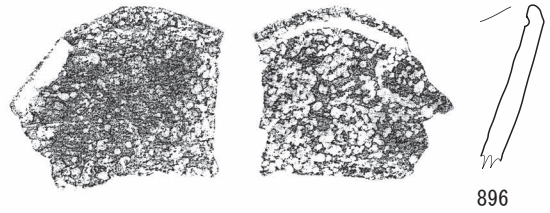
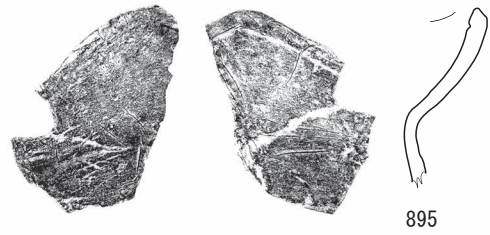
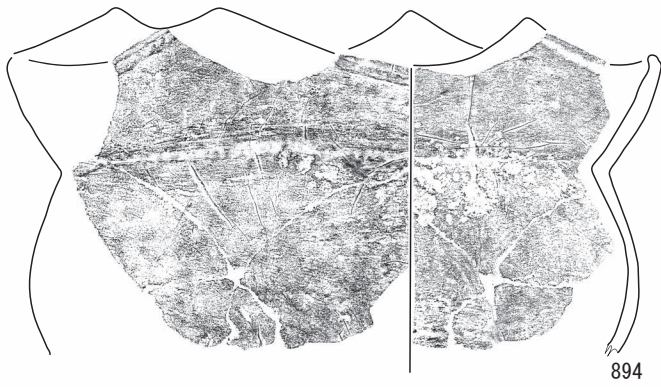
第295图 第X-a类土器(3)



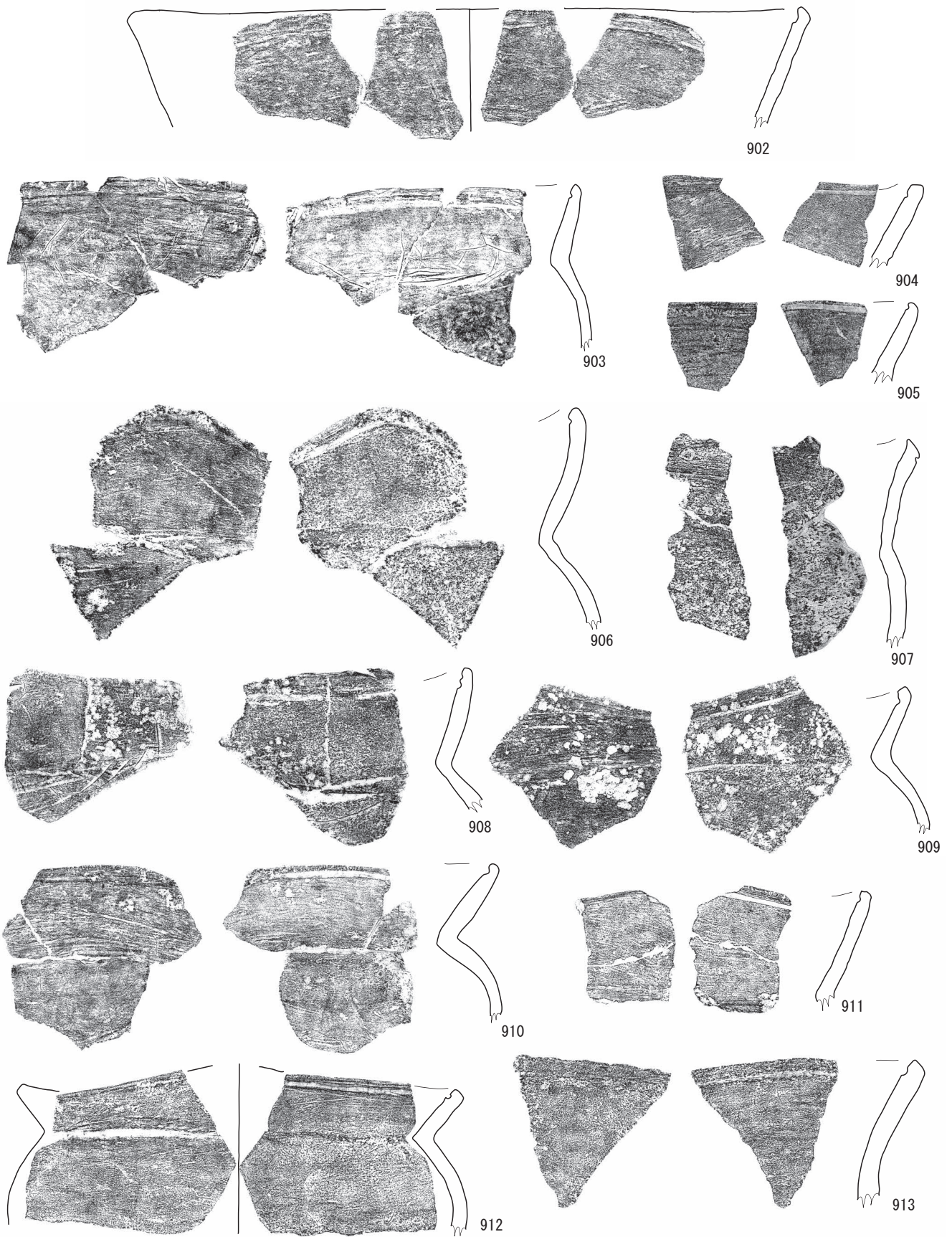
第296図 第X-a類土器(4)



第297 図 第X-a類土器（5）

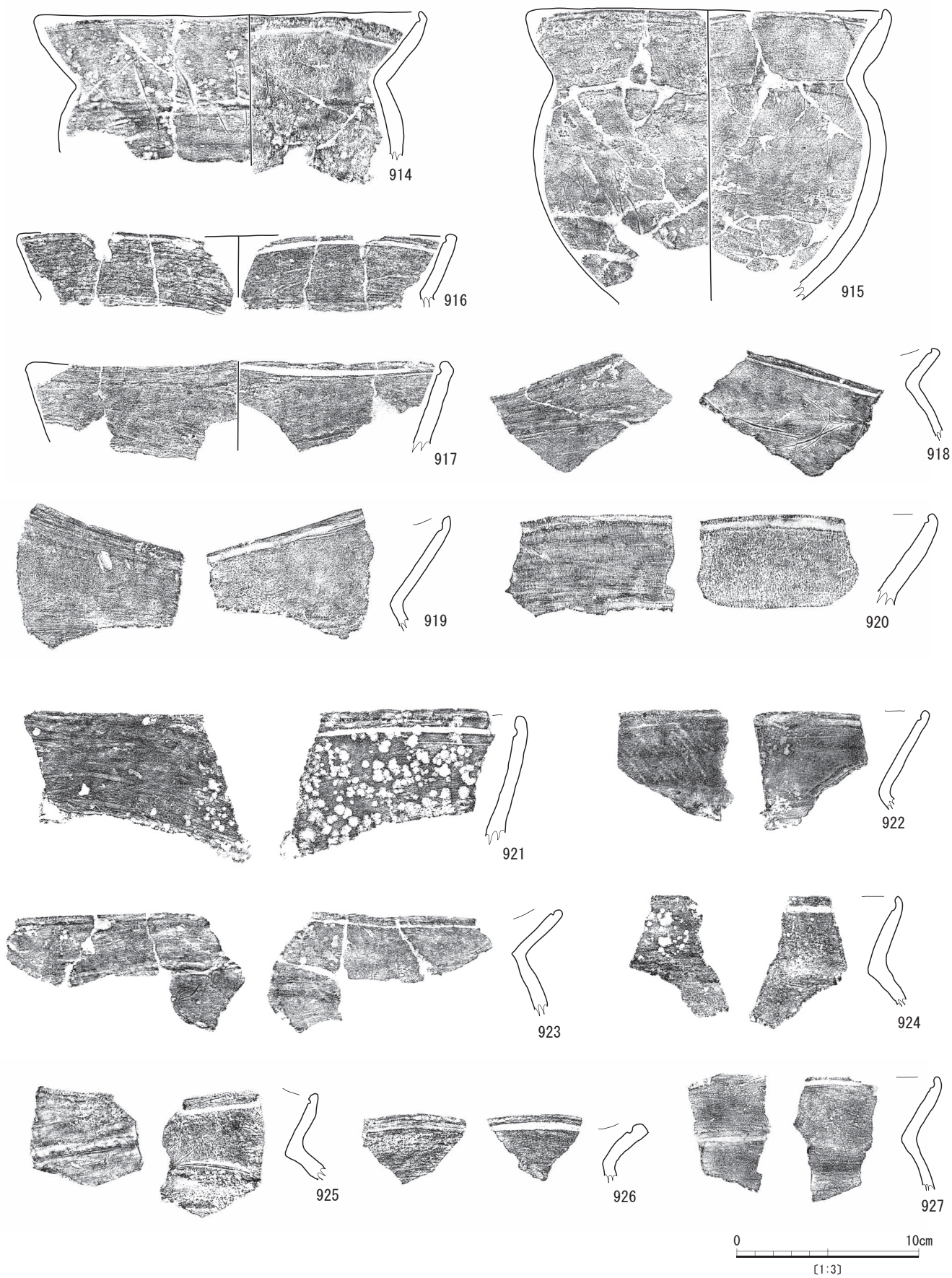


第298 図 第X-b類土器（1）

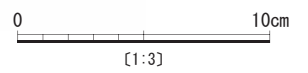
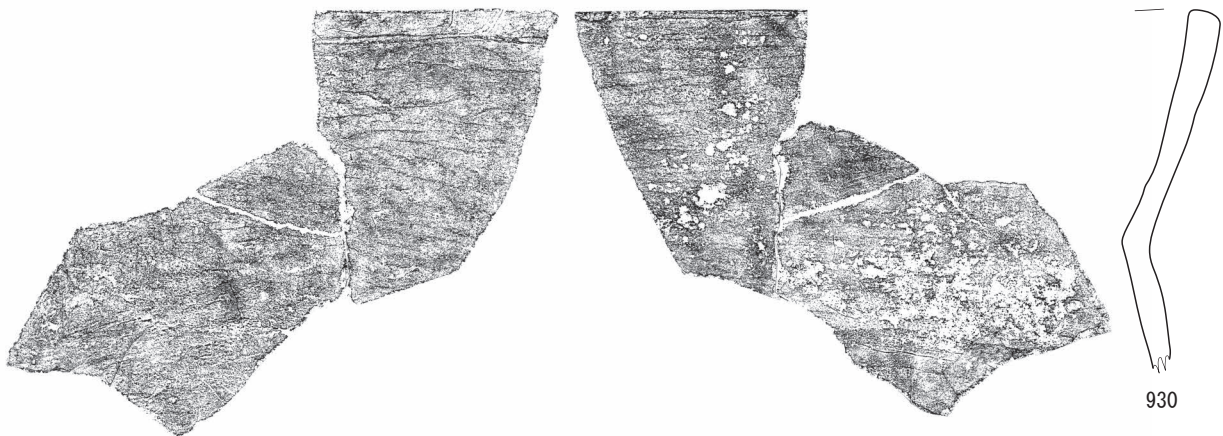
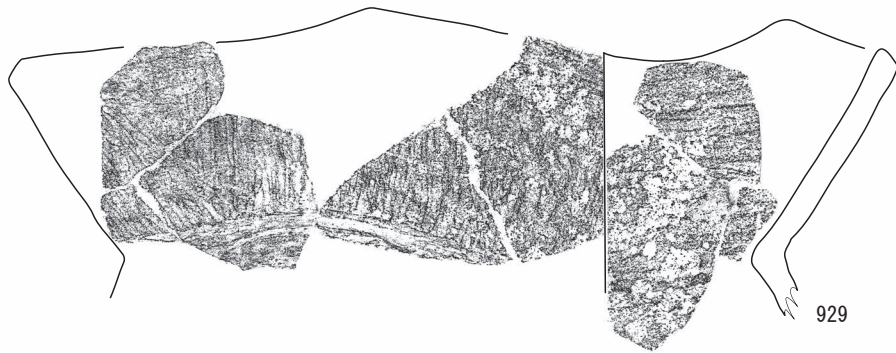


第299图 第X-b类土器(2)

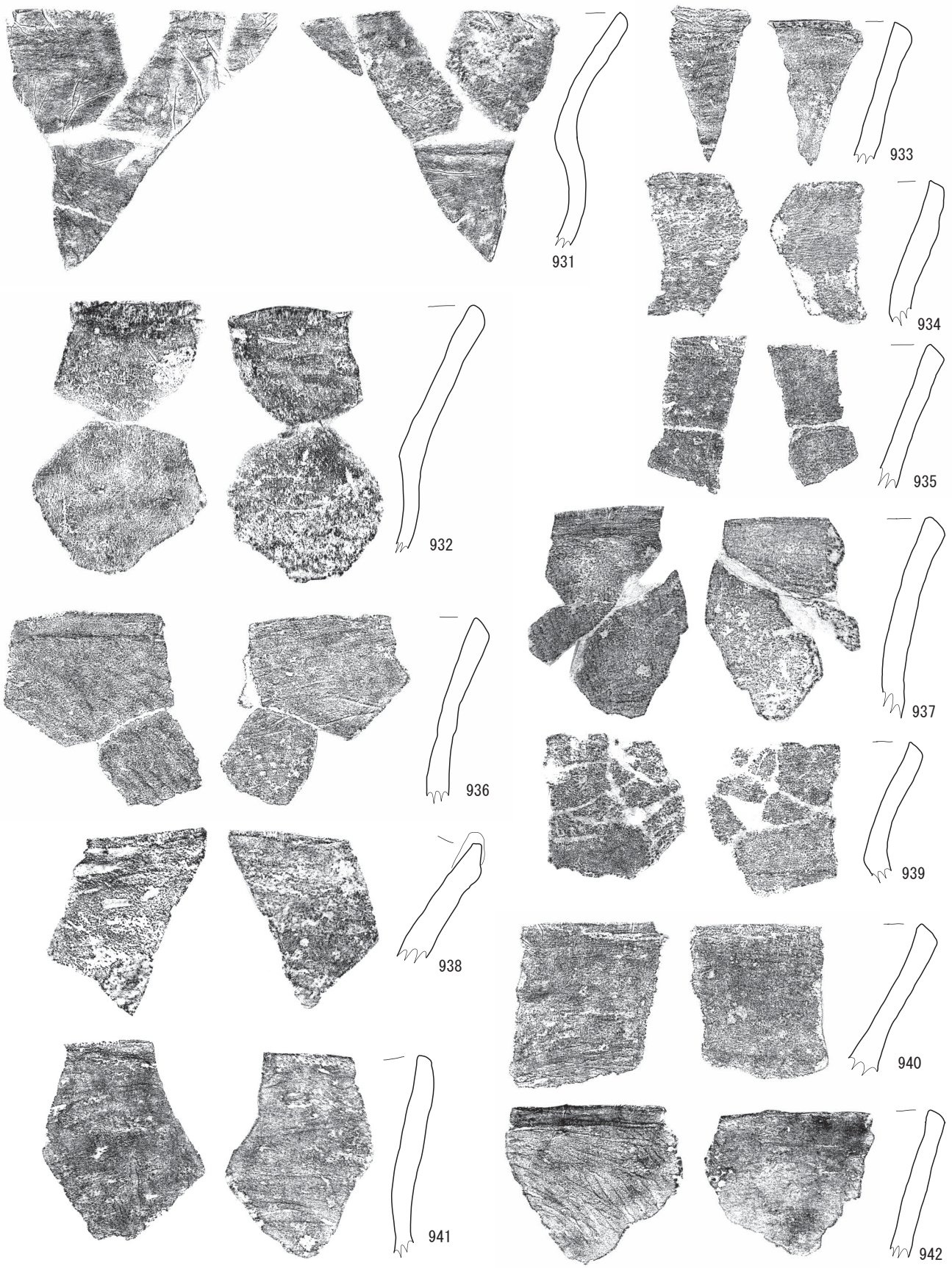
0 10cm
[1:3]



第300图 第X-b类土器(3)

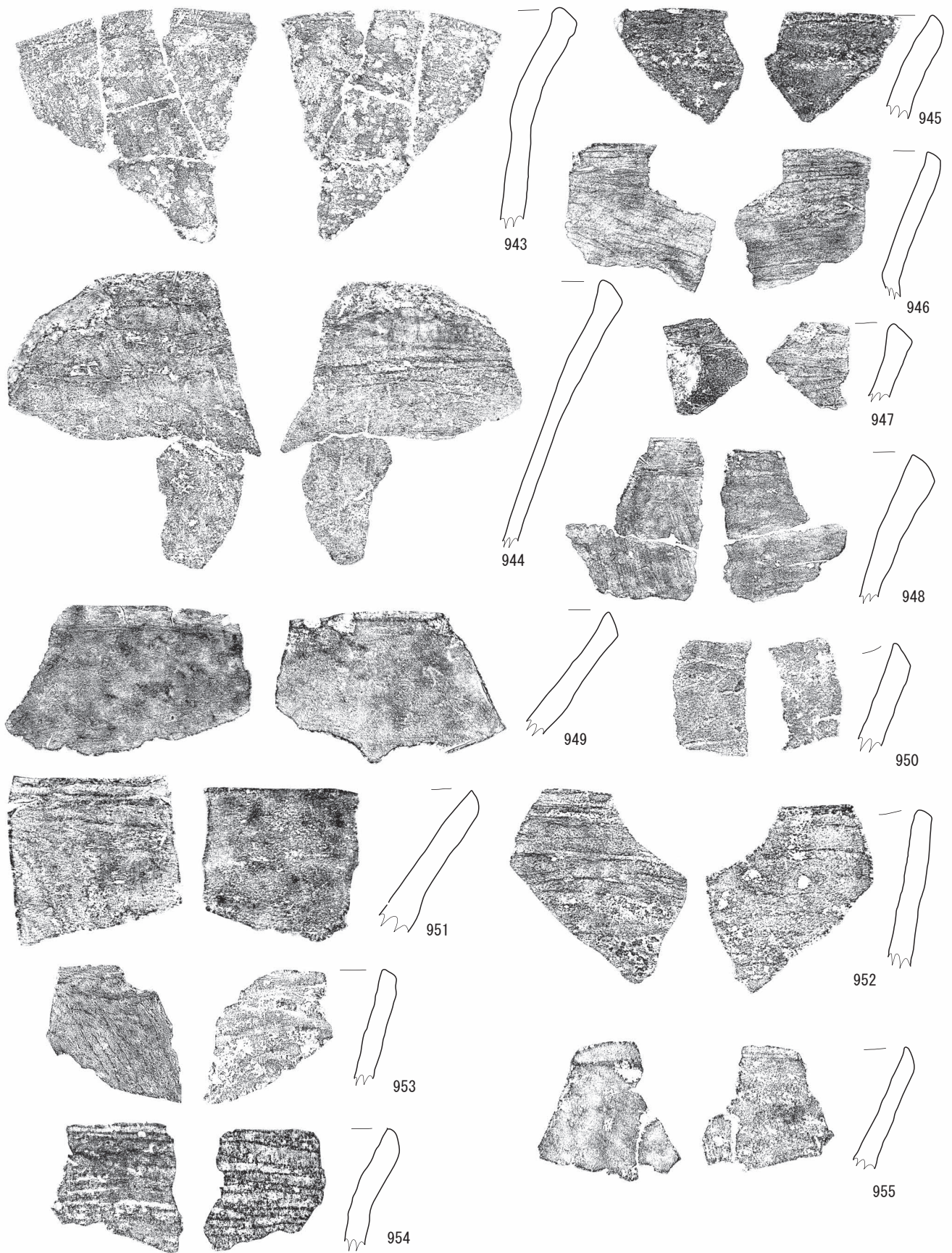


第301図 第X-c類土器(1)

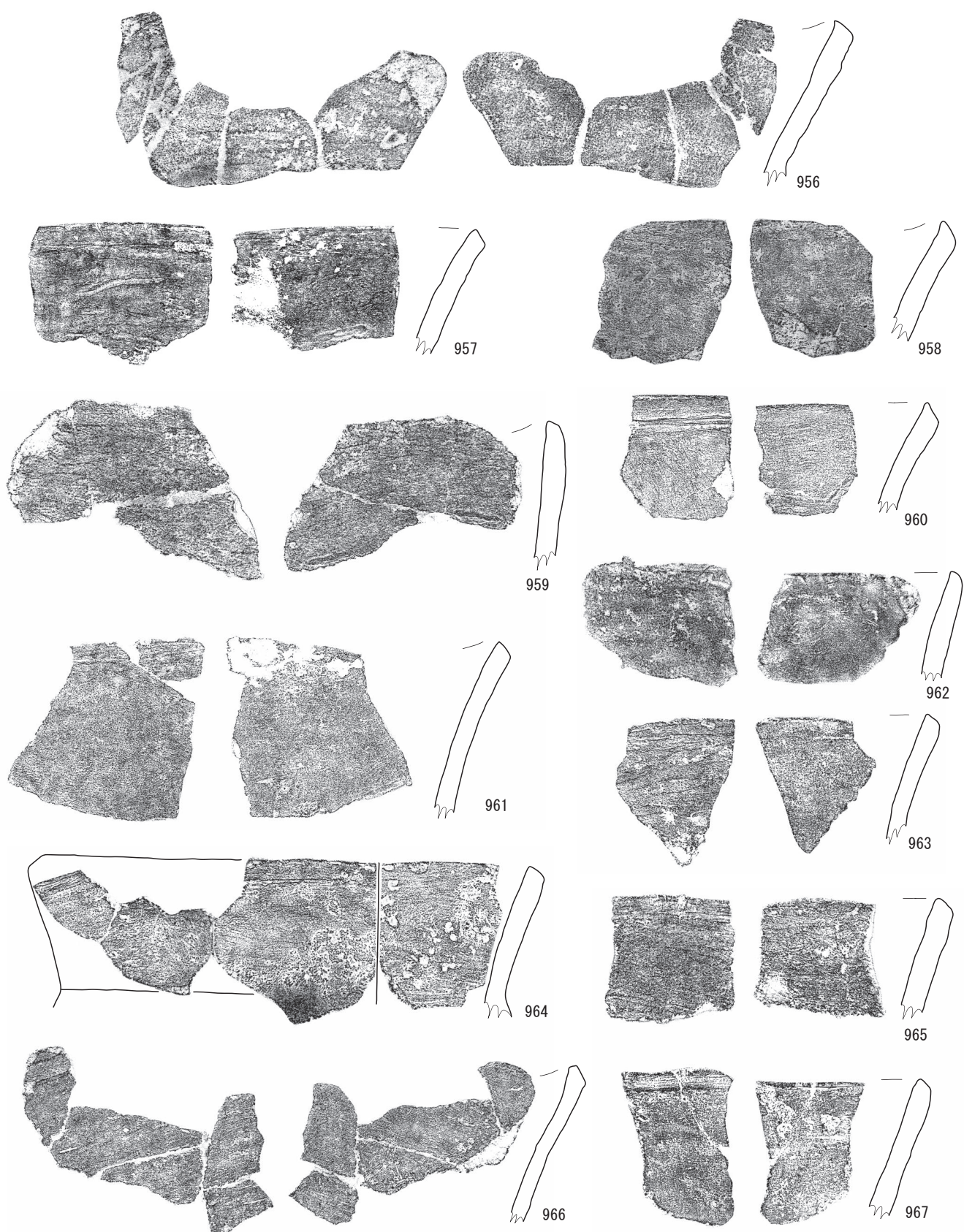


第302図 第X-c類土器(2)

0 10cm
[1:3]

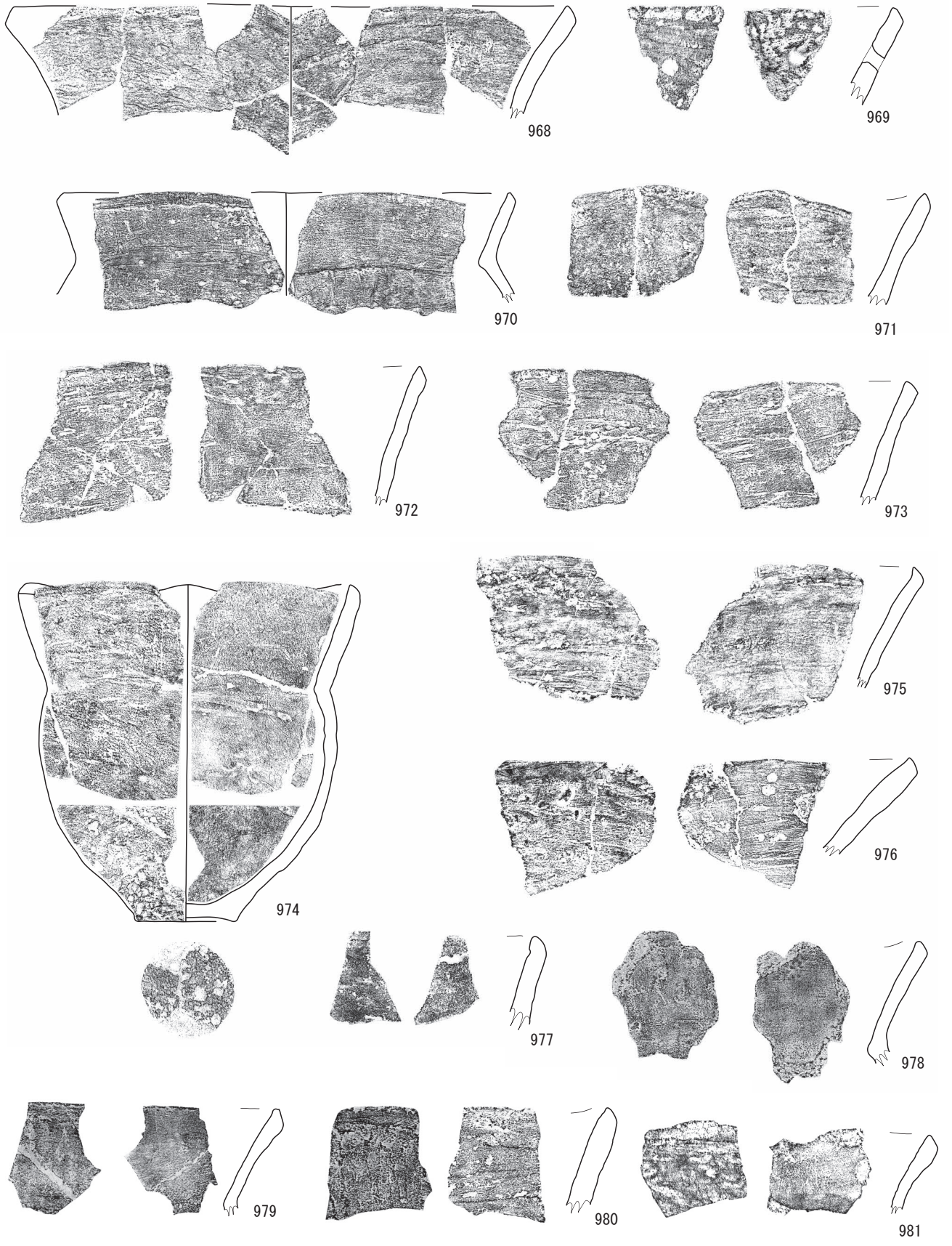


第303图 第X-c类土器(3)

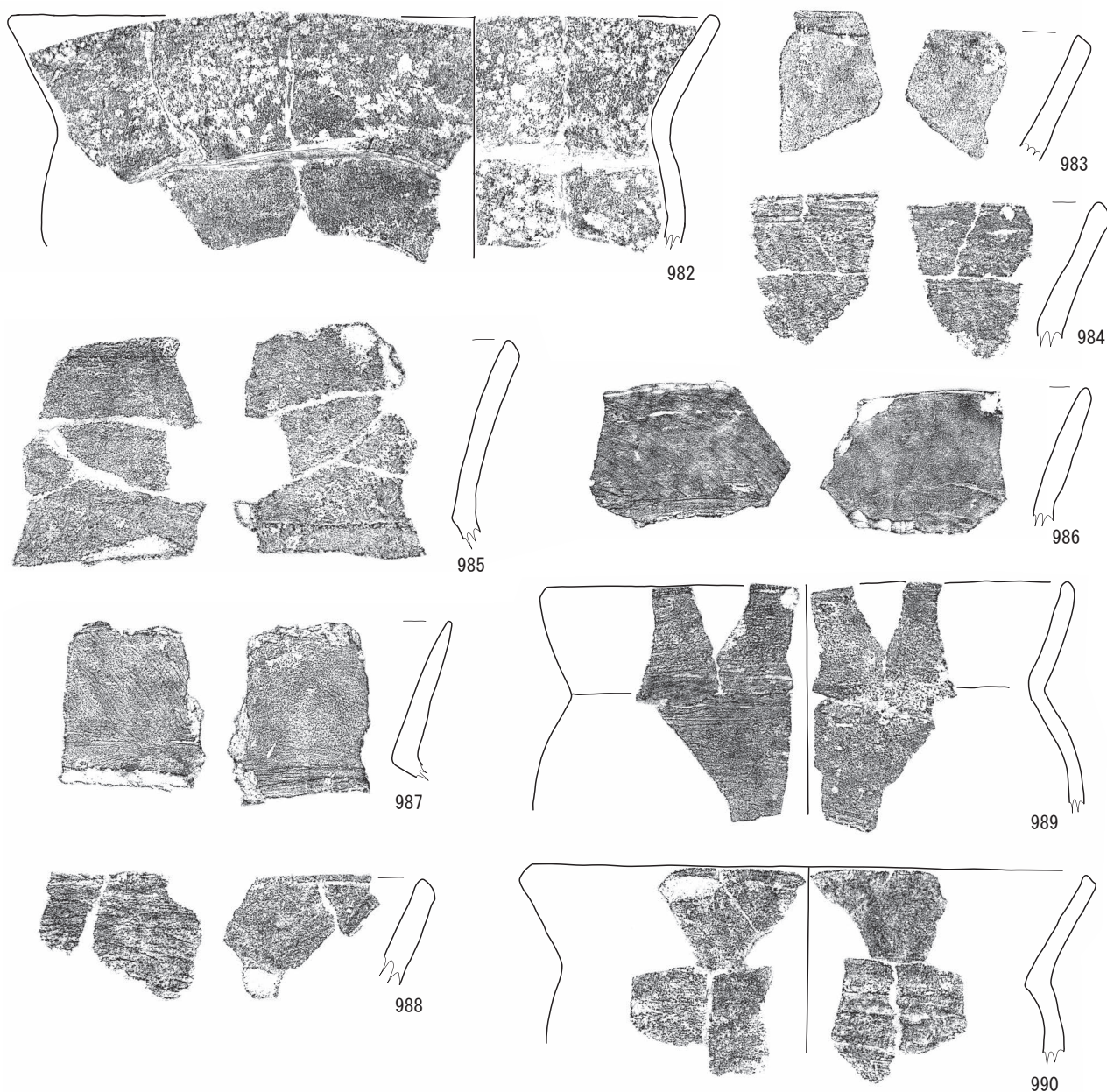


0 10cm
[1:3]

第304图 第X-c类土器(4)



第305图 第X-c类土器(5)



第306図 第X-d類土器(1)

スが多く付着し、胎土に金雲母を含む。891は波状口縁で、波頂部の2か所に工具を押し当て、波頂部が盛り上がるように整形している。

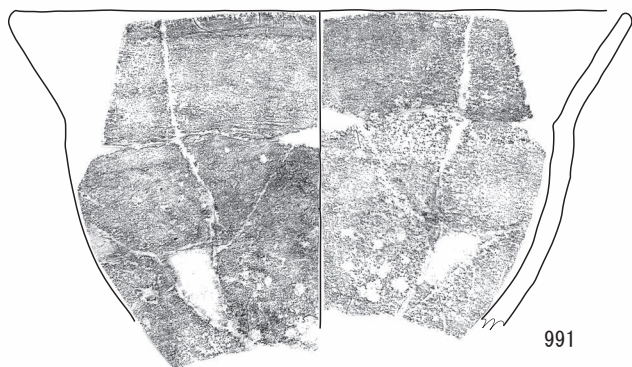
第X-b類(第298～300図894～927)

口縁端部は丸く、口縁部内側に沈線が引かれる。内外面共に丁寧にヘラミガキされる。口縁部から頸部がやや短くなり、胴径がやや上位に来て肩が張る器形である。頸部のヘラミガキ方向が横方向のものが多く、三万田式土器に伴う浅鉢に特徴が似ている。底部は胴部からすんなり収まり上げ底である。本遺跡からは三万田式土器は

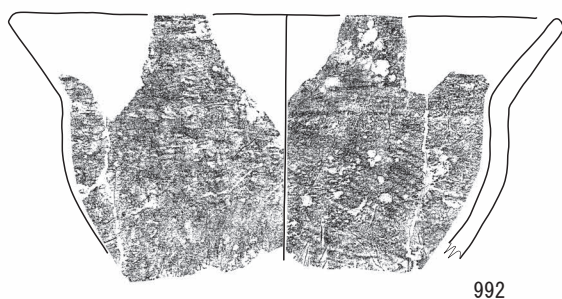
みられない。第XI類土器に伴う可能性がある。

第X-a類と同じで、大型のもの(921)、中型のもの(894・912)、小型のもの(914・915)など大きさに違いがある。

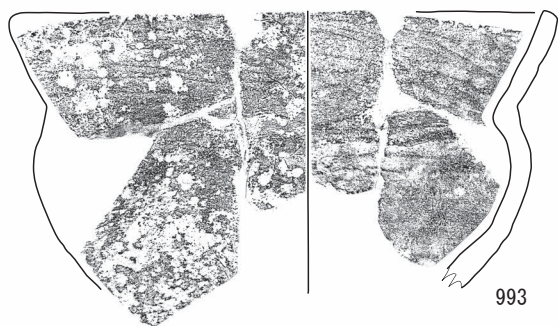
894は口縁部内側に沈線が引かれ、内外共に横方向にヘラミガキされる。口縁部から頸部がやや短いものの、肩の張りは強くない。895は口縁部内側に沈線が薄く引かれ、波状口縁である。第X-b類では珍しく粗製土器で、器壁も薄い。902は平口縁で、大型の無文土器である。第X-a類の可能性もある。912は特に口縁部から頸部が短く、胴径がやや上位にきて肩が張る。914・915



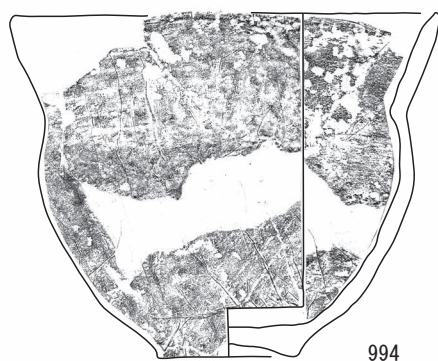
991



992



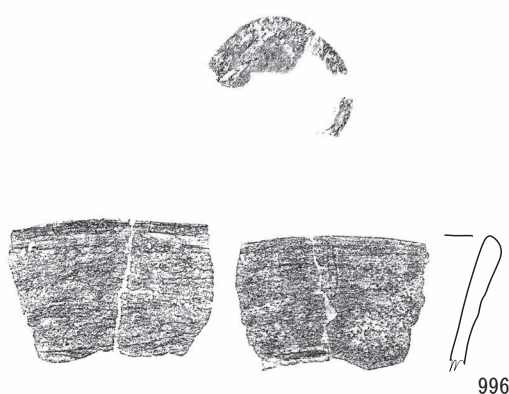
993



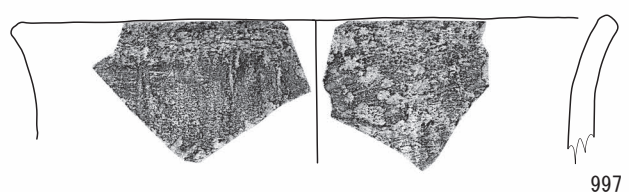
994



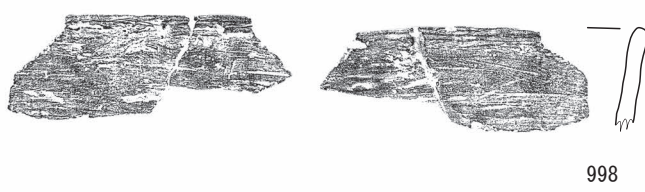
995



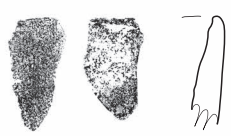
996



997



998



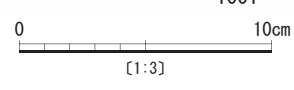
999



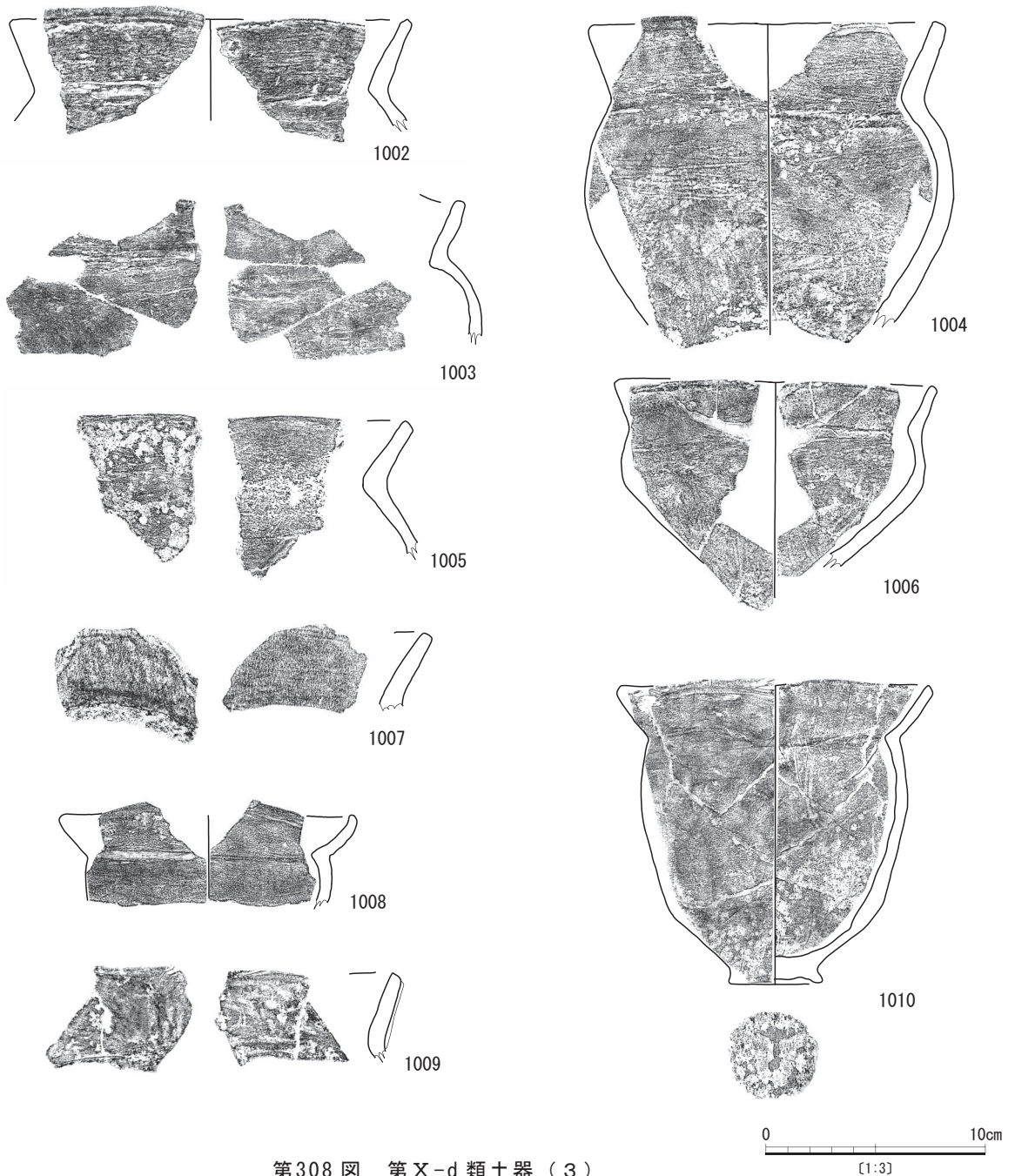
1000



1001



第307図 第X-d類土器(2)



第308図 第X-d類土器(3)

は小型で、どちらも平口縁である。921は大型で、調整は内外面ともやや粗めにヘラミガキされる。922は平口縁の粗製土器である。925は外面から頸部に凹線を入れ、頸部の屈曲を強調し、内面は明瞭な稜をなす。

第X-c類(第301～305図928～981)

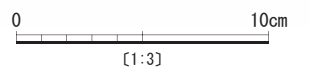
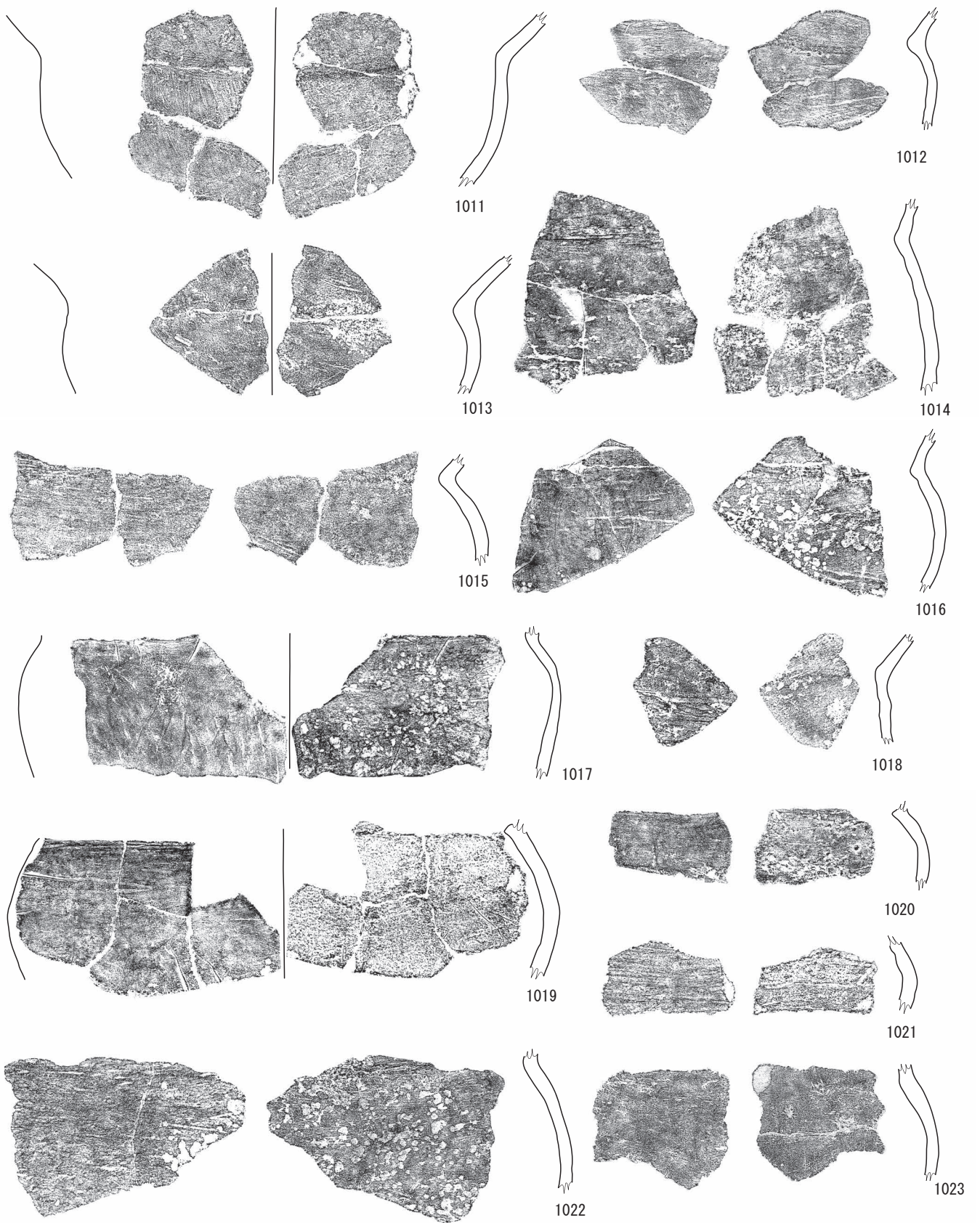
口縁部形状が第IX類土器と同様の形状で、口縁端部が屈曲して立ち上がらずに、口縁端部に狭い平坦面がある。口縁部の外反が緩くなる。器面調整はやや粗いヘラミガキである。頸部から口縁部のヘラミガキが、調整原体が幅広になったりしてヘラナデみたいなものもある。第IX類土器の口縁部形状・調整に似ており、その無文のもの

と考えられる。

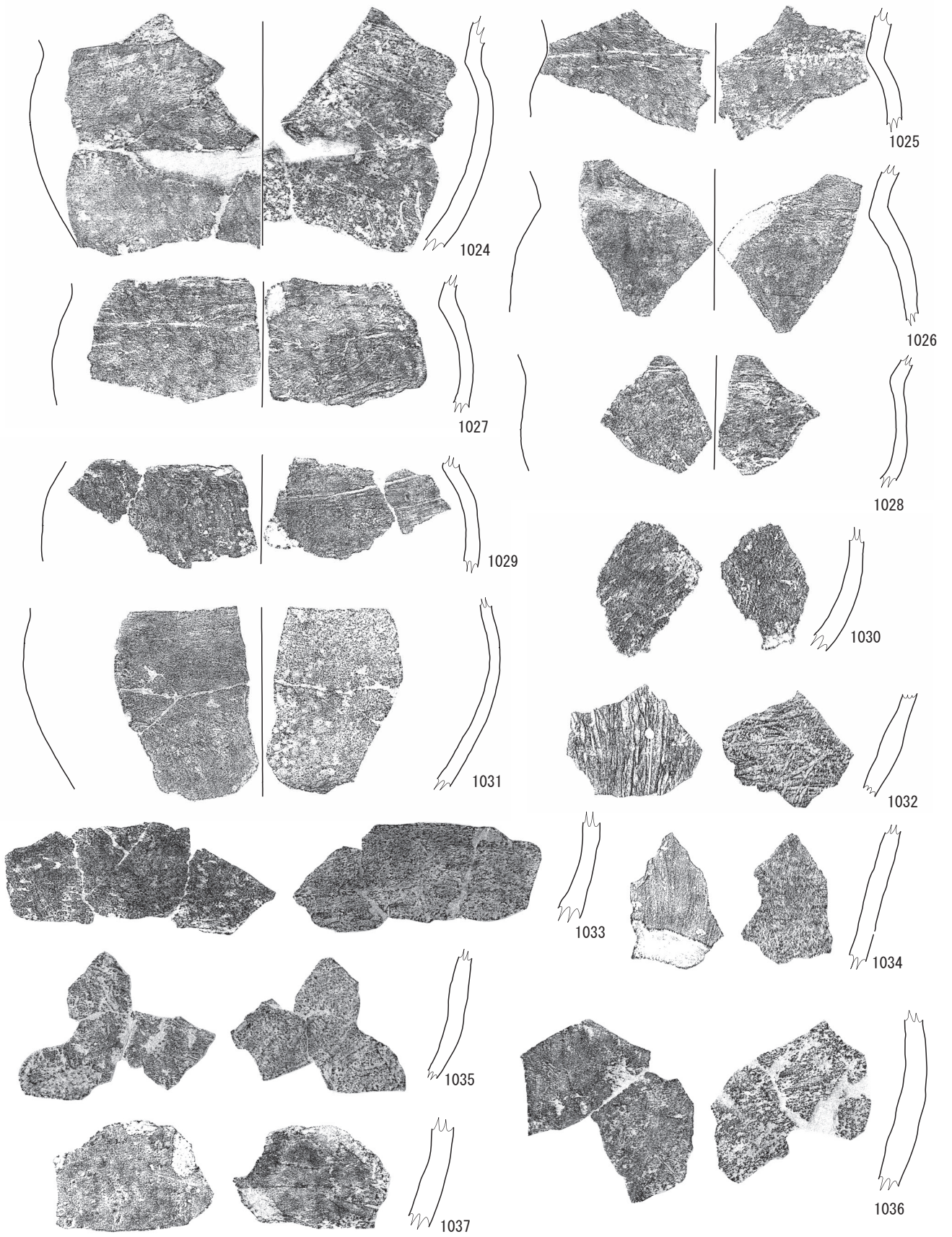
大型のもの(928～930)、小型のもの(968・970・977)などがみられ、中型のものが最も多い。

928は平口縁で、口縁端部に平坦面をもつ。大型の粗製土器である。内面調整は頸部から口縁部にかけて横方向、胴部は縦方向に、外面は横方向にヘラミガキされ、内面調整が丁寧に行われている。頸部から口縁部にかけてやや短い。

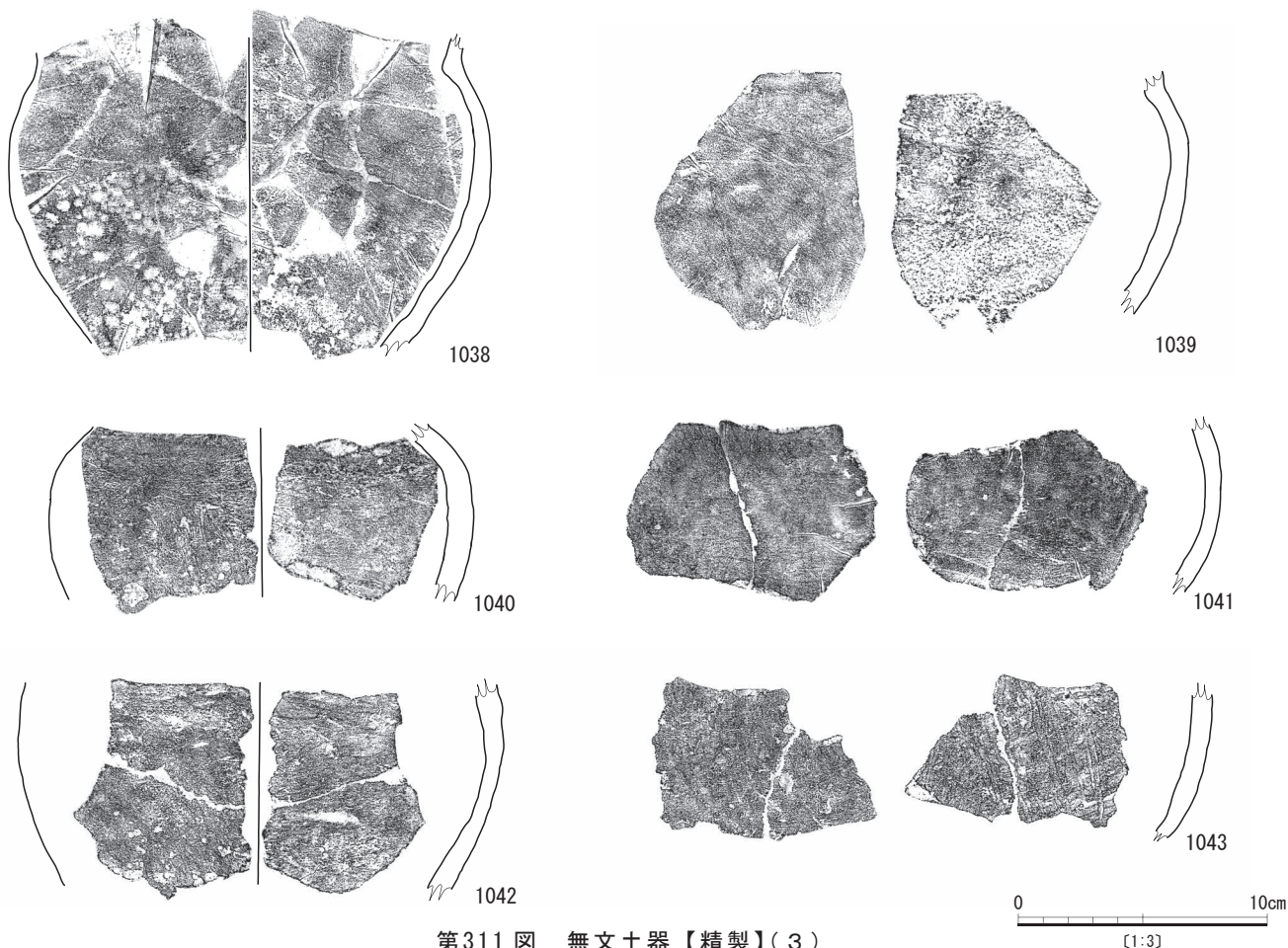
929はゆるやかな波状口縁を呈し、口縁端部に平坦面をもつ。内面調整は横方向、外面は縦方向にヘラミガキされる。頸部に凹線がみられる。930は平口縁で、大型



第309図 無文土器【精製】(1)



第310図 無文土器【精製】(2)



第311図 無文土器【精製】(3)

である。頸部の屈曲は緩やかである。949は器面調整が第X-a・b類同様に丁寧に行われている。964はスガがやや多く付着している。966は口縁端部の内と外の両側に平坦面をもつ。970は小型の無文土器である。970は第X-b類の可能性も考えられるが、口縁形状から第X-c類とした。

第X-d類 (第306～308図982～1010)

口縁端部に面をもたずに、口縁部が真っ直ぐ外反する器形である。これもヘラミガキがやや粗く、横方向の調整が卓越して、調整原体が幅広になったりしてヘラナデみたいなものもある。第XII類土器に伴う可能性がある。大型のものがみられず、中型のもの(981・989～992)、小型のもの(993・994・1002・1004・1006・1008・1010)などが多いことは、第XII類土器の深鉢形土器や台付皿形土器以外の器種を補完した可能性もある。

986は斜め方向へのヘラミガキ調整が卓越し、内面はヘラナデされている。987の口縁端部はくちばし状に細く整形されている。994は小型の無文土器で、口縁端部に面をもたない。口縁部がやや真っ直ぐに外反する。外面調整は、頸部は横方向、胴部から底部へは縦方向にやや粗めにヘラミガキされる。上げ底の底部をもつ。993・1008は胴径がやや上位にくる肩が張る第X-b類に似た器形であるが、第X-d類とした。

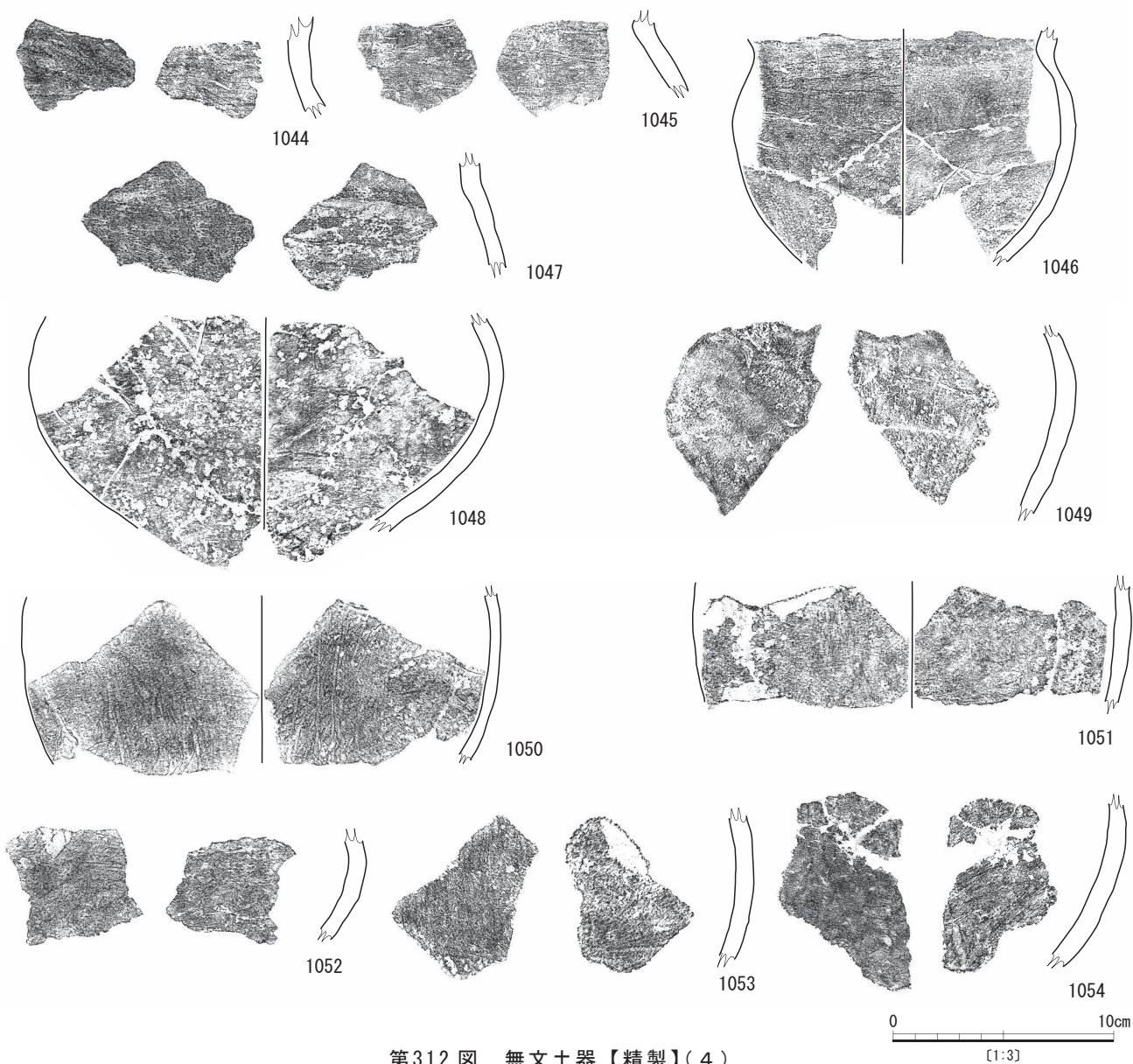
第X類 (胴部) (第309～321図1011～1179)

第X類土器を中心とする胴部をまとめた。

1011～1095の精製土器については大型のものはほとんど無く、中型のものと小型のものが多い。1096～1179の粗製土器については、大型から中型のものが多い。胴部下半の破片については、次の第XI類土器や第XII類土器のものを含んでいる可能性がある。

1011～1095は表裏面共にヘラミガキが丁寧になされる精製土器である。1015は頸部内面に明確な稜をもち、第X-b類の可能性もある。褐色の胎土をもつ。1020は胴径がやや上位にきた肩の張る器形で第X-b類の可能性もある。1025・1028は頸部の屈曲が弱い。1032は縦方向へのヘラミガキ調整が卓越している。1040は器壁がやや厚い。1046は小型の無文土器で、頸部の屈曲はやや弱く、外面調整は横方向にやや粗くヘラミガキされる。1060は頸部内面に明確な稜をもち、内外面とも横方向にやや粗くヘラミガキされる。第X-a類の可能性が高い。1071は小型であるが、器壁は薄く、第X-d類の可能性もある。1073は頸部の屈曲が強く、第X-b類の可能性が考えられる。1095は上げ底の底部をもち、底部上部付近は指押さえによる調整を行っており、全体的に粗い作りである。

1096～1179は前者に比べると、調整が粗く、器壁が



第312図 無文土器【精製】(4)

厚いものである。1098は頸部の屈曲がやや弱く、内外面とも横方向にヘラミガキされる。1105は胴部が張らない器形である。1119は頸部近くで補修孔をもつ。外面から丁寧に孔を開けている。1145の底部は平底が想定され、第V類土器の可能性もある。1151は縦方向を基本に粗くミガキ調整を行っている。1153は胎土・調整から無文土器としたが、胴部小片のため弥生土器の可能性も考えられる。1157・1159・1161・1169・1177は斜め方向、1158・1160・1162～1166・1172～1175・1178は縦方向に、1168・1170・1171は横方向にミガキ調整されている。

第XI類土器 (第322図 1180～1197)

口縁部が内傾または直口し、2条の凹線が巡る。凹線文の幅が広いものがあり、凹線と凹線で蛇腹状の形状のものもみられる。沈線のものも含む。調整は内外面とも

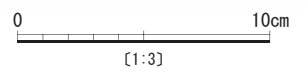
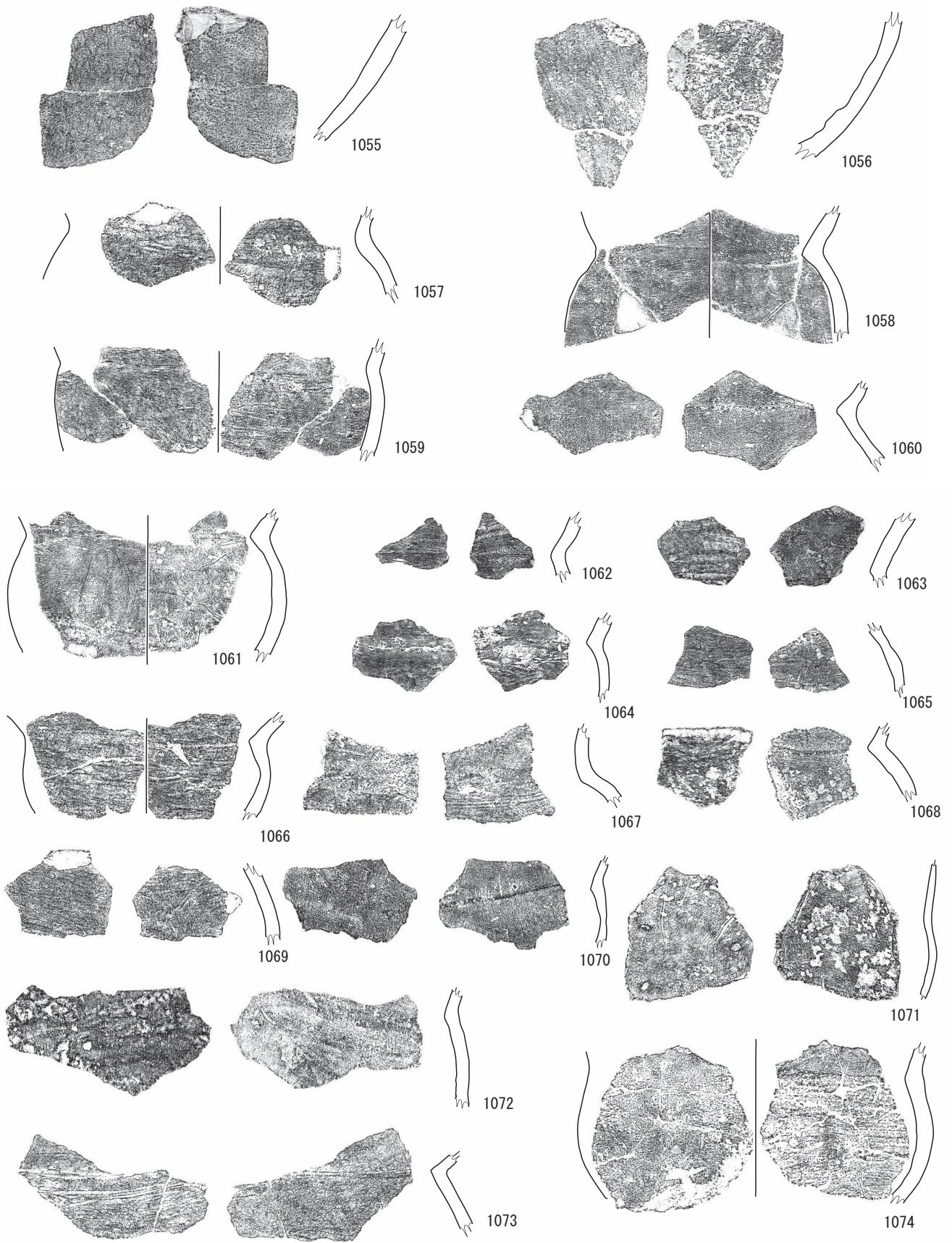
に丁寧にヘラミガキが施される。第XII-a類と比較すると口縁が肥厚せず、頸部はほぼ屈曲しない。鳥井原式～三万田式土器と併行する時期の土器群と考えられる。

1180～1186・1188・1189は口縁部が内傾する。1187・1190～1195は口縁部が直口し、1196は外反する。1183～1186・1188・1193・1195は器壁が薄く、内外面ともに丁寧にヘラミガキが施されている。1194は凹線上に凹点が施されている。1196は鳥井原式土器の特徴をもっており、凹線と凹線で蛇腹状の形状となっている。1197は内面に沈線が1条施されており、台付皿形土器の皿部と考えられる。

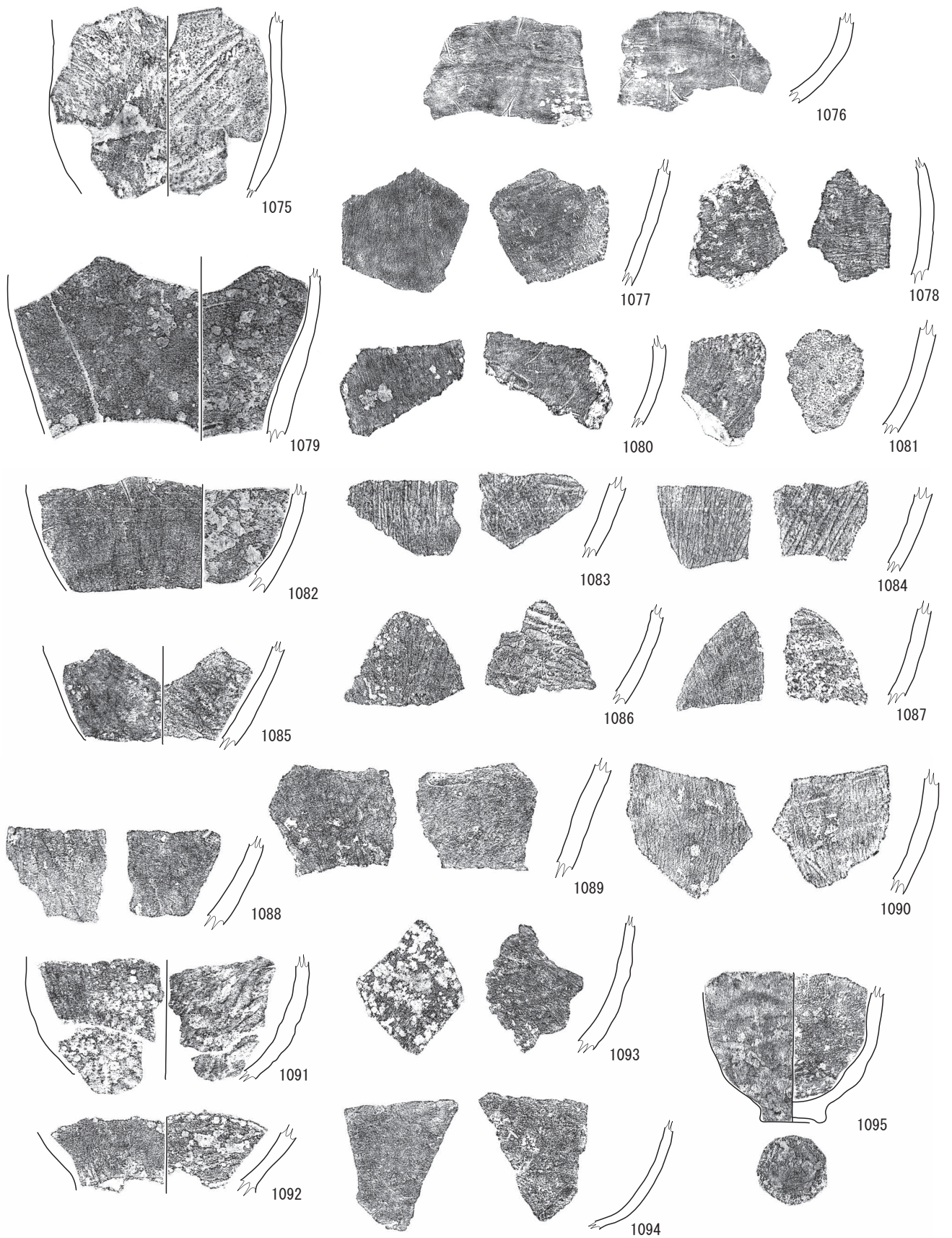
第XII類土器

第XII-a類 (第323図 1198～1219)

口縁部が内傾または直口し、2条の凹線が巡る。頸部はやや屈曲する。胴部は口径より張り出して、屈曲して

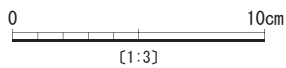
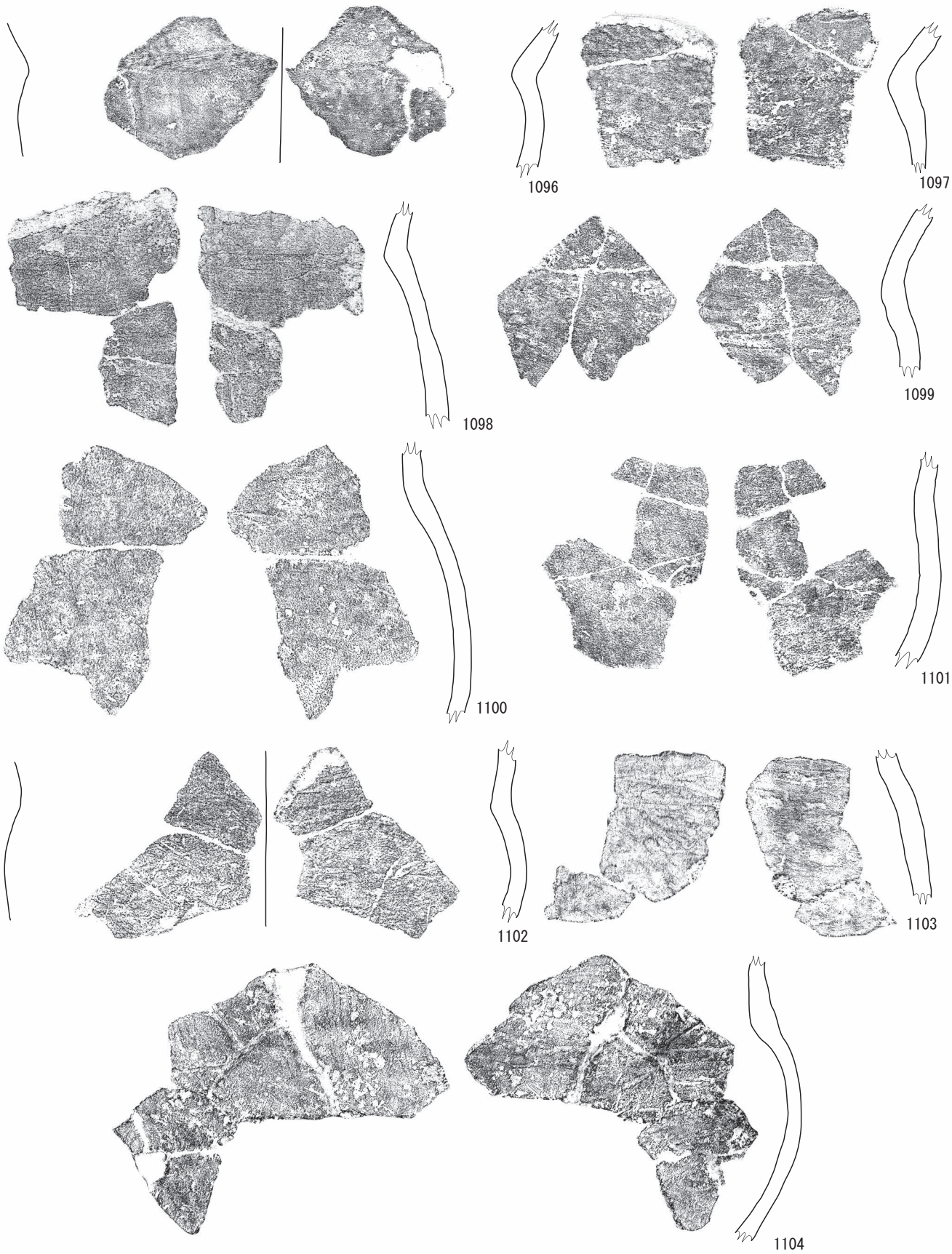


第313図 無文土器【精製】(5)



0 10cm
[1:3]

第314 図 無文土器【精製】(6)



第315図 無文土器【粗製】(1)